

平成 22 年～ 24 年度

弘前大学

つながるネットワーク!

地域でつなぐ女性人才

活動報告書



平成 22 年～ 24 年度

弘前大学

つながるネットワーク!

地域でつなぐ女性人才

活動報告書



弘前大学男女共同参画推進宣言（学長宣言）

弘前大学は、平成 21 年 8 月に男女共同参画を宣言し、同年 10 月には男女共同参画推進室を設置し、さらに平成 22 年 4 月には、次世代育成支援対策推進行動計画を策定し、男女共同参画の推進のために積極的に取り組んでまいりました。

本学の根本精神である『世界に発信し、地域と共に創造する弘前大学』の実現には、男女共同参画の推進が不可欠です。性別、年齢、国籍等を問わず、ワーク・ライフ・バランスに配慮しながら、誰もが学びやすく働きやすい環境づくりが必要です。

これからも不断の努力を重ね、以下のような取り組みをもとに、男女共同参画をより一層推進することを、ここにあらためて宣言します。

- 1 弘前大学は、教育・研究・就労・修学における機会均等を推進します
- 2 弘前大学は、男女共同参画を妨げる要因を精査し、これを排除します
- 3 弘前大学は、大学運営に関わる性別等における格差を是正し、男女共同参画を推進します
- 4 弘前大学は、仕事と家庭・地域生活の両立を可能にするワーク・ライフ・バランスモデルを構築します
- 5 弘前大学は、次世代育成支援対策を推進します
- 6 弘前大学は、国際交流を通して男女共同参画を推進します
- 7 弘前大学は、これらの男女共同参画の推進を地域社会に発信します

平成 24 年 6 月 14 日

弘前大学長 佐藤 敬

目次

弘前大学男女共同参画推進宣言（学長宣言）

ごあいさつ	1
総括	3

I 「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の概要

1. 立案の背景と課題	7
（1）課題の概要	8
（2）実施内容・実施体制	10
（3）男女共同参画推進室委員・職員・協力教員名簿（平成22～24年度）	11
（4）ミッションステートメントの達成に向けて（平成25年2月現在）	13

II 活動内容

1. 女性研究者フォーラム	17
（1）背景と目的	17
（2）実施内容	17
①女性研究者交流会	17
②特別企画	29
a) 科学者発見プロジェクト（学術情報部）との合同企画 —女子高生と女性研究者の交流—	29
b) 国内外で活躍する弘前大学の女性研究者紹介パネル展 —オープンキャンパス・総合文化祭—	29
2. 女性研究者の研究力向上	31
（1）背景と目的	31
（2）実施内容	32
①学外研究交流支援	32
a) 学会開催マニュアル	32
b) 学会開催時における託児支援制度	32
②研究支援員制度	34
③研究資金獲得支援	36
a) 論文投稿費助成金および英文校閲費助成金	36
b) 学内の英文校閲機関	36
c) 科研費アドバイザー制度に関する現状調査（部局担当者への聞き取り）	37

d) 研究助成金申請書の閲覧	38
④研究成果公表支援	38
a) 国際学会対策セミナー（全2回）	38
⑤パートナーフェロー制度の試行	40
a) パートナーフェロー制度の概要	40
b) 成果と課題	40
⑥特任教員・理系女性フェロー	41
a) 特任教員・理系女性フェロー制度の概要	41
b) 成果と課題	42
3. 理系研究者の裾野拡大	43
(1) 背景と目的	43
(2) 実施内容	44
①情報の統合と発信	44
a) 理科離れ対策支援専門委員会との連携	44
b) イベントカレンダー作成と配布	44
②理系への関心を高める実施イベント	44
③学生サイエンスサポーターの育成	54
4. 基盤環境整備	54
(1) 背景と目的	54
(2) 現状把握調査体制	54
①本学における男女比率の現状	54
②本学教員と大学院生における女性比率の推移	57
(3) 意識調査・実態調査	59
①研究継続と活性化のための男女共同参画推進に関する調査	59
②弘前大学における女性研究者の比率向上に向けた取り組みに関する部局長アンケート	60
③弘前大学における男女共同参画の取り組みに関する各部局等アンケートについて	60
④男女共同参画に関する意識・実態調査	60
⑤弘前大学ハラスメント相談体制に関する調査	61
⑥ひろだい保育園調査	62
⑦ワーク・ライフ・バランスインタビュー	63
⑧病児保育の要望検討	64
(4) 広報・情報発信	64
①ニューズレター『さんかくつうしん』発行	64
②ロゴマーク・ポスター募集（審査、決定、表彰式開催）	65
③弘前大学男女共同参画宣言リーフレット作成	65
④ウェブサイト作成・管理	65

a) 弘前大学男女共同参画推進室ウェブサイト開設	65
b) つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才ウェブサイト開設	66
⑤ワーク・ライフ・バランス実現に向けた取り組み	67
a) 休暇等制度一覧及び内容についてウェブサイト公開（学内版）	68
b) 教職員のための制度・手続き等情報ナビの構築と相談窓口	69
c) 「情報ナビに関する意識調査」から見えたもの	70
d) 育児・介護支援冊子の作成	72
⑥情報共有サーバシステム	72
(5) 意識啓発・意識改革	73
①評議会講演会「大学における男女共同参画推進の効果」	73
②講演会、セミナー	74
a) 弘前大学「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」キックオフ講演会	74
b) 弘前大学「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」第3回講演会開催	75
c) 「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」第4回セミナー開催	76
d) 「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」 第5回弘前大学男女共同参画推進室セミナー開催	77
5. 他機関および地域との連携	78
(1) 背景と目的	78
(2) 文部科学省科学技術人才育成補助事業	
女性研究者研究活動支援事業（旧女性研究者支援モデル育成）合同シンポジウム	78
①女性研究者支援システム改革プログラム事業合同シンポジウム	
「未来を築く女性研究者の飛翔に向けて」	79
②女性研究者研究活動支援事業 合同公開シンポジウム	
「女性研究者支援に向けた持続可能な取組の実現 ～「モデル的取組」から「研究とライフイベントの両立」へ～」	79
③女性研究者研究活動支援事業 合同シンポジウム	
「今後の女性研究者研究活動支援について」	80
(3) 北東北国立3大学連携推進会議・男女共同参画推進合同シンポジウム	81
①平成22年度北東北地域の大学連携による男女共同参画推進シンポジウム	
「男女共同参画から多様な人材が生きる大学へ」 於岩手大学	82
②平成23年度北東北地域の大学連携による男女共同参画推進シンポジウム	
「ライフステージに応じた多様な支援の実現に向けて」 於秋田大学	83
③平成24年度北東北国立3大学連携推進会議・男女共同参画推進合同シンポジウム	
「北東北地域大学間連携による男女共同参画の推進に向けて」 於弘前大学	84
(4) 学園都市ひろさきコンソーシアム6大学	85
①講演・シンポジウム	86

a) 弘前大学生涯学習教育研究センター主催生涯学習連続講演 『明日の教育を考える』	86
b) 学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム合同シンポジウム	86
②女性研究者フォーラム女性研究者交流会	87
(5) 産業総合研究所ダイバーシティ・サポートオフィスネットワーク (DSO)	87
(6) 青森県・弘前市との連携	87

Ⅲ 資料

1. 宣言・基本計画	89
(1) 弘前大学男女共同参画推進宣言	89
(2) 弘前大学男女共同参画推進基本計画	92
2. 女性研究者フォーラム	95
(1) お茶会	95
(2) 特別企画	95
3. 女性研究者の研究力向上	97
(1) 研究力を強めるセミナー	97
4. 理系研究者の裾野拡大	97
(1) イベントカレンダー	97
(2) イベント	98
5. 基盤環境整備	100
(1) 講演会	100
(2) セミナー	100
(3) 情報の共有化	101
6. 他機関および地域との連携	102
(1) 文部科学省科学技術人材育成補助事業 女性研究者研究活動支援事業 (旧女性研究者支援モデル育成) 合同シンポジウム	102
(2) 北東北国立3大学連携推進協議会・男女共同参画推進合同シンポジウム	103
7. さんかくつうしん	104

おわりに

ごあいさつ



佐藤 敬

国立大学法人 弘前大学 学長

弘前大学の『つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才』は、文部科学省による女性研究者研究活動支援事業の下に、平成22年度から3年間にわたって実施され、平成24年度をもって終了するものです。本事業においては、弘前大学男女共同参画推進室を拠点に、女性研究者の交流と研究の活性化、主として女性の理系研究者の裾野の拡大などを図り、地方型の女性研究者育成モデルを確立することを目的としてきました。

その具体的取組と成果の詳細に関しては、この活動報告書の内容に譲りますが、弘前大学においても女性研究者の活躍の度合いが高められ、そのことは、女性教員の比率をはじめとする、さまざまな数値目標にも明確に表れています。なかでも、女性研究者の科学研究費補助金の申請と採択が、この間に大幅に伸びたことは大きな成果でした。また、本事業は北東北三大学（秋田、岩手、弘前）連携や学園都市ひろさきコンソーシアムの枠組みの中でも進められたことは特筆されるべきものと思います。

これらの成果もさることながら、女性研究者の支援という考え方が全学的に定着したことが最も大きな成果ではなかったかと思えます。昨年6月には、『弘前大学男女共同参画推進宣言（学長宣言）』を公表し、「性別、年齢、国籍を問わず、ワーク・ライフ・バランスに配慮しながら、誰でも学びやすく働きやすい環境づくり」を目指すことを宣言しました。男女の区別なく、さらには多様な人材が等しい機会の下に、業務に携わることが組織の活性化につながるという考え方は、社会のどの分野についてもあてはまることであり、大学が例外であるはずはありません。

このような考え方が以前からのものであるのは間違いありませんが、それが具体化されたという意味で、『つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才』事業は、弘前大学の教育・研究活動の歴史において一つの重要な転換期になったと言っても過言ではありません。

しかし、これまでの取組以上に、それを確固たるものにしていくことがより重要であると考えるとききました。さまざまな制約はありますが、この時代的思潮を本学においても大切にしていかなければなりません。本事業の理念をしっかりと受け継ぎ、その取組を定着させて、さらには可能な限り発展させていくことが、私たちに課せられた義務でもあります。そのことを本学の重要な課題の一つに位置付け、今後も全学一体となって努力していくことを、この活動報告書とともに再確認したいと思います。

ごあいさつ



大 河 原 隆

弘前大学理事（社会連携・男女共同参画担当）・副学長

「女性研究者研究活動支援を「てこ」に大学と地域の活力を高める」

平成 22 年度から 3 カ年にわたり、各方面からのご協力をいただいて展開してきた「つがルネッサンス！地域でつなぐ女性人才」が最終年度を迎えました。この事業によって、本学の男女共同参画は多くの面でさらに推進されました。まず、女性研究者のネットワークができ、現場の声が環境整備に反映されるしくみが構築されました。研究支援体制の整備が進み、研究活動も活発化しています。散在していた情報が集積されたことで、地域と連携した理系の裾野拡大の活動もひろがりました。意識啓発も進み、女性研究者比率は徐々に高まってきました。

このような事業を「てこ」に、男女共同参画を進めることは、大学の活力を高めるだけでなく、地域の将来を担う人材を育てるという意味でも重要です。その意義は大学内にとどまらず、地域社会全体が共有する課題への広がりを持っているといえます。

本事業終了後も、女性研究者研究活動支援を継続・発展させ、地域とのさらなる連携と協働を進めながら、男女共同参画推進のための環境整備により一層努めたいと考えています。



日 景 弥 生

弘前大学教育学部教授
弘前大学男女共同参画推進室長

「本学男女共同参画のさらなる推進に向けて」

文部科学省科学技術人材育成費補助金による女性研究者研究活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）「つがルネッサンス！地域でつなぐ女性人才」が今年度で終了いたします。

この事業では、女性研究者への支援を、積極的に展開いたしました。例えば、研究支援員制度の創設、学会託児支援、“情報ナビ” 開設、本学女性研究者のパネル作成・展示などをはじめ、学内外の女性研究者を中心としたネットワークづくりにも着手いたしました。

この結果、本学の女性研究者の割合は上昇しており、学内外に女性研究者支援の意義と重要さを明らかにしました。得られた成果は、今後の男女共同参画推進室の事業に活かしながら、さらなる支援を行っていきたいと考えております。

男女共同参画推進室は、今後もすべての人が学びやすく働きやすい大学、さらには活力あふれる大学に進化するための提案をして参ります。教職員、学生、地域の皆さまからのこれまでの様々なご支援に感謝するとともに、今後も多数のご意見やご助言をお願い申し上げます。

総 括

弘前大学は、平成 22 年度～平成 24 年度文部科学省女性研究者研究活動支援事業（旧科学技術振興調整費女性研究者支援モデル育成）の採択を受け、「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」事業を展開してきた。

本学はこれまで地方に立地する総合大学として、男女共同参画の重要性を強く認識し、遠藤正彦学長（当時）のもとで、さまざまな取り組みに着手してきた。平成 17 年度には、文京キャンパスの教員について一部裁量労働制を導入して、柔軟な働き方を可能にする基礎を整え、平成 20 年 4 月には、本町キャンパス内に 24 時間対応の学内保育園を開園した。さらに平成 20 年 12 月に男女共同参画推進準備室を発足させ、平成 21 年 8 月 3 日には「弘前大学男女共同参画宣言」を公表した。また、同時に公表した「弘前大学男女共同参画推進基本計画」に添って、平成 22 年度～平成 24 年度を弘前大学男女共同参画推進の第一フェーズ（スタートアップ）、平成 25 年度～平成 27 年度を第二フェーズ（行動計画の本格実施）と位置づけ計画の実施に踏み切った。同年 10 月 1 日には学長直属の組織として男女共同参画推進室が開室し、男女共同参画を所掌する担当理事が置かれて、男女共同参画の推進を図る全学的な体制が整えられた。平成 22 年度の採択を受けた「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」事業は、本学男女共同参画推進行動計画の第一フェーズとも重なり、女性研究者の研究活動支援の展開を契機とした全学的な男女共同参画を強く進めたといえる。

これに先立つ数年間、本学では女性教員比率を向上させることが課題となっていた。とくに理系学部で女性教員比率が低く女子学生比率との不均衡があること、女性研究者の応募が少なく、新規採用者に占める女性比率の低下傾向が問題視された。その背景には、本学が本州最北端にあるという立地の不利が関わっている。大都市圏との地理的な隔たりは、学外との研究交流の障害となりうるし、通勤圏内にある他大学や企業の数少なくパートナーの職が得にくいなど、遠隔地方都市の諸条件が応募の懸念材料になる。赴任後は学内の他の女性研究者との交流が少なく地元のネットワークも築きにくいなど、定着しにくい側面もある。

このように不利な条件を補い、地方都市の利点を生かすことによって、大都市圏とは異なる女性研究者研究活動支援をめざして立案したのが本事業であった。ここでは弘前市のもつコンパクトな都市構造や、行政・民間双方における育児・介護支援の篤さ、町内会などを基礎とした地域社会ネットワークなどを地域資源とみなし、本学がこれまで取り組んできた地域連携や多様な学外向け諸事業の蓄積を相互につなぐことによって、小さな財源でもできる持続的な仕組みを構築することを目的とした。

具体的には、女性研究者のネットワーク作りをめざす女性研究者フォーラムの新設とともに、「強めるタスクチーム」と「広げるタスクチーム」という2つの目的別タスクチームを編成した。「強めるタスクチーム」は、研究資金獲得、研究成果公表などの支援や、教員のパートナーを採用し研究継続を可能にする制度の検討を進めた。「広げるタスクチーム」は、学内外に向けた諸取組みを通して理系の裾野拡大をはかる。男女共同参画推進室はこれらの活動のための基盤的環境整備を行った。

これらの取り組みのうち、もっとも直接的な効果が見られたのは女性研究者フォーラムである。それは学部や世代を超えて生の声の交流の場となり、当初の事業予定にはなかった取り組みの実現を促した。それらは平成24年度からの研究支援員制度の開始や病児保育ニーズ調査などの形で実現をみたものであり、相互の情報交換と大学による基盤環境整備の取り組みが有機的に結びつく結果を生んだといえる。平成24年からは「学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム」に所属する他大学の教員も参加する会となった。また、休暇手続きや学内外の育児・介護に関わる諸制度の情報を集積した「情報ナビ」の公開、「支援ブック」の発行によって、これらの制度へのアクセスが格段に容易になり、基盤環境整備が進展した。とくに育児や介護支援に関わるサービスでは、行政や民間の活発な活動があるため、これらの情報をまとめて利用できるようになったことで、大学がすべてを抱え込まなくても環境整備が可能になり、また、本学の教職員がこのサービスを利用することによって、行政や民間の活動も促進されるという有機的な相互関係を構築する基盤ができた。このようなやりかたは地方都市型の支援環境整備モデルとなりうる。

「強めるタスクチーム」は、学内6学部から協力教員を募り女性6名男性4名で構成した。まず学会開催マニュアルの作成により弘前での学会等の開催を促し、大都市圏に出かけなければならない負担を緩和することとした。学会への子連れ参加を容易にするために、地元NPOと契約を結んで保育者を確保するとともに、託児室開設費の助成を行い、利用実績をあげている。また、研究活動支援として情報共有サービシステムを用いた各種助成金情報の集積を進めると同時に、相談員制度や模範となる申請書の閲覧などの実施を進め、効果を上げた。さらに研究成果公表支援のニーズ調査として論文投稿費と英文校閲費の助成を行いその効果を確認したほか、国際学会対策セミナーを実施して好評を得た。これらは本事業終了後も引き継がれることとなっている。

常勤教員のパートナーをフェローとして採用する制度の反響は大きく、制度の試行から2年間で4件の常勤教員の公募事案について12件の応募と7件の問い合わせがあった。本事業におけるパートナーフェローは、修士号取得段階で研究を中断した研究者を想定しており、その研究継続と博士号取得へのキャリアパスをつなぐことを目ざした制度である。そのため、申請資格を修士号取得者

として公募を開始したが、応募者の多くが博士号取得者であった。これは、家族とともに暮らしながら研究を続けることへの潜在的ニーズの高さを如実に示したものと解釈できる。

「拡げるタスクチーム」の活動は、平成22年4月に発足した全学の理科離れ対策支援専門委員会と連動して展開した。従来バラバラに行われていた数多くの理科系のユニークな学外向けイベントをまとめて学内外に紹介するイベントカレンダーの作成が行われた。弘前市内および隣接する地域の高校への出前授業や、それらの高校からの申し出によるスーパーサイエンススクールの申請などの連携も進められた。地域の環境NPOが主催する山野ウォーキングイベントの後援などを含むアウトリーチ活動によって、広く地域との連携が進展した。

これらの諸活動に加え、男女共同参画推進室を中心とした講演会やセミナーの開催、ウェブサイトの開設やニューズレターの発行など、地道な広報と意識啓発活動によって、学内の男女共同参画に関する認識は高まり、部局間の連携も深まった。

本事業において特筆すべきは、事業で雇用した特任教員の研究活動である。事業の取組みを進めるとともに、特任教員自身の研究継続を支援するため、本学の自己資金で研究エフォートをつけ、外部資金獲得も積極的に進めた。その結果、研究費を獲得して活発な研究活動を続けているほか、異なる専門分野の教員との共同研究を開始するなどの成果を収め、学部学生や大学院学生にとって非常に良いロールモデルになった。

本事業の展開を契機として、本学の女性研究者比率は、平成22年度13.9%、平成23年度15.1%、平成24年度15.4%と伸びをみせ、とくに保健学研究科を除く理系学部・研究科で平成21年度の4.9%から平成23年度7.8%に増加している。新規採用者に占める女性比率は、平成20年度11.3%、平成21年度21.1%、22年度19.6%、23年度25.3%と伸び、保健学研究科を除く理系学部・研究科では、平成20年度の2.1%、平成21年度2.9%、22年度3.1%、23年度7.8%と増加している。平成24年2月の学長交代に伴い、本事業の総括責任者は佐藤敬学長に引き継がれた。佐藤学長は、さらに男女共同参画を進めるべく、平成24年5月に学長名の「弘前大学男女共同参画宣言」を新たに公表し、事業のより実りある展開にリーダーシップを発揮している。上述のような研究支援員制度の試行や教育研究評議会での男女共同参画セミナーの開催はその一端を示すものでもある。

以上のことから、本事業は順調に展開してきたといえる。しかしその活動は緒についたばかりで、今後も中長期的な見通しに立った活動を継続する必要がある。本事業の取組みを後退させることなく、地方都市型の女性研究者研究活動支援と男女共同参画のための基盤環境整備をさらに進めていく所存である。



I 「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の概要



I 「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の概要

1. 立案の背景と課題

立地の不利を補い、地域資源を生かした女性研究者研究活動支援の構築を目ざして立案したのが、本課題である。

大都市圏から遠隔地にある本学のような地方大学では、通勤圏内にある他大学や研究機関、全国規模の企業などの数が限られており、配偶者の勤務先が確保できないことが少なくない。そのため、単身赴任を余儀なくされたり、結婚や出産を躊躇したりする研究者もある。学会や研究会への参加についても、東京まで新幹線の利用を含めても5時間以上を要するという時間的・金銭的な制約が、活発な学外研究交流の機会を妨げることもある。

日常的には、学部や研究科を越えた女性研究者同士の交流がほとんどなく、地域の情報ネットワークへの接点も持ちにくいいため、女性研究者に共通する諸問題に、個人の努力で対応しなければならない側面が強い。このような状況を反映して、特に理系学部・研究科の女性研究者数は少なく、近年増加傾向にある女子学生数との不均衡を生じている。

他方、地域の利点に目を向けると、本学の立地する弘前市は、都市構造がコンパクトで職住接近しており、子育てや介護に関わる公的支援、民間支援の選択肢も多い。これらに関する適切な情報とそれを流通させるネットワークさえ確保できれば、子育てや家庭生活の維持に関わる条件は、大都市圏よりも有利な側面をもつといえる。

さらに次世代を担う学生についてみると、本学のような地方大学においては、保護者があるべく近い総合大学で学ばせようとする傾向があることなどから、優秀な人才が潜在する可能性がある。

これらに加えて本学では、小・中・高生に理系学問のおもしろさを伝えるための「科学者発見プロジェクト」や、理科教師をめざす学生の教育スキルアップも兼ねた「ラボバスプロジェクト」など、さまざまな取り組みを実施してきた。これまでは個別に行われてきたこれらの事業を有機的につなげることで、優秀な人才を育成し、次世代を担う女性研究者の裾野を拓けることができる。

(1) 課題の概要

計画構想・概要

- 提案課題名 「つがルネッサンス！地域でつなぐ女性人才」
- 総括責任者名 遠藤 正彦（平成22年度～平成23年度）
佐藤 敬（平成23年度～平成24年度）
- 提案機関名 国立大学法人弘前大学
（実施予定期間：平成22年度～平成24年度）

機関の現状（平成22年2月1日現在）

(1) 女性研究者に関する現状及び今後の見通し

正規教員700名のうち、女性教員は93名、その比率は13.3%である（平成22年2月1日現在）。分野別では、保健学研究科以外の理系大学院で女性研究者比率はわずか3.9%と低さが際立つ。大学全体の過去3年間の新規採用者に占める女性比率の平均は17.9%であるが、その推移をみると、減少傾向が表れており、今後の意識改革の取組が必要である。一方、大学院および学部学生については、女性の減少傾向はみられず、地元で優秀な女子学生が残る傾向を考えると、研究者をめざす若手育成の可能性はある。

(2) 女性研究者支援に関する現在の取組状況

①. 男女共同参画推進室の発足（平成21年10月）。②. 学内保育園の開園（平成20年4月。年末年始以外休園なし、夜間保育対応）。③. 裁量労働制の一部導入（平成17年）。④. ハラスメント対策の再検討。⑤. ポジティブアクションの導入。⑥. 意識啓発事業の実施。

計画構想

(1) 女性研究者のための具体的な取組

女性研究者フォーラムの新設とともに、目的別タスクチームを編成し、男女共同参画推進室がこれらの活動のための基盤的環境整備を行う。女性研究者フォーラムは、女性研究者の交流による情報の共有化と女子学生へのロールモデル提示を行う。目的別タスクチー

ムは女性研究者の研究力を強めるタスクチームと、理系の裾野を広げるタスクチームの2つからなる。前者は女性研究者の研究継続支援や研究資金獲得、研究成果公表のための支援体制作り、赴任予定教員のパートナーをフェローとして採用するシステムの検討を進める。後者は実験のできる理科教師の育成などを通じて次世代を担う人才の掘り起こしと若手女性研究者の育成を行う。

(2) 期待される効果

① 地方の研究機関一般に応用できるモデルの発信、② 環境整備による女性研究者の応募と採用数の増加、③ 女性研究者の新たなライフコースモデルの提示、④ 潜在化する人材の発掘と研究活動の活性化による研究レベルの向上、⑤ 地域に根ざした研究教育機関としての活動の活発化

達成目標（ミッションステートメント）

- 1) 女性研究者フォーラムにより、部局や世代を超えたネットワークを構築する。交流会（隔月1回）を定着させ、気軽に相談しあえる環境を作り、学内／学外交流環境を整える。
- 2) 学会や研究会への子連れ参加を可能にする学外研究交流支援を行い、研究交流を活発化する。
- 3) 弘前市や青森県および他大学とのネットワークの接合によって、実践的生活支援（育児・介護・家事）と地域の人才登用の仕組みを作る。
- 4) 公的会議の午後5時半まで終了や休日業務の削減などによる柔軟なワークプランを提案する。
- 5) 学内相談員制度やニューズレターの発行、大学出版会などを通して、若手研究者の研究資金獲得、研究成果公表支援の体制を整える。
- 6) 新規採用者における女性研究者比率を全学で16%に向上させる。女性研究者の少ない理系学部では2%以上の向上を図る。
- 7) 大学院進学者における女性比率を30%に向上させる。

以上を総合して、女性研究者の研究継続力強化に資するワークライフバランスモデルを構築し、全国に発信する。

(2) 実施内容・実施体制

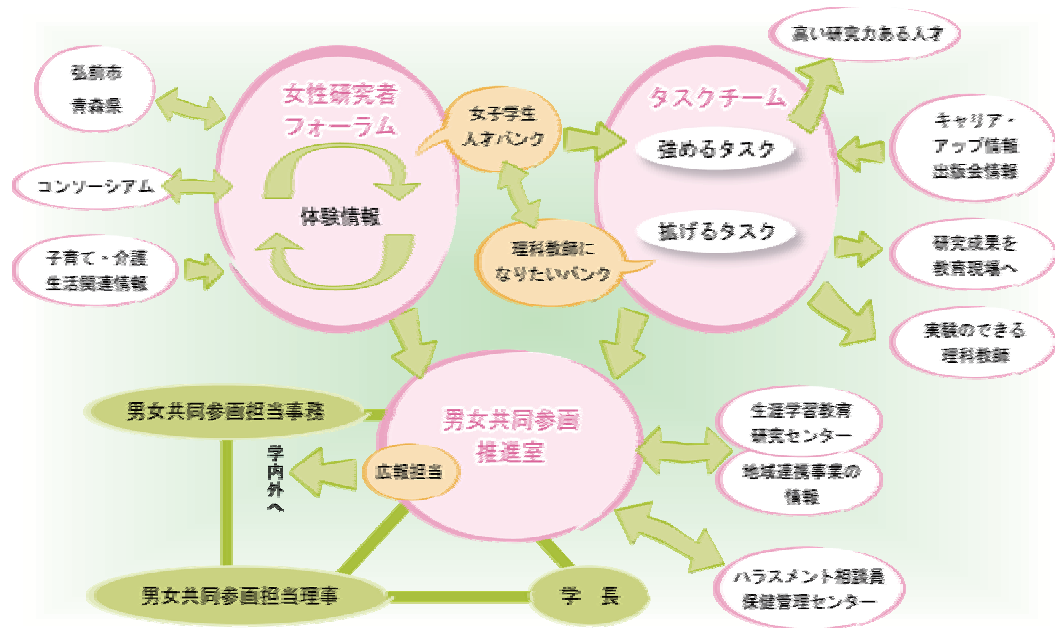


図 I-1-1 「つがルネッサンス！地域でつなぐ女性人才」実施体制図

本事業では、学内外に散在している情報や人材を相互につなぎ、地域資源のネットワークを進めることを取組みの中心に据えている。その実施体制を示したのが図 I-1-1 である。ここでは、女性研究者フォーラム、タスクチーム、男女共同参画推進室の3つを基点としたネットワークを構想した。

女性研究者フォーラムでは、女性研究者個人個人をつなぎ、部局や世代を超えた交流の場を作る。その交流を通して、キャリア形成に関する体験的情報や、青森県や弘前市など行政および民間のさまざまなサービス、生活関連情報が流れる。また、学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム等を通じて、弘前市の高等教育機関相互の連携も進める。

タスクチームは、目的別に2つのチームを編成する。ひとつは女性研究者の研究力を「強めるタスク」である。キャリアアップや業績発表の支援を行い、高い研究力のある人材を育てることを目的とする。2つめの「拡げるタスク」では、研究成果を中高生や一般に還元し理系の魅力を伝えるとともに、実験のできる理科教師の育成を支援することによって、理系の裾野を広げて、次世代を育てるためのしくみを作る。男女共同参画推進室は、本事業と学内の男女共同参画推進の要として、学長のリーダーシップのもと、担当理事とともに、広く学内の基盤環境整備を進める。学内の諸部局をつないで企画提案を行い、制度の改善や有用な情報の周知や広報と学内外の意識啓発を積極的に進める。

(3) 男女共同参画推進室委員・職員・協力教員名簿（平成22～24年度）

①男女共同参画推進室委員名簿

役職等	平成22年度	平成23年度	平成24年度	所属等	※備考
室長	杉山 祐子	杉山 祐子		人文学部	2号室員
			日景 弥生	教育学部	2号室員
副室長	日景 弥生	日景 弥生		教育学部	2号室員
			杉山 祐子	人文学部	2号室員
	高瀬 雅弘	高瀬 雅弘		教育学部	1号室員
			井瀧 千恵子	保健学研究科	1号室員
室員	松岡 昌江	松岡 昌江	松岡 昌江	医学部附属病院総務課	2号室員
	山田 巖子			人文学部	2号室員
	長谷河 亜希子	長谷河 亜希子	吉村 顕真	人文学部	3号室員
	鈴木 登紀子	照井 透	照井 透	人文学部総務グループ	1号室員
			高瀬 雅弘	教育学部	1号室員
			李 秀真	教育学部	3号室員
	栗林 航	栗林 航		教育学部総務グループ	1号室員
	山田 順子	山田 順子	山田 順子	医学研究科	1号室員
	中村 聡子	土岐 祐子	土岐 祐子	医学研究科 総務グループ	3号室員
	井瀧 千恵子	井瀧 千恵子		保健学研究科	1号室員
	岩谷 靖	岩谷 靖	岩谷 靖	理工学研究科	3号室員
	藤寄 里美	藤寄 里美	藤寄 里美	理工学研究科	1号室員
	大河 浩	大河 浩	田中 和明	農学生命科学部	3号室員
	及川 望美	及川 望美	及川 望美	農学生命科学部 総務グループ	1号室員
	齊藤 慶子	齊藤 慶子	藤田 祥子	医学部付属病院	1号室員
	深作 拓郎	深作 拓郎		生涯学習教育研究 センター	3号室員

※ 弘前大学管理運営規則 第110条の2より

各部局から推薦された職員(1号職員)、学長が任命する職員(2号職員)及び室長が必要と認めた職員(3号職員)

②「つがルネッサンス！」事業専任職員名簿

役職等	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	職名等
専任職員	鶴井 香織	鶴井 香織	鶴井 香織	特任助教
	赤嶺 真由美	赤嶺 真由美	赤嶺 真由美	特任助手
			西野 純子	特任助手
	山本 幸子	山本 幸子	山本 幸子	コーディネーター
	篠崎 有香	篠崎 有香	篠崎 有香	コーディネーター
	葛西 薫	葛西 薫	工藤 昭子	事務担当
	村上 敬子	村上 敬子	村上 敬子	広報担当

③男女共同参画推進室職員名簿

役職等	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
事務員	佐々木 美津子	北村 正太郎	笹森 守
	藤田 悦子	藤田 悦子	藤田 悦子

④男女共同参画推進室協力教員（タスクチーム）名簿

	氏 名	部 局	職 位
部局選出	澤田 真一	人文学部	准教授
	今田 匡彦	教育学部	教授
	浅野 クリスナ	大学院医学研究科	講師
	板垣 史郎	医学部付属病院	准教授
	江居 宏美	大学院理工学研究科	助教
	柏木 明子	農学生命科学部	准教授
男女共同参画推進室 委員	井瀧 千恵子	大学院保健学研究科	准教授
	高瀬 雅弘	教育学部	准教授
	鶴井 香織	男女共同参画推進室	特任助教

(4) ミッションステートメントの達成に向けて（平成 25 年 2 月現在）

ミッションステートメント（1）

女性研究者フォーラムにより、部局や世代を超えたネットワークを構築する。交流会（隔月 1 回）を定着させ、気軽に相談しあえる環境を作り、学内／学外交流環境を整える。

女性研究者の個人的なネットワークを構築するために、隔月 1 回、平成 25 年 2 月までで通算 13 回の茶話会「女性教員とお茶しましょ」を開催した。茶話会には本学の女性教員を中心に、学部学生、大学院生などのべ 400 人以上が集まり、生の声で語り合う場となった。この茶話会を通じて寄せられた女性研究者の声が反映され、当初計画にはなかった「研究支援員制度」が平成 24 年度から開始された。この制度は被支援者にも研究支援員にも非常に好評で、マスメディアの注目も集めている。このように予想外の効果につながった点で、本取り組みの成果は高く評価できる。

ミッションステートメント（2）

学会や研究会への子連れ参加を可能にする学外研究交流支援を行い、研究交流を活発化する。

本学が遠隔地にあることから、大都市圏で開催される学会や研究会に参加しにくいという不利な点を緩和するため、「出かけにくいなら来てもらおう」という取り組みを実施した。本学で学会や研究会を開催しやすくするため、青森県や弘前市が実施する助成金の獲得や会場情報等、必要な情報を網羅した「学会開催マニュアル」を整備した。また、弘前で開催される学会および研究会への子連れ参加を促すため、地元 NPO「弘前こどもコミュニティ・ぴーぷる」と契約を結んで保育者の派遣を依頼するとともに、託児室の設置費用を補助してきた。

平成 24 年度までの実績は、3 学会および 2 つのシンポジウムにおける託児室設置を支援し、のべ 8 日間 40 人の利用があった。この取り組みによって、初めて託児室を設置した学会もあるが、非常に好評だったため、学会開催時に託児室を常設化するに至ったり、「ぴーぷる」の保育方法に倣った託児方法の希望が出されたりするなど、波及的な効果もあったとの報告が寄せられた。

ミッションステートメント（3）

弘前市や青森県および他大学とのネットワークの接合によって、実践的生活支援（育児・介護・家事）と地域の人才登用の仕組みを作る。

弘前市の実施する子育て支援「さんかくネット」や病児保育「ことりの森」および「きりん」、夜間や休日保育「トワイライトステイ」などの各施設への視察と連携依頼をおこない、それらの情報を集積した「情報ナビ」をウェブ上に公開した。また、女性研究者フォーラムの茶話会で、学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム参加大学の女性研究者等との連携が始まったほか、地元NPO「ぴーぷる」との契約、「ふれーふれーファミリー」など、利用可能な団体の情報も加えてネットワークの拡大と深化がはかられ、これを土台に「さがす！みつける！あなたのワーク・ライフ・バランス（通称「支援ブック」）」を作成した。育児や介護支援に関わるサービスで、行政や民間が活発な活動を展開している弘前市では、これらの情報をまとめて利用できるようにすることで、大学がすべてを抱え込むかたちではない環境整備が可能になり、また、本学の教職員がこのサービスを利用することによって、行政や民間の活動も促進されるという有機的な相互関係を構築する基盤ができた。このようなやりかたは地方都市型の支援環境整備モデルとなりうる。さらに、平成24年度には人才バンク機能をもつ情報共有サーバシステムを稼働させることによって、部局を越えた人才情報の集積とマッチングのためのしくみが整った。今後、学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム等との連携によって地域の人才情報の統合を行うしくみへと発展させることができる。

ミッションステートメント（4）

公的会議の午後5時半まで終了や休日業務の削減などによる柔軟なワークプランを提案する。

会議の効率的な運営への意識を高めるため、会議終了予定時刻を記載することを教育研究評議会に提案した。公的会議の午後5時半まで終了についても、行動計画のリーフレット配布によって周知した。実施状況について、部局長を対象としたフォローアップ調査をおこなってきたが、医学部、教育学部などカリキュラムの関係上、5時半に終了が困難な

部局もあることが明らかになった。今後は部局ごとに3カ年の達成目標を設定して改善を図ることとなった。過重業務の緩和等については、サポートスタッフ制度のほか、研究支援員制度等を活用した柔軟なワークプランの提案が可能である。

ミッションステートメント（5）

学内相談員制度やニューズレターの発行、大学出版会などを通して、若手研究者の研究資金獲得、研究成果公表支援の体制を整える。

学内若手支援金制度、科研費A判定支援制度の実施等に加え、相談員制度に代わって、科研費申請書のアカデミックチェックを行い、助成金情報をまとめて送信する情報共有サーバシステムの運用などを開始した。平成22年度以降の女性研究者の科研費申請率および採択率の伸びが顕著である。

本学メディカルイングリッシュセンター（MEC）では、平成9年から、医学研究科および医学部附属病院の教職員等を対象とした英語論文校閲および校閲費の補助を行ってきた。本事業ではこの制度にかからない研究者を視野に入れて、英文校閲および論文投稿費助成をニーズ調査として実施し結果を確認した。国際学会における英語発表スキルアップセミナーなども実施したが、これは事業終了後にも引き継がれる予定である。

ミッションステートメント（6）

新規採用者における女性研究者比率を全学で16%に向上させる。女性研究者の少ない理系学部では2%以上の向上を図る。

平成20年度の新規採用者に占める女性の割合は12.7%だったが、平成21年度以降大きく伸び、平成22年度には19.6%に達している。保健学研究科を除く理系学部・研究科における女性研究者比率は全学に比してかなり低いが、毎年およそ2ポイントずつ増加傾向しており、当初の目標に達している。この結果、全学の女性研究者比率は、平成22年度以降1ポイントずつ向上し、平成24年4月には15.4%に達した。

ミッションステートメント（7）

大学院進学者における女性比率を30%に向上させる。

大学院学生における女性比率をみると、全学では30%を境に増減しているが、保健学研究科を除く理系では増加傾向が認められる。本事業の開始を機に、理工学部学生による理工女子会が開催されたが、それが学部や男女共同参画推進室ホームページ、ニューズレター「さんかくつうしん」などで紹介され、新聞記事にもとりあげられた。また、本事業における、理系の裾野拡大の取り組みによる弘前市内とその隣接地域の高校でのアウトリーチ活動など、次世代育成の取り組みも進められ、学生の関心を高めている。



II 活動報告



II 活動内容

1. 女性研究者フォーラム

(1) 背景と目的

本学では、コ・メディカルを除く教職員の女性比率が学部学生や大学院生の女性比率に比べ極めて低い。このことは、女子学生への今後の教育や将来に向けての職業選択に少なからず影響を与える可能性がある。一方で、中央から地理的に隔たる地方大学における女性研究者の研究活動に関わる困難は、大都市圏よりも大きい。女性研究者フォーラムは、女性研究者の交流による情報の共有化、および女子学生へのロールモデル提示による人・取組・情報のネットワーキングをすすめる。そして、それを通して人材の育成、教育研究環境の向上、および研究活動の活性化を目指す。

女性研究者フォーラムにおける事業実施期間終了時までの達成を目指した目標（ミッションステートメント）は、

- ・女性研究者フォーラムにより、部局や世代を超えたネットワークを構築すること
- ・交流会（隔月1回）を定着させ、学内／学外交流環境を整えること

の2点である。事業実施期間終了後、将来的には、女性研究者フォーラムを職員も含む交流フォーラムとして本学における男女共同参画推進の一翼を担うものへと発展させることを目指す。そして、発展した職員も含む交流フォーラムにより「互いを尊重する働きやすい職場」の実現および、新たなワーク・ライフ・バランスモデルの提供による研究教育活動の持続的な活性化と有為な人才の育成を図る。また、この期間に構築された地域とのネットワークを深化させ、地域の人才育成や男女共同参画の推進に資する取組を行う。

(2) 実施内容

①女性研究者交流会

女性研究者フォーラムでは、学部を超えて女子学生と女性教員の交流する場としてお茶会形式の交流会を平成22年度10月より隔月のペースで開催してきた。当初の主な目的は

次の2つであった。1つは、男性が大半を占める研究者社会においてマイノリティである女性研究者同士のネットワーキングである。もう1つは、女子学生へのロールモデルの提示である。開催を重ねるにつれ、このお茶会は参加者から生の声を聞くニーズ把握の場としての役割も担うように発展していった。また、当初は女性教員と女子学生だけの交流の場であったが、次第に男子学生や男性教員も交えた会も設けられるようになった。

交流会は、参加者全員の顔が見えるラウンドテーブル形式にて行なわれる。交流会の前半はゲスト（話題提供者）による体験談等を受けた話題を中心に交流する。後半は前半での交流内容を受け、自由な流れでおしゃべりをする。そして参加者それぞれがそこで自らの意見を述べたり体験を語るなどし、想いや情報を共有する。会の最後には、男女共同参画推進室が進めている女性研究者支援事業の進捗状況などについていち早く報告することも行なっている。

このような気軽なお茶会形式の集まりによって学部や世代、立場を超え、他大学からの参加者も交えて、互いの生の声が聞こえる出会いの場が生まれた。これらの声を踏まえて、出産・育児・介護等に関わる支援制度をわかりやすい一覧表にし、ウェブで公開した（「(4) ⑤教職員のための制度・手続き情報ナビの構築」を参照）。また、研究支援員制度（「2. (2) ①研究支援員制度」を参照）も、交流会の場でニーズが高いことが明らかとなり、実現に結びついた取り組みである。このような生の声を吸い上げる場としての交流会の知名度が上がった結果、医学研究科長からの要請で、「女性医師の声を聞く会」が開かれた。そこでは病児・病後児保育の整備および女性医師復職支援の必要性が強く訴えられた。さらに、学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム参加機関の女性教員らが集う場を設けることで、学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアムとの協力関係が確認され、今後の活動に道筋をつけた。平成24年度に行なわれた女性医師の声を聞く会では、交流会開始時刻が17:00以降であったことから、無料託児も実施した。

女性研究者フォーラムにおける女性研究者交流会の開催記録

平成 22 年度

Report 1

第1回 「学部を超えて 女性教員とお茶会しましょ！！」を開催しました！

日時：2010年10月29日（金） 14:30～15:30
場所：大学会館2階 スコーラム
議題：1. 日本で学んだジェンダー / 2. ニューージーランドの男女共同参画政策
記録提供者：国際交流センター 准教授 サワダ・ハルナ・ジョイ
参加人数：11名
[パンフレット](#) (PDF 429KB)

【フォーラム内容】
フォーラムではまず、ハルナ先生がご自身の子供の学校生活を通して学んだ、日本の学校に携るジェンダー・ステレオタイプが紹介されました。その後、ハルナ先生の母国であるニューージーランドが、種別男女共同参画政策を積極的に推進している口ジョック、つまり「女性を参画させない団体は、利益率や作業効率において不利である」が紹介・説明されました。最後に、ハルナ先生への質問やジェンダーに対する考えなどを参加者全員で話し合い、和やかな質疑応答のうちに会は閉じられました。



Report 2

第2回 「学部を超えて 女性教員とお茶会しましょ！！」を開催しました！

日時：2010年11月1日（水） 15:00～16:00
場所：大学会館2階 スコーラム
議題：女性教員の現状（良いこと悪いこと）
記録提供者：理工学研究所 助教 江原 聖美
参加人数：21名
[パンフレット](#) (PDF 779KB)

【フォーラム内容】
ゲストには理学部先生から数学者としての研究生活が語られ、種別女性教員の考えや悩みを知ることができました。その後、ワーク・ライフ・バランスや男女共同参画が話題になりました。学生と教員という立場は異なりますが、思いや考えには共通するところもあることがわかり、相互理解が深まりました。今回のフォーラムは、教員の教育内容・方法の向上・改善に役立つ（ファカルティ・ディベロップメント）ワークショップとして、教員・学生委員会と男女共同参画推進室の共催で行われました。



第5回 女性研究者フォーラム特別企画 オープンキャンパス同時開催 「スキンケア&身だしなみ メイクアップ講座」を開催しました！

日時：2011年8月9日（火）

1回目 11:00～12:00

2回目 13:00～14:00

会場：創立50周年記念会館 1階 会議室1

講師：養生堂 ビューティーコンサルタント 小田真 智子

参加人数：1回目・2回目の合計 96名

[ポスター](#) (PDF 1.22MB)

【フォーラム内容】

今回の女性研究者フォーラムは、オープンキャンパス同時開催イベントとして行われました。オープンキャンパスに訪れた女子高校生だけでなく、私大大学の女子学生や女性教員の参加も多数ありました。メイクアップモデルとして、人文学部4年生の女子学生2名が協力してくれました。講師の小田真さんから、研活の特長メイクアップとそれを支える健康な肌を保つスキンケアについて、実演を交えた説明がありました。研活活動にも使える、社会人のたしなみとしての「上品かつ魅力的なメイク」の実演に、参加者一同、目を釘のようにした会でした。



女性研究者フォーラム番外編 弘前大学 科学者発見プロジェクト + つがるネッサンス！ 合同企画 「女性研究者と語ろう！ ～バッタの模様と科学～」を開催しました！

日時：2011年8月17日（水） 13:00～14:00

講師：弘前大学 男女共同参画推進室 特任助教 藤井 香織

参加人数：4名（青森県立青森南高等学校「チーム絆川」のみなさん）

【フォーラム内容】

番外編は、地場の子供たちに研究の面白さを伝える活動として弘前大学が実施している「科学者発見プロジェクト」との合同で行われました。講師は本事業の特任助教・藤井香織が中心。「バッタの色と模様」の生物学的な意味について、熱々交いを交えながら分りやすく紹介しました。参加した女子高校生は当初それほど興味がなかったようですが、研究内容紹介後の「何でも質問コーナー」では、研究以外の質問もOKだったにも関わらず、「バッタの色や模様は一生変わらないの？」「人工的にバッタの色を変えることはできるの？」「産卵の体の中はどうなっているの？」など、研究に対する興味が次々と投げかけられ、女子高校生の生物学への興味が高まった会になりました。



Report 6

第6回 女性研究者フォーラム
「学部を超えて 立場を超えて 教員とお茶会しましょ!!
～ 男女を問わずお越しください～」を開催しました!

日時：2011年11月30日（水） 14:30～15:30
 場所：文京キャンパス 大学会館2F スコーラム
 総括司会者：農学生命科学部 分子生命科学科 准教授 中田 千夏
 「研究の楽しみ、育児の楽しみ ～rDNAと親子を結びつける毎日から～」
 参加人数：19名（うち女子学生7名、男子学生2名）
[ポスター](#) (PDF 217KB)

【フォーラム内容】

中田先生から、分子生物学の研究とその面白さや、自身のライフイベントとそれに伴う研究スタイルの変化、苦労、楽しみなどのお話がありました。その中で、中田先生は、研究を続けるには、結婚の後の工夫、研究メンバーの理解に加えて、育児中の研究支援体制の整備は女性研究者にとって大変重要な要素である。教育活動と子育てを両立する生活は両立できるが、研究活動の継続が難しい、それをサポートしてくれる体制があると大変助かるというお話をされました。

「研究活動との両立にはさまざまな工夫が必要だが、子供といると楽しい、寝てよかった」と話す中田先生の笑顔に、元気を頂いたフォーラムでした。



Report 7

第7回 女性研究者フォーラム
「学部を超えて 立場を超えて 教員とお茶会しましょ!!
～ 男女を問わずお越しください～」を開催しました!

日時：2012年2月15日（水） 14:30～15:30
 場所：文京キャンパス 大学会館2F スコーラム
 総括司会者：教育学部 教育実習講座 准教授 宮川 あけみ
 議題：「結婚、女性のスカートをはいているのは誰の方？」
 参加人数：16名（うち女子学生7名、男子学生1名）
[ポスター](#) (PDF 2,064KB)

【フォーラム内容】

「スカートをはく」というのは、かつて、女性大衆が当時の革命的運動について述べた言葉で、「女性の行動の制限をすること」のたとえです。」お茶会は、タイトルの通りから始まりました。3人の息子を育てるために一度は専断教師を退職したこと、非常勤講師や研究室の助手として研究活動を行っていたこと、そして今年度から半専に転任されたことが話られました。また、遊びかけの学会に、乳幼児を含む3人の息子とその関係を見るご同様の母親6人で行かれたことなども、子供をもつ女性が研究を続ける時の実情も話されました。

子どもをもつ女性が仕事を続ける時、以前は利権関係が対立する人たち（夫や夫の家族、職場の上司や男性陣、先輩一組など）が壁となることが多かったけれど、そういった人たちが理解を示すようになった近年ではむしろ、女性の同僚や夫の親など本来一番の味方であるべき人達が壁となることの方が多いかもしれない、という問題意識に対し、参加者から「結果どこでどのように働くかなどの議論について考えるとき、保護者の意見の影響が大きい」といった同様の実情が話されました。一方で、「高学歴などの身近な人たちに支えられたおかげで頑張ってきた」という声もありました。家族や同僚が互いに「壁」ではなく「見え合う存在」となることの大切さを認識する会となりました。



第8回 女性研究者フォーラム

「学部を超えて 立場を超えて 教員とお茶会しましょう！」

～ 男女を問わずお越しください～ を開催しました！

日時：2012年3月14日（水） 14:30～15:30

場所：文京キャンパス 大正会館2F スコールド

講師提供者：教育学部 家庭教育講座 教員 日暮 節生

話題：「自分らしく生きる」

参加人数：13名（うち「学部を超えてひろさき高等教育機関コンソーシアム」加盟大学教員1名、女子学生3名、男子学生3名）

ポスター：PDF 2.05MB

【フォーラム内容】

平成23年度最後の開催となる今回は、春休み中にもかかわらず、6名の学生の参加がありました。日暮さんはホワイトボードを使いながら、「自分らしく生きる」ためにご自身が強石の柱としてこられた3つの言葉、「体力は知力である」「知恵とは最大の武器（能力）である」「知は財産である」について話されました。そして、「自分の力を見出し、それを高めるという真意が、仕事や家庭生活を含めた日々の課題を解決していくための武器をたくさん持つことに繋がる」、というメッセージを学生たちに贈られました。また、ご自身の子育てに関して、子供が赤ちゃんの頃から深い愛情を持って向き合ってきたことで、家族間に関わり合いを受け取ってこられたというお話も印象的でした。後半のフリートークでは、様々なことを経験することで能力が高まるということについて、参加者がそれぞれの経験や思いを語りました。「一人暮らしをしている男子学生の「料理の美味しい物や野菜をうまく選んで賢い物をするようになった」という体験談や、「下宿生活のおかげで先生が病気でも3か月ほど休んだ時に、私が下宿に暮らす人たちの食事や洗濯などを全てやりました」と語られた本学監事の学生時代のお話に一同が驚くなど、笑いあり涙もあつた和やかな会となりました。



平成 24 年度

アサーティブコミュニケーション入門 第1回目（全3回）

※ このワークショップは、女性研究者フォーラムとの特別合同企画で開催されました。

日時：2012年5月23日（水） 14:30～15:30

会場：弘前大学 文京キャンパス 附属図書館 本館2F ラーニング・スクエア・スペース

講師：IS・キャリア開発研究所代表、シニア就業力ワーカー 岩崎 美子

内容：相手の話をじっくり聞きつつ自分の思いや考えを適切に表現する「アサーティブコミュニケーション」の基礎

参加者：学生34名（女性24名、男性10名）

オブザーバー：男女教職員10名

ポスター：PDF 1.10MB

【ワークショップ内容】

男女共同参画推進では、学生就業支援センターと協力し、大学における全ての人が気持ちの良い人間関係で結びつくことで学業・研究・仕事において十分に能力を発揮出来る環境を整えること、また、就職活動に悩む学生が自分の能力を適切に表現できる能力を身につけることを目的に、企業・自治体で就業力ワーカーとしてご活躍されている岩崎美子氏をお招きして「アサーティブコミュニケーション入門 第1回目（全3回）」を開催しました。学生の関心が非常に高く、30名余の定員は全て学生で占められましたが、オブザーバーの教職員も聴講しました。

アサーティブコミュニケーションは、行動療法（心理療法の一つ）を元にしたで考案されたコミュニケーションを巧みにする方法ですが、岩崎先生は「場」を重んじる日本人の環境にも合う形に活用してレクチャーされました。自分ばかりが主張するのではなく、相手に合わせて話して理解するだけでなく、相手に自分にも話したいことを言う権利があり、「相手の話をよく聞き、自分の考えも適切に伝える」アサーティブコミュニケーションの基礎を、5～6人でのグループワークなどを交えながら、楽しく学びました。





Report 9-2

アサーティブコミュニケーション入門 第2回目 (全3回)

日時：2012年6月13日(水) 14:20～15:50
 会場：私大大学創立30周年記念会館2F 会議室2
 講師：IS・キャリア開発研究所代表、シニア就業カウンセラー 岩崎 美子
 内容：相手の話をじっくり聞きつつ自分の思いや考えを適切に表現する「アサーティブコミュニケーション」の基礎
 参加者：学生28名(女性15名、男性11名)
 オブザーバー：男女教職員9名
[ポスター](#) (PDF 653KB)

【ワークショップ内容】

男女共同参画推進では、大学における全ての人が気持ちの良い人間関係で結びつくことで学業・研究・仕事において十分に能力を発揮出来る環境を整えること、また、就業活動に熱心な学生が自分の能力を適切に表現できる能力を身につけることを目的に、「アサーティブコミュニケーション入門(全3回)」を開催しています。

第2回は、講師から、相手との関係づくりをうまく行なうために大切なことは、人と人との結びつき方やお互いの認識であることが伝えられました。また、前回のフォローアップとして、参加者から寄せられた意見や悩みが提示され、それらについて参加者全員で一様に考え、意見を話し合いました。後半は、「相手に伝わる自己表現」を身につけるため、自己紹介文を起筆起結の構成で書くワークに取り組みました。そして、グループで自己紹介を行ない、自己表現の基礎を実践しました。



Report 9-3

アサーティブコミュニケーション入門 第3回目 (全3回)

日時：2012年7月4日(水) 14:20～15:50
 会場：私大大学創立30周年記念会館2F 会議室2
 講師：IS・キャリア開発研究所代表、シニア就業カウンセラー 岩崎 美子
 内容：「アサーティブコミュニケーション」の基礎の演習
 参加者：学生19名(女性9名、男性10名)
 オブザーバー：男女教職員10名

【ワークショップ内容】

第3回は、本格的な演習練習が行われました。まずは参加者の緊張をほぐすため、会場内を自由に変更、出会った相手と言葉に挨拶を交わす練習が行われました。その後、ペアや4～5人グループ

で、互いに質問をすることやその質問に答えることを通じて、ほどよい距離感を保ちながら相対的な人とコミュニケーションをとる練習をしました。「私も○○出身なんです!」「私も○○に興味があります。××についてはどう思いますか?」等、どのグループも会話が弾み、笑顔での交流となりました。連続ワークショップの締めくくりに、「アサーティブ・チェックリスト」を使い、表現しにくい内容や、コミュニケーションをとりにくい相手について、自己分析しました。また、「自分を知ってもらおう」ために、自分を良いところをリストアップし発表してみる実践も行われました。

2回にわたる「アサーティブコミュニケーション入門」は、即を学ぶごとに、参加者の方々の表情が明るくなり、また意気揚々の姿も活発になっていきました。参加者からは、「ワークショップに参加して、決まっていた考え方が変わってきた、これからの人生に活かそうです」との声が聞かれました。

今回は、在籍学員、大町理事をはじめとする多くのオブザーバー参加がありました。本学でも、教育・研究・職場環境における円滑なコミュニケーションへの関心が高まっているようです。



第10回 女性研究者フォーラム 拡大版

「学部を超えて 立場を超えて 部門も越えて お茶会しましょ!!!」
 ～男女を問わずお越しください～を開催しました!

日時：2012年8月13日(木) 17:30～19:00 (途中での入退場可)

場所：弘前大学 医学研究科 1F 大会議室

司会・進行：弘前大学 医学研究科 脳神経生理事務課 講師 山田 博子

参加人数：20名

賛助人数：3名

[ポスター](#) (PDF 2.49MB)

【フォーラム内容】

第10回女性研究者フォーラムは、本町地区で行われ、医学研究科・附属病院から多くの方が参加されました。勤務時間を考慮して、開催時間を夕方に設定し、無料お茶会も設置しました。

今回は、本町地区で働く女性医師の職場環境改善のための意見交換会も兼ね、中越医学研究科長と女性医師の多い皮膚科の専任教授が参加されました。

参加した女性医師の方からは、仕事と子育ての両立に悩む中、悩みも深い現実が語られました。本町地区に病院の「ひろだいたい保育園」がいつか開業に近いこと、短期間の意向であっても「ひろだいたい保育園」を運営しなければならず、再入業が難しいこと、兄弟が別の保育園になるとお迎えだけでかなりの負担になることなどが話され、「ひろだいたい保育園」の運営が切実な問題として訴えられました。

また、院内売場保育、院内学童保育、女性医師用の更衣室設置、さらに、医師ごとで講習や研修費が異なるパートタイム医師の働き方についての疑問、夫婦で医師の場合の両方なども話題になりました。

皮膚科の専任教授からは、より働きやすい環境を整えたいという思い、そして、様々なライブイベントを盛り替えながら女性に働き続けてほしいという思いが伝えられました。





Report 11

第11回 女性研究者フォーラム

「学部を超えて 立場を超えて 大学も超えて 教員とお茶会しましょ!!!」
～ 男女を問わずお越しください～」を開催しました!

日時：2012年9月20日(木) 14:00～16:00
 場所：私大大学 総合教育棟 利用会議室
 オーガナイザー：私大大学男女共同参画推進室長 日藤 碧生
 記録担当者：宇都宮市ひろさき高等教育協議会コンソーシアム参加機関の教職員
 議題：「女性研究者が考えるワーク・ライフ・バランス」
 参加人数：16名(私大大学6名、私大学院大学2名、東北女子大学2名、私大聖徳福祉大学短期大学部1名)
[ポスター \(PDF 392KB\)](#)

【フォーラム内容】
 今回の女性研究者フォーラムは、「宇都宮市ひろさき高等教育協議会コンソーシアム」の参加機関の女性研究者の方をお招きして「大学も超えた」交流を行いました。「女性研究者が考えるワーク・ライフ・バランス」を議題に、各々の機関での役割や制度、私大市の地域における育児支援環境などを互いに共有しました。初めて顔を合わせる人が多かったものの、同じ地域で教育や研究に携わる者として、懐いづながりを感じる会になりました。
 機関ごとに異なる取り組みや状況は異なるため、ある機関でうまくいっている仕組みをそのまま他の機関に導入することは難しいとの意見もありましたが、このような交流の中から、自分自身のワーク・ライフ・バランスや自分の所属する機関の課題を見つめ直す機会をもつことは重要であると感じたとの意見もありました。参加者の年齢層も幅広く、ベテラン教員の方からは、異世代間もなかった時代の女性研究者の奮闘ぶりを向うこともできました。
 全ての参加者が会の最終・定期的な開催を望む、とても充実した時間となりました。そして、幕で再会を約束しながらの別会となりました。









第12回 女性研究者フォーラム ROCKな兄貴 安藤哲也さん TALK EVENT

「一度の人生 120% 楽しもう！」

～仕事もプライベートも大満足！のデキル大人になる～！

を開催しました！

日時：2012年10月24日（水） 14:30～15:30

場所：弘前大学生涯 文学書室 1F

講師：NPO法人 Fathering Japan ファウンダー、タイガーマスク基金代表理事 安藤 哲也

話題：「一度の人生 120% 楽しもう！ ～仕事もプライベートも大満足！のデキル大人になる～」

参加人数：約 50 名

[ポスター](#) (PDF 941KB)

【フォーラム内容】

第12回女性研究者フォーラムは、NPO法人 Fathering Japan（ファザリング・ジャパン）ファウンダー・タイガーマスク基金代表理事の安藤哲也氏をお招きし、多くの学生・教職員が行き交う学生食堂のオープンな一角を会場に、トークイベント形式で人生を楽しむワークライフバランスについて考えました。

イベント前半の「安藤氏によるトーク」では、最近増えつつある「イクメン」の楽しさや魅力、そして、人生を楽しむためのワークライフバランスの大切さが熱く、時には面白く、話されました。

イベント後半は、「質問カード」に記入された質問に安藤氏が答える形式で進めました。結婚・結婚・子育て・育児・転職など、将来に対する疑問や不安について、4回の転職を経た共働き夫婦であり、2児の父である人生経験豊富な安藤氏から様々なアドバイスがありました。イベントの最後には、安藤氏による「頑張りの男」（結平）の読み聞かせがあり、会場を訪れた多くの人が息を止め、結平の世界に引き込まれました。そして、「おしまい」の声に大きな拍手が起こりました。会場がオープンであったため、「結婚や育児・イクメンについて、実になる話だけど、参加するのは嬉しい。」といった様子の学生たちも、場外からしっかりとトークに耳を傾けていました。



女性研究者フォーラム特別編 パネル版「国内外で活躍する弘前大学の女性研究者たち」 を開催しました！

日時：2012年8月8日（水） 9:00～15:00

場所：弘前大学創立50周年記念会館 1F ロビー

【パネル版内容】

本学の女性研究者11名の研究内容、ワーク・ライフ・バランスに関するエピソード、若者たちへのメッセージなどをパネルで紹介しました。

高校生たちは、パネルを熱心に見入り、女性研究者の研究内容を知るとともに、研究への着目や意気込みを述べました。



Report 13

第13回 女性研究者フォーラム

「学部を超えて 立場を超えて 部門も越えて お茶会しましょ!!!」 ～ 男女を問わずお越しください～」を開催しました!

日時：2012年2月19日(水) 14:00～15:00
 場所：文京キャンパス 大塚会館2F スコーラム
 話題提供者：人文学部 公共政策課程 准教授 山口 美子
 話題：「フィールドワークの楽しみと苦しみ」
 参加人数：13名(女性教員4名、男性教員2名、女性職員1名、女子学生2名、男子学生2名)
[アクセス \(PDF:1.05MB\)](#)

【フォーラム内容】
 山口先生から、ストリートデルンやホームレスに関する社会学のフィールドワークがどのようなのが豊富な事例を交えて語られました。インタビューをしている時や、集まったデータを眺めて分析にあるメカニズムをあれこれ思案する時間はとても楽しいが、調査対象である人々の活動の豊かさに驚くことも多いとのことでした。また、研究と実践という二つの活動に同時に携わるうえでの立場 (ポジショニング) のむずかしさや思い、異国の志学者ではない自分が異国の事情を正しくとらえることができていないのかへの不安など、リアルな研究経験が語られました。

会には山口先生以外にもフィールドワーカーが数名参加しており、社会学・人類学・社会学におけるフィールドワークの共通性や違いについて活発な意見交換が行われました。今回は、人文・教育・医・理工・農生・地域社会研究科・男女共同参画推進室の7部局から男女教職員や学生が参加した交流会が実現しました。参加教員からは「社会学の教員と気軽に交流できる場としてとても貴重だと思う。次も参加したい」という声がありました。また、参加学生からは「教員同士のディスカッションは迫力があって刺激的だった。また聞きたい」という声も聞かれました。





②特別企画

a) 科学者発見プロジェクト（学術情報部）との合同企画

—女子高生と女性研究者の交流—

女性研究者フォーラムでは、特別編として、学術情報部が行なっている科学者発見プロジェクトと合同で、女子高生と女性研究者が交流する機会を設けた。科学者発見プロジェクトとは、子どもたちの物事に対する「疑問や興味、アイデア等」を青森県内の小・中・高生から広く募集し、その提案に基づいた研究テーマを本学研究者と共に体験するという地域連携型の双方向的な教育研究プロジェクトである。この合同企画は、科学者発見プロジェクトに採択された青森県立青森南高等学校の女子生徒グループが弘前大学を訪れることとなった機会を活かし実現した。

交流会では、本事業の特任教員である鶴井助教が、自身の研究テーマである「バッタの色と模様」の生態学的な意味について、時々笑いを交えながら分りやすく紹介した。参加した女子高校生は当初それほど昆虫に興味がなかったようだが、研究内容紹介後の「何でも質問コーナー」では、研究以外の質問も可だったにも関わらず、「バッタの色や模様は一生変わらないの?」「人工的にバッタの色を変えることはできるの?」「昆虫の体の中はどうなっているの?」など、昆虫研究に対する質問が次々と投げかけられ、女子高校生の生物学への興味を高めた会となった。

日時：平成23年8月17日（水） 13:00～14:00

講師：弘前大学 男女共同参画推進室 特任助教 鶴井 香織

参加人数：6名（青森県立青森南高等学校 「チーム鈴川」の女子生徒と引率教諭）

b) 国内外で活躍する弘前大学の女性研究者紹介パネル展

—オープンキャンパス・総合文化祭—

女性研究者フォーラムでは、平成24年度より「ロールモデル提示」に関する取組みを強化するため、本学の女性研究者の研究内容やワーク・ライフ・バランスに関するエピソード、若者たちへのメッセージなどをパネルで紹介するパネル展「国内外で活躍する弘前

大学の女性研究者たち」の取組みを開始した。初年度の平成24年度はオープンキャンパスおよび総合文化祭にて展示を行ない、本学を訪れた女子高校生をはじめとする女子学生に研究の魅力を伝えるほか、女性研究者を身近に感じる機会を提供した。

オープンキャンパスでの開催

日時：平成24年8月8日（水） 9:00～15:00

場所：弘前大学創立50周年記念会館 1F ロビー

総合文化祭での開催

日時：平成24年10月27日（土）～28日（日） 10:00～16:00

場所：弘前大学創立50周年記念会館 1F ロビー

共催：青森県アピオあおもり、弘前市民参画センター

男女共同参画推進室（以下「本推進室」）の事業内容等をPRするために、平成24年度弘前大学総合文化祭において、本学女性研究者のパネル展示「国内外で活躍する弘前大学の女性研究者たち」、および本推進室が発行したパンフレット等の展示と配布を50周年記念会館ロビーで行った。

パネルは、11名の女性研究者が取り組んでいる研究や研究への意欲などを、研究者本人あるいは研究に関わる写真を入れて1枚にまとめ、誰にでも理解しやすいように構成した。参観者からは、「弘前大学にはこのような研究があるんですねえ」、「研究内容もよく理解できたが、写真もすばらしい」とのお褒めの言葉と、「もっと多くの女性研究者パネルがあるととてもよい」との希望もあった。

また、この企画では、青森県内にある男女共同参画関連施設、青森県男女共同参画推進センター“アピオあおもり”および弘前市民参画センターとの連携を意図した試みであった。“アピオあおもり”の企画は、総合文化祭の参加者には大学生が多いことを考慮し、デート中の発言や行為にみられる“デートDV（ドメスティック・バイオレンス：夫や恋人などからの暴力）”などのパネルを展示したり、学生を対象にジェンダーや男女共同参画に関するアンケート調査などを行い、意識啓発を図った。弘前市民参画



センターは、センター所有の資料やパンフレットを展示・配布した。

当日は、室員が交代で受付に立ち、参観者の質問等に対応した。このパネル展示には、本学の佐藤学長をはじめ学内の教職員の来訪だけでなく、学外から多くの方々が立ち寄られ、盛況を呈した。この展示は、本推進室の総合文化祭への初めての参加ではあったが、展示を実施した10月27日（土）と28日（日）の両日で約200名の参観があった。

一方で、パネル展示開催や開催部局（本推進室）のPRの徹底、および女性研究者のパネル数の増加などが次年度への課題としてあげられた。

2. 女性研究者の研究力向上

（1）背景と目的

大都市圏から遠隔地にある本学のような地方大学は、通勤圏内に大学や研究機関や全国規模の企業などがほとんどないため、配偶者の勤務先が確保できず、単身赴任を余儀なくされたり、結婚や出産を躊躇する研究者もある。学会や研究会への参加については、時間的・空間的な制約が活発な学外研究交流の機会を妨げている。日常的には、学部や研究科を越えた女性研究者の交流がほとんどなく、地域の情報ネットワークへの接点も持ちにくい。そのため、女性研究者に共通する諸問題に、個人の努力で対応しなければならない側面が強い。そこで本事業では女性研究者の研究力を強めるタスクチームを組織し、女性研究者の研究継続支援や研究資金獲得、研究成果公表のための支援体制作りを進めることとなった。

具体的には、以下のような取り組みを行った。

- ①学会開催マニュアルの作成による学会開催準備の効率化と利用可能な情報の提供。
- ②学会開催時における託児支援制度の整備による本学での学会開催の促進。
- ③科学研究費助成金などの研究費獲得のためのニーズ調査と支援体制の構築。
- ④国際学会への参加促進を目的としたセミナー開催による研究成果公表のための支援。
- ⑤パートナーフェローシステムの導入による、研究者カップルがともに赴任できるような雇用制度・研究環境整備のための試み。

(2) 実施内容

①学外研究交流支援

a) 学会開催マニュアル

首都圏から離れた地方に立地する大学の研究者にとっては、関東圏や関西圏で開催されることが多い学会や研究会への参加に要する費用や時間が大きな負担となっている。それらを軽減する方法のひとつとして考えられるのが、学会や研究会の開催の誘致である。本学が立地する青森県弘前市は、観光資源も豊富であり、また学会開催による地域経済へのメリットも大きい。平成24年度においても本学が主催団体となる学会・学術集会は16件にもものぼる。

しかしながら、学会開催校となった際の研究者の負担もまた大きなものがある。とりわけ初めて開催担当者となるような若手研究者は、必要な物品の所在や会場設営のための手続きといったことをひとつひとつ担当者に問い合わせるといったことも少なくない。そこで学会開催の準備を効率的に進めるための手助けとして、女性研究者の研究力を強めるタスクチームでは、学会開催マニュアルを作成し、学内の研究者に提供することとした。

本学においては、医学部産科婦人科学教室ウェブサイトにおいて「学会準備マニュアル」が公開されており、教室および著作者の許諾を得たうえで、これをベースに学会開催マニュアルを作成した。ベースとなる情報に加え、さらにタスクチームのメンバーが会場設営のための資材の所在情報などを収集し、これらを合わせて編集したものが『学会開催マニュアル—はじめての学会開催準備のために—』である。

現時点では、多様な開催・準備の形態をとる学会・学術集会のすべてに対応できるとは限らないが、本事業終了後は本学研究推進課に寄託する形で情報の更新と充実を図り、学内において幅広く活用されることを目指している。

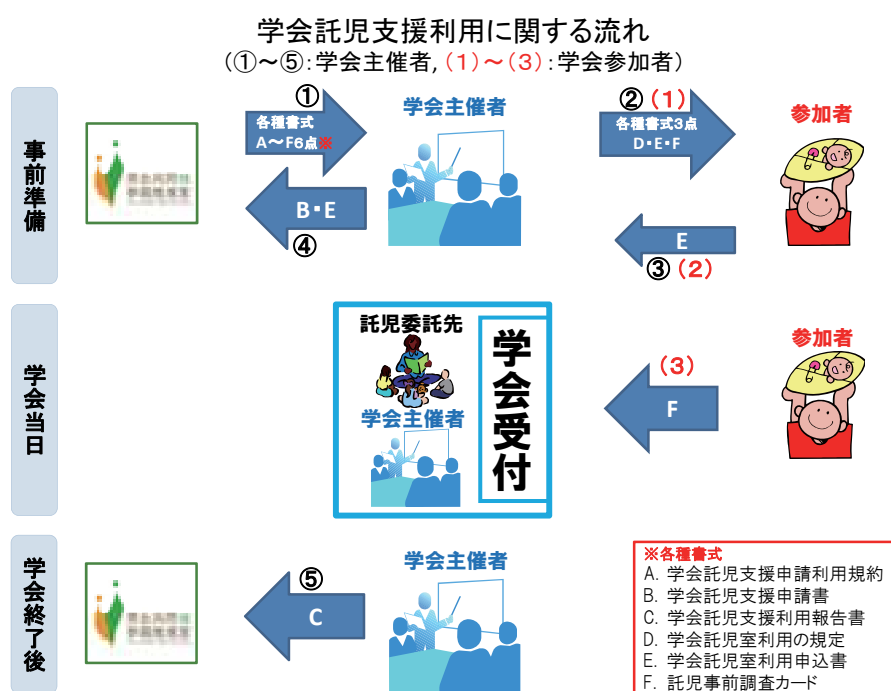
b) 学会開催時における託児支援制度

本学のような地方大学において女性研究者が直面する問題のひとつに、「女性研究者の子

連れでの学会参加の困難さ」がある。こうした困難さを軽減し、研究交流活動を活発にするための取り組みとして、男女共同参画推進室および女性研究者の研究力を強めるタスクチームでは、①意識啓発（ニーズの把握と広報活動）、②学会託児室開設支援（具体的な支援策）を目的として、平成22年度末より学会開催時の託児支援制度の策定・実施に向けた検討を開始した。

平成23年度においては、弘前大学で開催される学会での託児室開設を容易に行えるようにするための制度設計として、①受付窓口の一本化（男女共同参画推進室）、②利用規約（学会主催者向け・参加者向け）の策定、③手続きに必要な書類の書式作成を行い、これらと並行して、学会託児室の託児業務を請け負う法人（NPO法人弘前子どもコミュニティ・ピーぷる）との協議を行い、託児請負業務に関する契約を締結した。なお本事業に関する経費負担は、本学の男女共同参画推進室予算（自己資金）によって行うこととした。

支援制度を利用するための手続きは次のような流れによる。



図Ⅱ-2-1 学会託児支援利用に関する流れ

こうした準備作業に基づき、平成23年9月22日付で全学に向けての事業開始の通知と託児室開設支援を希望する学会等の公募を行った。事業の実績は以下のとおりである。

年度	学会・研究集会名	開催期間	場所	参加者数	託児室利用者数
平成23年度	日本特殊教育学会第49回大会	平成23年 9月23～25日	弘前大学文京町 キャンパス	約1800名	男子9名 女子8名(のべ30名)
	日本植生史学会第26回大会	平成23年 11月5・6日	弘前大学文京町 キャンパス	男性120名 女性42名	男子1名 女子2名(のべ5名)
平成24年度	第10回女性研究者フォーラム	平成24年 9月13日	弘前大学本町 キャンパス	男性2名 女性18名	男子1名 女子2名
	第1回日本放射線看護学会学術集会	平成24年 9月29日	弘前大学文京町 キャンパス	男性23名 女性220名	女子1名
	平成24年度北東北国立3大学連携推進会議 連携協議会男女共同参画合同シンポジウム	平成24年 12月21日	弘前大学文京町 キャンパス	男性16名 女性28名	女子1名

本事業については全学規模での反響は大きく、受付窓口である男女共同参画推進室への直接的な問い合わせ以外にも、インフォーマルな場で話題に上ることがたびたびあった。また実際に本制度を利用した学会において、次の大会においても託児室を設置するという波及効果も認められた。今後は本事業を「試行」から「継続」へと本格的に道すじをつけていくことが課題となる。費用面でのサポートがあるから利用するのではなく、学会における託児室の開設を、必要不可欠なものとして定着させていくための、さらなる意識啓発が必要となる。

②研究支援員制度

【制度概要】

弘前大学に所属する出産・育児・介護で多忙な研究者に研究支援員を配置することで、研究者のワーク・ライフ・バランスを支援し、研究活動を維持・促進することを目的として、平成24年度より研究支援員制度を開始した。

支援の対象者は、本学に所属する女性研究者または配偶者が大学等の研究者である男性研究者であり、① 母子健康手帳取得者または小学校6年生までの児童を養育している者、② 家族に要支援者または要介護者がいる者のいずれかに該当する者である。採択者は男女共同参画推進室員で構成された選考委員会で選考し、決定している。

支援期間は半期毎とし、研究支援員は実験・調査の補助、データ入力や整理、データ分析・解析補助、図表などの校正・整形等、研究上必要な業務を行う。研究支援員は申請者の推薦に基づき、男女共同参画推進室で協議し決定する。

【利用実績】

平成24年8月から制度を開始し、前期（平成24年9月30日まで）・後期（平成25年3月31日まで）の2回の募集を行ったところ、のべ人数9名の応募があり、応募者全員が採択された。学部別の採択者は、医学研究科が3名、保健学研究科が2名、農学生命科学部が1名となっている。利用時間数は一人当たり1ヶ月約50時間で、大部分の研究支援員が実験系の補助を行っていた。

【利用者から寄せられた意見・感想】

本制度は研究者への支援のみならず、被支援者である研究者は研究支援員のロールモデルとなり、次世代の研究者の育成も担っている。研究支援員からも本制度の研究支援を通して、有意義な経験をしたとの声が寄せられている。

【被支援研究者の声】

- ・「研究支援員を割り当てて頂き、身体的疲労が減り、研究の他そのほかの業務に取り組み感謝しています。来年度も本制度の継続を切望いたします。」
- ・「これまで時間のやりくりが大変で、肉体的にも精神的にもきつい状況でした。支援員の方に来ていただき実験や実習のサポートをしていただけるので、非常に助かっております。何よりも気分的に楽になりました。」

【研究支援員の声】

- ・「研究支援員としての業務内容は、実験や授業の補助など多岐にわたっています。そのため、慣れないことも多いですが、支援員として働くことで、自分の専門分野以外の研究の知識も深まり、教員という支店での知見も広げることができています。また、先生の研究に関する考え方・姿勢を近くで見聞きすることができ、一人の研究者としてのあり方について非常に勉強になっています。」
- ・「今は与えられた業務を行うことで精一杯ですが、今後は自分の意見なども伝え、研究の推進につながるよう努力したい。」
- ・「研究支援員を始めて、自分の実験スキルの向上と共に、新たなスキルも身に付けることができ、研究者として向上することができます。更に自分の分野とは違った研究をすることで、違った観点から物事を見ることができ、新たな面白さを感じることができています。」

③研究資金獲得支援

a) 論文投稿費助成金および英文校閲費助成金

【制度概要】

弘前大学に所属する女性研究者の研究力を強めるタスクの一環として、平成 22 年度に論文投稿費と英文校閲費の補助を行う「論文投稿費助成金制度」と「英文校閲費助成金制度」を実施した。この制度は、研究成果公表の支援体制整備を確立するために、研究成果公表に要する経費支援を望む女性研究者数や必要な補助金額、実施時期等の実態を把握するためのニーズ調査を目的として行った。

支援の対象者は、弘前大学に所属する女性研究者であり、申請論文の著者の一人または校閲を依頼する文書の著者の一人とした。同制度の採択件数は半期毎で 20 件、経費を望む正確な女性研究者の数を把握するために、申請は随時受け付けた。選考は月末ごとに行い、翌月 5 日までに申請者へ結果を通知し、採択後にその成果を報告するようにした。

【利用実績】

実際に申請を受け付けた 3 ヶ月間で、11 名の助成研究者が申請を行った。審査の結果、内 2 名が論文投稿費助成金、内 7 名が英文校閲費助成金に採択された。学部別の採択者は、保健学研究科 3 名、農学生命科学部 2 名、医学研究科 1 名、教育学部 1 名、その他 2 名となっている。採択された女性研究者の 7 名の論文が『Nature Genetics』等の学術誌に掲載された。

b) 学内の英文校閲機関

【制度概要】

平成 9 年度に弘前大学医学部研究科にメディカル・イングリッシュ・センター (MEC) が設置され、英語論文の校閲を行っている。最近の学位論文のほぼすべてが英文であり、大部分が国際誌に公表されている状況から、研究支援の一環として設立されたものである。

利用者は原則、医学研究科に所属する常勤の研究者および学生であり、校閲を依頼する際は、論文を保存したフロッピーディスクを MEC に持参またはメールで論文を送信する。校閲を依頼された論文は、MEC の非常勤職員が校閲し、約 2 ～ 3 週間で利用者へ校閲後の論文が返却される。

校閲費は250単語1ページとし、1ページあたり2,000円となる。このうち10ページ分はMECから支払われ、超過したページは1ページあたり1,500円が利用者の自己負担となる。

【利用実績】

MECは平成9年度に開設され、これまでに多くの研究者が利用してきた。近年の利用者数は、平成22年度は45件、平成23年度38件、平成24年度37件である。平成24年度は報告書発行の都合上、平成24年4月～平成24年12月の利用者数を利用実績としている。

c) 科研費アドバイザー制度に関する現状調査（部局担当者への聞き取り）

男女共同参画推進室「強めるタスクチーム」では、女性研究者支援の一環として、研究しやすい環境を整備する取り組みをすすめてきた。助成金申請書類作成相談員制度のさらなる充実化は、弘前大学に所属する女性研究者へ、より研究しやすい環境を提供するものである。本書類作成相談員制度が充実すれば、女性研究者だけでなく男性研究者にとってもプラスとなり、全学的な研究活動の活性化に繋がる。

上記のような取り組みを進める第一歩として、科研費を中心とする助成金申請書類作成相談員制度の現状把握を試みた。調査の結果、全学のアドバイザー制度は平成20年度まで実施されていたが、利用率が低かったことおよび同じ分野の者同士で申請書類のチェックを行なう方が効果が高いという理由により、廃止されたことが明らかとなった。一方、平成20年度（21年度公募時）より、部局毎にアカデミックチェックを行うよう求める科研費申請の基本方針が打ち出された。さらに、平成21年度（22年度公募時）より、科研費の採択状況に応じたインセンティブを配分し、各部長のリーダーシップの元、アドバイザー制度を実施するような環境整備が進んだ。このような経緯で開始された部局ごとのアカデミックチェック体制であるが、部局間で制度の実施状況が異なっていることも明らかとなってきた。これらのことから、各部局における実施状況を的確に把握し、制度の充実化について検討するため、平成23年度に部局ごとの科研費アドバイザー制度実施状況についてのアンケートを行なった（1部局のみ平成24年度に回答）。アンケートを行なった部局は、人文学部、教育学部、医学研究科、保健学研究科、大学附属病院、理工学研究科、農学生命科学部、の7部局である。

アンケートの結果、3部局が科研費アドバイザー制度またはそれに準じる取組（申請書

のアカデミックチェックなど)を実施していると回答した。アドバイザー制度を実施している部局に関して、増加幅には差があるものの、全ての部局から採択率が上昇しているとの回答を得た。これらのことから、本制度を実施している部局では取組みの成果が表れていると言える。本制度を実施していない部局に関しては、制度化しなくても教員が自主的に同僚間で互いにチェックを行なっているという部局がある一方で、「部局内に近い分野の研究者が少数しかいない(分野によっては1人)ため部局内のメンバーだけでピアレビューを行なうことが困難である。全学な取組として行なって欲しい」という部局も存在した。本アンケートを通し、科研費アドバイザー制度について、実施の必要性や実施のしやすさ等、様々な事情が部局によって異なることが明らかとなった。本学ではこのような経緯を経て平成24年度(25年度公募時)より、部局ごとの科研費申請書アカデミックチェックが義務化された。

d) 研究助成金申請書の閲覧

弘前大学に所属する女性研究者の研究力を強めるタスクの一環として、平成22年度から採択された研究助成金申請書を閲覧できる研究支援体制確立の検討を行っている。採択された研究助成金申請書を公表することで、各研究者の申請書の内容が充実し、外部資金採択率が向上する効果が期待される。しかしながら個人情報情報の漏洩や申請書の管理等の課題があり、申請書を公表することはできなかった。

これらの課題を解決し、平成24年10月理工学研究科において採択された科学研究費補助金の申請書を公表した。公表に際しての課題解決策として、① 閲覧は理工学研究科に所属する職員・研究者のみ、② 申請書は事務長・研究協力担当職員の居室でのみ閲覧可能、③ 申請書の原本・写し共に持ち出し禁止、④ 閲覧可能期間は10月3日～19日とした。研究者のみならず、科学研究費補助金の申請書をチェックする職員に対しても申請書で注意すべき点を示すことができ、申請書の公表は効果的であった。

④研究成果公表支援

a) 国際学会対策セミナー(全2回)

本事業では、女性研究者の成果公表支援の一環として、国際学会対策セミナーを開催した。これらは、本学における国際学会対策に対するニーズ調査も兼ね、第1回は初級編、

第2回は初中級編と、異なるレベルの参加者を対象に複数回行われた。講師は弘前大学周辺に位置する民間の英会話スクールから招へいた。

第1回の初級編は、女性教員および理系を専攻する全てのポスドク・大学院生・学部生を対象に、国際学会対策としての英会話セミナーを開催した。参加者9名は皆、国際学会での発表を控えている、または目指している方々であった。参加者からはセミナーの定期的な開催を望む声が多く寄せられた。第2回の中級編には、国際学会を控えた方々を中心に熱心な参加者が集まった。第2回の参加者は全員が理工農系の方々であった。中には研究室内で誘い合っただけの参加もあった。第2回の参加者からは、「次回も同じ講師に習いたい」「次は〇月に開催して欲しい」等、満足の声があった。さらに専門的・本格的なレッスンを望む意見があった一方で、プログラムが少し難し過ぎたという声もあり、求められているレッスンの難易度に大きな幅があることが明らかとなった。

本学では、平成24年度より、学生を対象としたイングリッシュ・ラウンジという英語コミュニケーション教育のための組織が発足した。しかし、そこで実施される英語のプレゼンテーションや論文執筆セミナーに教員は参加することができなかった。本事業での取り組みを通じ、国際学会や論文執筆などに関する「専門的な英語」の講習会に対するニーズが学生だけでなく教員において高いことが明らかとなったこと踏まえ、イングリッシュ・ラウンジでは、平成25年度以降はこのようなセミナーの対象者を教員にまで広げて実施することとなった。このような経緯により、平成24年度まで男女共同参画推進室により実施されていた国際学会対策セミナーはイングリッシュ・ラウンジでの取り組みに統合されることとなった。男女共同参画推進室では、ウェブサイトイングリッシュ・ラウンジのリンクを貼る他、女性研究者フォーラムなどで明らかとなったネイティブ・イングリッシュの講師によるセミナーに関する意見・希望をイングリッシュ・ラウンジに伝えるなどの協力を今後も続けていく方針である。

第1回 国際学会なんてこわくない！—初級編—

「ポスター発表の基本からバンケットでの交流まで」

日時：2012年2月23日（木） 13:00～15:00

会場：弘前大学 文京キャンパス 附属図書館 本館3F ラーニング・スクエア・スペース

講師：エープラス イングリッシュスクール 講師 ミッシェル・アーネンセン

内容：ポスター発表の基本、自己紹介や意見交換で使える英語のミニレッスン、自由質問

参加者：9名（女性教員5名、ポスドク1名（男性1名）、大学院生2名（男女各1名）、学部生1名（男性1名））

オブザーバー：男性1名、女性4名

第2回 国際学会なんてこわくない！—初・中級編—

「口頭発表と質疑応答を制する！」

日時：2012年7月12日（木） 13：30～15：30

会場：弘前大学 文京キャンパス 附属図書館 本館3F ラーニング・スクエア・スペース

講師：エープラス イングリッシュスクール 講師 ミッシェル・アーネンセン

内容：国際学会における質疑応答および交流会での意見交換の基本

参加者：14名（女性教員3名、男性教員2名、男性ポスドク1名、女子大学院生1名、男子大学院生7名）

⑤パートナーフェロー制度の試行

a) パートナーフェロー制度の概要

パートナーフェロー制度は、本学に赴任する予定の教員のパートナーを特任助手として採用し、家族とともに暮らしながら研究を継続する環境を整えるための試行として実施した。本事業計画立案時の聞き取り調査から、本学の常勤教員のパートナーの中には、結婚・出産やパートナーの異動などのライフイベントに伴い、自身の研究キャリアを中断した例が少なくないことがわかっている。修士号取得段階で研究を中断したが、可能ならば研究を再開して博士号取得をめざしたいという希望をもつ研究者の研究継続を支援するための制度の検討・試行と位置づける。

応募要件は、赴任予定教員のパートナーであること（事実婚を含む）、当該応募者が修士号を取得していることである。当初、本事業は理系に限定した女性研究者支援であったため、平成22年度公募では赴任予定教員の専門分野が理系であることを条件としたが、事業の枠が拡大された平成23年度公募分については文理融合分野も可とした。

b) 成果と課題

公募開始当初から反響は大きく、平成23年度後期分までで、12件の応募があった。内

訳は、男性2名、女性10名で、応募者の専門分野は理系がほとんどである。問い合わせを含めると、19件の反響があった。また応募書類のなかで、家族と別居しながら研究を続けてきた困難な経験や、研究と家庭生活を両立できない現状の問題について述べている研究者も多かった。これらのことから、このような取り組みは一つの大学のみでなく、広域にわたる大学・研究機関の連携によってなされる必要があることは明らかである。

本学では、平成24年5月から、結婚等のライフイベントを機に研究を中断していた応募者1名を特任助手として採用し、女性研究者ネットワークの構築や理科系の裾野拡大イベント等の業務を担ってもらうとともに、研究活動再開への準備を整えることを研究エフォートの中に盛り込んだ。

このように反響が大きく、成果もあげられたこのパートナーフェロー制度の試行であるが、以下のような課題も浮き彫りになった。まず、応募者の専門分野と本学で行われている研究のマッチングの問題がある。また、「赴任予定教員のパートナー」を応募資格としたため、常勤教員の公募に応募しているパートナーの採用が決まってから、本制度による応募者の選考を始めるというタイムラグがあり、応募者がすでに他大学・研究機関で就職している場合には、当該機関との契約更新に問題が起こる可能性もある。

もっとも大きな課題は、本パートナーフェロー制度による特任教員の採用が任期付であることと関連する。カナダやアメリカなど、類似の制度（デュアル・キャリアシステム）の先進地域で指摘されているのと同様に、任期終了後の研究継続をどのように可能にするかが大きな問題となる。国内で先駆的な試行を行った北海道大学では、学内外の研究ポストの情報提供や独自の研究員ポストなどにより、パートナーが教員となった研究者を受け入れる取り組みを実施しているが、本学のような規模の地方大学では、修士号取得者の博士課程進学への道筋も含め、若手研究者育成システムとの連動や他大学・他研究機関との連携を視野に検討する必要がある、それによって、今後の可能性が開かれるという見通しが改めて明らかになった。

⑥特任教員・理系女性フェロー

a) 特任教員・理系女性フェロー制度の概要

特任教員・理系女性フェロー制度は、本事業における①女性研究者の交流と情報共有を目的とした女性研究者フォーラム、②女性研究者の研究力向上を目的とした各種の支援事

業、③理系女性研究者の裾野拡大と次世代育成を目的とした様々なプロジェクトの企画と実行を行うために、若手女性研究者を特任教員（特任助教）および理系女性フェロー（特任助手）として採用するものである。

本制度の特徴は、これら特任教員・理系女性フェローを本事業の中心的な担い手として位置づけるだけでなく、自らの専門分野の研究を継続・発展できる環境を整備・提供することで、諸活動と研究とを積極的に展開する女性研究者のロールモデルを形成しようとする点にある。また特任教員・理系女性フェローいずれについてもエフォートを設定することで、本事業にかかる諸活動のための時間とは別途に自身の研究を行う時間を確保し、事業終了後には自立した研究者として活動できるよう配慮した。

b) 成果と課題

平成 22 年 7 月より公募を開始した特任教員・理系女性フェロー（特任助手）については、前者に 11 名、後者に 2 名の応募があった。選考委員会による選考を経て、平成 22 年 10 月 1 日付で、特任助教・特任助手各 1 名を採用した。

特任助教・特任助手ともに、それまでの研究場所から遠隔地への赴任となったが、本事業にかかる様々な事業について、積極的に運営に携わるとともに、自らの研究についても着実に業績を重ね、当初想定した以上の成果を挙げたといえる。いずれも、科学研究費補助金、民間の助成金などの外部資金や学内の若手育成支援などを獲得して、活発な研究活動を続けているほか、異なる専攻分野との共同研究を開始するなどの成果を収め、学部学生や大学院学生にとって非常に良いロールモデルになった。また、理系の裾野を拡大する学外向けイベント等を通して、県内の小中学校、高校および地域 NPO や県内市町村との連携を深化させるうえでも重要な役割を果たし、指導者としてのスキルも磨いた。

しかしながら、パートナーフェロー制度と同様に、特任教員・理系女性フェローの採用が任期付のものであることからくる課題は大きいといわざるをえない。任期が終了した後の研究環境や就労条件をどのように確保するか、さらには諸活動を通じて構築した研究者間および地域ネットワークをどのように維持・発展させていくかといった問題が残されている。国立大学の人件費が削減され、教職員のポストの位置づけが流動化するという状況のもとで、将来有望な女性研究者の自立を図るためには、一大学ないし一機関を超えた連携の必要性があると考えられる。

3. 理系研究者の裾野拡大

(1) 背景と目的

本学では小・中・高生に理系学問の面白さを伝えるため、「科学者発見プロジェクト」や「ラボバスプロジェクト」などをはじめとする多数の事業が実施されている。しかし、これらの事業は、部局ごとに個別に行われてきたため、実施主体の間での情報共有が十分に行われているとはいえなかった。また小・中・高校といった教育現場では、大学から別個に送付される事業案内の多さとその対応についての混乱が生じている、といった問題点があることが明らかになった。

一方、大学院生を対象に実施したアンケート調査からは、理系の学生が理科教師になる希望をもって進学していることも明らかになった。教職希望者への支援はこれまでも行われてきたが、実験のできる優秀な理科教師を輩出することは、子どもたちの理系の学問分野への興味を喚起し、理科離れ傾向に歯止めをかけるうえでも有効と考えられる。さらには中高生にたいして新たなロールモデルとしての女性研究者像を示すことは、次世代を担う研究者を生むインセンティブになるであろう。

そこで本事業では、主に以下のような取り組みを行った。

- ①小・中・高校生や一般市民が、弘前大学で開催されるイベント情報にアクセスすることを容易にするため、現在散在している既存の取組の情報を統合し、ウェブサイトで広報するとともに、小・中・高校からの出前授業の依頼などへの対応窓口の一本化を図る。
- ②(女子)中・高生のための理系講座・出前授業を行う。
- ③理科教師になりたい学部学生や大学院生の人材バンクを作り、学生が所属研究室などに関わりなく既存のプロジェクトにTAとして参加できる仕組みを充実させ、教えるスキルを身に着けることで「実験のできる理科教師」を育成し、長期的に理科好きを育てる試みを行う。
- ④特別教員などが身近な道具を用いた実験案集(既存)とラボバス(既存)を使用して、人材バンク登録者を対象に講習会を行い、理系イベントの学生サポーター育成とともに、学生の教えるスキルの向上をめざす。

(2) 実施内容

①情報の統合と発信

a) 理科離れ対策支援専門委員会との連携

本学では各部局で多くのイベント等を行っていたが、関係者以外に十分周知されておらず、小規模な類似したイベントが数多く実施されていた。そのため、情報を一元化し、部局間の連携を図り、より効率的にイベント等を実施できる体制を整えるよう働きかけた。

これを受けて平成22年10月に、各部局から選出された教員で構成された理科離れ対策支援専門委員会が発足した。この専門委員会を中心に、部局ごとに行ってきたイベント等の事業を『理科離れ支援事業』という大きな全学的テーマとして扱い、それに関する情報の一元管理化・事業強化を目指した取り組みが進められた。「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の「拡げるタスクチーム」がこの専門委員会に重ねられたともいえる。理科好きの裾野を拡げ、広く次世代を育成するために、全学的な事業として、地域の学校やNPOなどとの連携をはかる取り組みを進めた。

本事業は、理科離れ対策支援専門委員会で情報共有を行い、理科教師の教育力向上を目指した教育学部ラボバスプロジェクトや、白神自然環境研究所、生涯学習教育研究センター、農学生命科学部遺伝子実験施設、生物共生教育センターと連携し、小中高生を対象とした理系イベントを実施した。

b) イベントカレンダー作成と配布

学内で実施されているイベントを効率よく学内外へ周知するために、平成23年度および平成24年度に学内イベント情報をまとめたイベントカレンダーを作成した。平成24年度は、理科離れ対策支援専門委員会の提案に基づき、委員会担当部署と共同でイベントカレンダーを作成し、本学ウェブサイトのトップページに掲載した。

平成23年度は学部新生にイベントカレンダーを配付し、平成24年度は生物共生教育センター主催のイベントで地域住民を含む来場者へ配付した。

②理系への関心を高める実施イベント

理科の裾野を拡げる「拡げるタスクチーム」が中心となり、地元NGOや各部局と連携し、13回の理系イベントを企画・実施した。第1回「白神の植物標本作成講座」は拡げる

科学に興味が高く講座 「つがるの昆虫博士養成講座・入門編」

日時：2011年9月2日（土） 9:00～12:00
 場所：弘前市こどもの森センター（弘前市大字前沢字山北）
 主催：弘前大学生涯学習教育研究センター
 後援：弘前大学自然環境研究所、弘前大学男女共同参画推進室
 参加人数：小学生2名とその保護者
[ポスター](#) (PDF 340KB)

【講座内容】

前編12月の講座により興味が高まりましたが、当日はこの第一歩の着点を記録するほどの晴天に恵まれました。講座には市内の3つの小学校からそれぞれ1名ずつ合計3名が参加しました。担当好きの3年生たちは、講師の中村先生（自然環境研究所）から早速で飛ぶトンボを巧みに網でとらえるコツを教わったり、同じく講師として参加した鶴井・赤崎（ともに男女共同参画推進室）と一緒に、とらえた昆虫の名前を記憶で調べる体験をしました。講座の後半には、カブトムシの標本作成も行い、出陣上がった標本は各々お土産として持ち帰りました。

講座主催者の深井先生（生涯学習教育研究センター）から「今度はいつやるっか？」との問いかけに、すっかりお話し親しい親友になった博士のタマごたちが「明日！」と声をそろえた講座でした。



むつ市 弘前大学連続講演会 第3回目 「活性化する青森の今とこれから」 （あおもり県民カレッジ・高校生スキルアッププログラム単位認定講座）

日時：2011年10月20日（木） 18:30～20:30
 場所：むつ市下北文化会館 視聴覚室（むつ市金田1丁目10-1）
 演題：「リケ女で地域を盛り上げる！～2人の女性実生博士の研究～」
 1. 「リケ女という人オ」 鶴井 香織（男女共同参画推進室 特任助教）
 2. 「コガネムシのぼなし」 赤崎 真由美（男女共同参画推進室 特任助教）
 3. 「バッタの標本の意味をさぐる～動・器・想～」 鶴井 香織（同上同じ）
 主催：弘前大学生涯学習教育研究センター・むつ市教育委員会
 参加人数：19名

【イベント内容】

講演会には、高校生から一般の方まで男女問わず幅広い参加がありました。講演会ではまず鶴井が、性別などの立場を問わず誰もが生き生きと個性を發揮できる社会をつくることこそが人材育成を促進することになり、地域を盛り上げることに繋がるとはならないか、という考えを紹介しました。続いて、立場を問わず生き生きと活動している人の一例として、リケ女（理系を専攻する女性のこと、現在はまだそれほど数が多くないとされています）である赤崎と鶴井より、自身が取り組んでいる研究の内容が紹介されました。赤崎からは、カブトムシが含まれる分類グループであるコガネムシのツノや色について、専門的な解り難い知識を交えたわかりやすい解説がありました。鶴井からは、バッタをはじめとする様々な生物が持つ体の色や模様の意味について、身近な例を交えた解説がありました。プログラムの最後に設けられた質疑応答の15分間では、何人もの参加者が次々と質問を投げかけ、時間が足りなくなるほど活発な交流を行うことができました。





Report 4

「ミニ昆虫展とバッタのジャンプ大会」 - 虫の跳躍を科学する -

日時：2011年10月22日（土） 10:00～17:00（ジャンプ大会は 14:00～16:00）
 場所：弘前大学農学生命科学部棟1階 151講義室
 参加人数：134名（記念してくださった一部の方々）以上
[ポスター \(PDF 289KB\)](#)

【イベント内容】

イベントでは、昆虫標本の展示、バッタのジャンプをハイスピードカメラで撮影した動画の上映、バッタのジャンプ大会（バッタをジャンプさせ、その高さと方向角度を測る）が行われました。イベント当日には、農学生命科学部の学生2名が補助者として協力してくれました。少し変わった教室での開催となりましたが、お帰りに入館の小さな子供たちから中高校生、大学生、一般の方々まで、男女問わず大勢の万々が足を運んでくださいました。みな、バッタの昆虫標本に見入り、バッタのジャンプのハイスピード動画に感嘆の声を上げ、自分の手で採んだバッタをジャンプコースに跳せて測らせる体験をしました。

撮影：ハイスピードカメラでの撮影に際して、理工学研究所 城田 豊 助教 と 理工学部 福士 泰 君にご協力いただきました。



Report 5

弘前大学ラボバスプロジェクトDNA実験講座
～ 昆虫のDNAを比較する、尾上総合高校編 ～

日時：2012年1月26日（木） 13:30～16:30
場所：弘前大学遺伝子実験施設
参加者：青森県立尾上総合高等学校2年生5名（女子学生3名、男子学生2名）、教員1名

【講座内容】

尾上総合高等学校からの依頼を受け、アガロースゲル電気泳動の体験を中心としたDNA実験講座を開催しました。参加した高校生5名は、DNAを増幅するPCRや、DNAを特異的な塩基配列で切断する制限酵素処理にも挑戦し、コガネムシ科の昆虫3種のDNAの比較をしました。待ち時間が多いDNA実験ですが、その時間を活用して担任教員の話や、高校生活、将来のことなどについてじっくり交流する時間を持つことができました。



Report 6

森の探検隊 早春の里山ウォーキング

日時：2012年3月10日（木） 10:00～14:00
場所：大鰐町 早瀬野・奥田地区（ひばのくに経典館）
主催：道の館入道実行委員会
片側：大鰐町、大鰐町地域交流センター等oomw
後援：つがるネットワークス「地域でつなぐ女性人材」、弘前大学白神自然環境研究所、ひばのくに経典館、白神山地財団
参加人数：16名（大人13名、小学生3名）
ポスター：(PDF 203KB)

【イベント内容】

昨年よりもちがちな多い積雪の中、青森県大鰐町早瀬野・奥田地区で「第2回 森の探検隊 早春の里山ウォーキング」が開催されました。参加者は小学生から大人までの幅広い方々で、弘前市や大鰐町からだけでなく青森県から訪れた参加者もありました。参加者たちはかんじきやスノーシューを履き、数十センチ以上の積雪が降り積もる林道を歩きました。「新雪は積雪がなかったのに動物の足跡は見られないかも？」という予想をよそに、雪の上に無数二本カマシカ、デク、キツネ、タヌキ、鳥（カケス?）の足跡を観察することが出来ました。また、林道脇の木の新にくっきりとしたツギノフグマの爪痕を見つけることも出来ました。人里近くにも数多くの動物たちが暮らしていることを実感するイベントとなりました。



「リンゴとチューリップのフェスティバル」への出展

日時：2012年5月19日（土）～20日（日） 10:00～13:00
 場所：弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 藤崎農場（藤崎町藤崎）
 主催：弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 藤崎農場
 来場者数：2204名

【イベント内容】

藤崎農場でおこなわれたリンゴとチューリップのフェスティバルに出展し、「つがるネックレス」地域でつなく女性人財」の事業内容を説明したポスターと弘前大学男女共同参画推進室ニュースレター「さんかくつうしん（かわら版）」の展示・販売をおこないました。また理系の裾野を広げる目的として、弘前大学が今年度を実施するとまだ少ない科学体験イベントをリストアップし、それぞれの内容や時期、参加費などをわかりやすく記載した「科学体験イベントカレンダー」の配布もおこないました。2日とも良いお天気に恵まれ、チューリップの花も満開でポスター会場にも多くの方々においでいただきました。



親子体験学習・昆虫採集

日時：2012年6月16日（土） 13:00～13:00
 場所：弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 藤崎農場（藤崎町藤崎）
 主催：弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 主事室
 後援：弘前大学男女共同参画推進室「つがるネックレス」地域でつなく女性人財」
 参加者数：33名（20家族）

【イベント内容】

主事室が主催する親子体験学習第2回の午後の部で野外昆虫採集イベントとラミネート標本作成教室をおこないました。
 まず野外観察会や、家族ごとに協力して目的の昆虫を採る昆虫採集ミッションをおこないました。農場内に採られた標本をみると、カブトムシの蛹がごろごろ出てきて、子供だけでなく大人の参加者も興味津々の様子でした。
 昆虫採集の後は室内に入り、ラミネート標本作成教室をおこないました。海外製のチョウの標本を使い、自由な発想で翅を加工して作品を作りました。大層にお節かきする子や使い慣れないピンセットに戸惑八荒する子など様々でしたが、それぞれに個性豊かな作品が仕上げられました。このイベントでは10名の弘前大学の学生がサポーターとして活躍してくれました。





Report 9

オープンキャンパス企画 内田 麻理香 氏 講演会
「理系かも？」とおもったら ～理系の進路いろいろ～

日時：2012年8月8日（水）
 午前の部 11:00～12:00 午後の部 13:00～14:00
 会場：私大大学創立50周年記念会館 3F 和木ホール
 講師：サイエンスコミュニケーター 内田 麻理香 氏
 参加人数：121名（午前の部 52名・午後の部 69名）
[ポスター1](#) (PDF 699KB) / [ポスター2](#) (PDF 273KB)

【講演会内容】

オープンキャンパスで来学した高校生への進路選択のヒントとして、メディア等で活躍されている内田麻理香氏の講演会を開催しました。

講演では、アニメのガンダムに憧れて東京大学工学部に入学し、大学院に進学しましたが、進路に迷い、専業主婦時代を経て、現在のサイエンスコミュニケーターという職に就くまでの内田氏の経歴と、10人の理系出身者の多様な進路が紹介されました。

内田氏からは「新しいときは不安で！」という力強いエールが送られました。講演に参加した多くの高校生が、内田氏の「科目の得意不得意でなく、『好き』という気持ちを優先させれば、新しい進路選択ができる」を印象的な言葉として挙げました。また、「文系だと思っていたけど、理系かもよと思った」「自信を持てるようになった」という感想を寄せた高校生もありました。



Report 10

白神山地で学ぶ 親子で植物観察 & 草木染め体験講座

日時：2012年9月8日（土） 10:00～15:00
 場所：私大大学白神山自然観察園（青森県西目黒村川原平）
 参加人数：15名（家族）
 共同開催：白神山自然環境研究所・私大大学男女共同参画推進室「つがるリソース」地域でつなぐ女性人材
[ポスター](#) (PDF 730KB)

【イベント内容】

白神山自然観察園で植物観察 & 草木染めの講座を開催しました。親子での参加者が増えたところ、小学生から高校生まで幅広い年齢層の参加者が集まりました。講座は植物観察からはじまり、参加者は観察園内で白神山の自然を楽しみながら、草木染めに使用する植物を探りました。草木染

め教室では、親子が1チームになり、用意された卵を回して染める作業をおこないました。卵の殻によって、また染出す時間によっても最後の染まり具合は異なったものになります。参加者は、講師の先生と一緒に染付けの色を慎重に確かめながら、真剣に卵の殻を巻き回していました。それぞれのチームが違う卵を使ったので、色とりどりの卵物が完成し、草木染めならではの優しい色合いを堪能することができました。

イベントの様子を、2012年8月8日に「白神山地で学ぶ～植物観察&草木染～」というタイトルで、「弘前ライブニュース アップルストリーム」にて動画配信されました。



**農学生命科学部 動物生理学・野生動物管理学研究室、
動物生理学研究室合同セミナー
「海洋を学び、祖先に思いを馳せる」**

日時：2012年12月12日（木） 16:00～17:00
 場所：弘前大学農学生命科学部402講義室
 講師：東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター 窪田 かおる 特任教授
 参加人数：約40名
 主催：農学生命科学部 動物生理学・野生動物管理学研究室、動物生理学研究室
 共催：農学生命科学部研究力推進セミナー
 後援：弘前大学男女共同参画推進室「コガルキッズ」地域でつなぐ女性入学

【セミナー内容】

再発見された動物（脊椎動物）の進化的起源解明の鍵を握るとされる動物「ナメクジワオ」の生態、内臓機能などの研究の第一人者である窪田かおる先生を講師にお招きし、セミナーを開催しました。セミナーでは、まず、想像にすることのないナメクジワオの標本が展示し、単純ながらも私たち脊椎動物との共通点があるその姿をじっくりと見ることでできました。その体形とあわせて、脊椎動物の基本的なゲノムセットを持っていることなどから、ナメクジワオの進化的な重要性が紹介されました。また実験室で撮影されたナメクジワオの希少な産卵シーンの動画が紹介され、芋虫からの産卵を受けて、ナメクジワオ特有の受精の仕組みが述べられるなど、興味深い話が満載のセミナーとなりました。

さらに、窪田先生が研究を始めた当時、ナメクジワオは指にすることの少なことから地味ながる備される生き物といわれていたにもかかわらず、先生の08年わたる地道な生態調査から、偶然によっては貴重な生態に気づくことが明らかになり、生物学的な実験に使えるようになったという話もあり、先生のナメクジワオ研究に対する情熱に参加者一層圧迫されました。

セミナーの趣旨は、日本動物学会の男女共同参画推進委員はじめ、大学等での男女共同参画を進めている立場から、日本の大学の女性教員比率がまだまだ低い現状や、女性研究者支援の重要性の話がありました。そして、現在の所属ではとくに女子学生の海洋教育に力を注いでおられることから、海洋学で活躍する女性研究者の紹介もありました。

選択制の多い時代に送ること多いけれど、とりあえずでも選択し、前進することが大事、「いつか私の時代がくる！」と意を決してみようといったエールが送られました。セミナー後におこなわれた懇話会は、窪田先生のお話とへ積極的に関与を投げかける学生の姿が印象的な会となりました。





Report 12

遺伝子実験講座

～ 光る大腸菌プラスミドベクターを用いた遺伝子操作とシーケンス解析 ～

日時：2013年3月2日（土） 10:00～16:00
 場所：名古屋大学遺伝子実験施設4階 実験実習室：研修セミナー室
 参加者数：専修大学立山前南高等学校21名、教員2名
 主催：理学部生命科学部附属遺伝子実験施設
 共催：名古屋大学男女共同参画推進室（ツガルネットワークス「地域でつなぐ女性人材」）

【講座内容】

今回の実習は、遺伝子研究の基本的な実験操作を実際に行わせて、DNAの構造や、遺伝子についての理解を深めようというものでした。

実際の作業に入る前に、時間をかけて行われたのが、ピペッターの正しい使用法の指導です。マイクロリットル単位での操作が必要な遺伝子実験では、必須の操作です。高校生たちは、一人一人ピペッターを手に持ち、シャドウトレーニングを繰り返し、ピペッターの使い方に慣れてから、実験の手順書に沿って一つ一つの作業を確認しつつ実験を進めました。

遺伝子を選ぶために開発された増殖したDNA「プラスミドベクター」を「制限酵素」という分子の「ハサミ」で切断し、この切断した場所に遺伝子XのDNAを「ライゲース」という「のり」の機能を持った酵素でつなぎ、もう一度増殖したDNAにもどす「遺伝子組み換え」操作を行いました。遺伝子組み換えがおこななかったプラスミドベクターを取り込んだ大腸菌のコロニーは、特別な光を当てると緑色の蛍光を発するのに対し、遺伝子組み換えがおこなったプラスミドベクターを取り込んだ大腸菌のコロニーは、光を当てても蛍光を発することはありません。コロニーが光るか光らないかを指標にして、うまく遺伝子組み換えができたプラスミドベクターを調べるができるというのが、この実験の重要なところで、光らない大腸菌コロニーから得たサンプルで、組み換えプラスミドの抽出を行い、アガロース電気泳動により、プラスミドベクターに挿入した遺伝子Xの確認を行いました。

高校生たちは、普段このような実験器具を触ったりすることがないので、最初はおっかなびっくり作業を進めていましたが、実験の終わには手際よく作業を進めることができるようになっていました。経験の積み上げシーケンス解析はできませんでしたが、高校生は実験補助者とも打ち解け、とても楽しそうでした。



「研究者のトビラ!!!」開催のお知らせ

弘前大学男女共同参画推進室では、若手を中心とした進化・行動生態学者の名を弘前大学にお届けし、以下の表で「研究者のトビラ!!!」を開催いたします。

午前の部では、見やすい資料やポスターの作成方法を東北大学の高橋尚徳氏が実演を交えて解説します。午後の部では、「オスとメスの関係を取り入れた生物の世界の新しい理解」を共通テーマに、タンポポ、マメソウムシ、チョウ、カメムシ、バッタ、トンボなど、昆虫を中心とした身近な生物たちを用いた研究をわかりやすく紹介します。その他、研究をはじめたきっかけや経歴、仮説の証明方法、共同研究の大切さ、うまくいかないときの乗り越え方、研究の成果の広め方、研究の上で大変なことや苦労など、を語ります。また、行動生態学と他の研究分野との関連性や、研究成果がどのように役立つのかについても紹介する予定です。

このセミナーは、学生の方にも研究者の方にも楽しく有意義なものとなるようにと、バリエーション豊富な話題ながらもまとまりがあるように工夫しました。地球上のあらゆる生物がニュートン力学の法則に従って運動するように、生物の世界は自然選択によってすみずみまで合理的に形成されています。「生物学」は暗記ものではないことを実感してください。

日時：平成25年3月25日（月） 10:30～18:30

場所：弘前大学 総合教育棟3F 304講義室

午前の部： 発展的・研究発表会員のデザインワークショップ (10:30～12:30)

ゆるいデザインの原則とノウハウ、あらゆる資料を見やすく美しく

高橋 尚徳 氏 (東北大学)

午後の部： オスとメスの関係を取り入れた生物の世界の新しい理解

第1部： オスとメスの関係による分布とすみ分けの解明 (13:30～16:15)

少年時代のなぞを大人になって解く

西田 隆典 氏 (国際独立大学)

生物の教科書にけんかを売る－仮説を検証する実験－

森 浩樹 氏 (東京大学)

片足する美しみーメスの通りをいかに置くか？

西田 隆典 氏 (国際独立大学)

経路を探して息をくわー外来種侵略の真実と科学的検証のジレンマ

高倉 幹一 氏 (大阪市立大学)

隠れて分かった隠れ分けの仕組み－クロヒカアとヒカグチの起こった天災地災

林田 純典 氏 (鳥取大学)

第2部： 性はなぜあるのか－性か場内で果たす役割を解明する (16:30～18:30)

オスがなくならないのはなぜ！「モジュール」から読む生物学最大の謎

川原 一徳 氏 (京都大学)

色鮮やかな美のオスとの恋－カメムシのメスに訪れる視覚的誘惑

日置 幸徳 氏 (岡山大学)

天敵から命を守る工夫－生態学が語るバッタ・ロボット工学と見るバッタ

鈴木 善徳 氏 (弘前大学)

少腹減からみた多様性の進化学－トンボの色覚変異を例に

高橋 尚徳 氏 (東北大学)

【お問い合わせ】 弘前大学男女共同参画推進室 鈴木 昌雄

TEL | 0172-39-3883

E-Mail | hpunk@cc.zem.hokai-u.ac.jp



③学生サイエンスサポーターの育成

本事業は、実験のできる理科教師の育成を通じて次世代を担う人才の掘り起こしと、若手女性研究者の育成を行うことを掲げている。本学教育学部に所属する学生は、理科教師の育成プロジェクトに関わる機会があるが、他の理系部局に所属する学生はそのようなプロジェクトに関わる機会はない。そのため、理系部局に所属する学生が学生サイエンスサポーターとして、参加者へ実験等の指導を行う理系イベントを実施し、指導スキルを磨く機会を提供した。学生サイエンスサポーターは事前講習会で、本事業特任教員からイベント参加者が簡単に理解でき、理科に興味を湧く教え方の指導を受けた。

学生サイエンスサポーター数は22名で、所属学部は農学生命科学部（59.1%）、理工学部（27.3%）、人文学部（13.6%）である。また、学生サイエンスサポーターの約60%が女子学生である。

4. 基盤環境整備

(1) 背景と目的

柔軟なワークプランの提案や研究活動支援の円滑な推進には、それを可能にする制度の整備や現状の分析と課題発見、進捗状況管理が必要である。その意味で、女性研究者比率などの数値や意識調査を含む現状把握、育児・介護に関わる支援状況、ハラスメント防止体制に関わる調査などの基盤環境整備を進めることが重要である。

本事業では、これらに加えて、有用な情報を集積して発信する「情報ナビ」や人才バンクと情報集積の機能を兼ね備えた「情報共有サーバシステム」の整備と運用を通して、基盤環境の整備にあたり、それらを土台とした取り組みのさらなる展開を期している。

(2) 現状把握調査体制

①本学における男女比率の現状

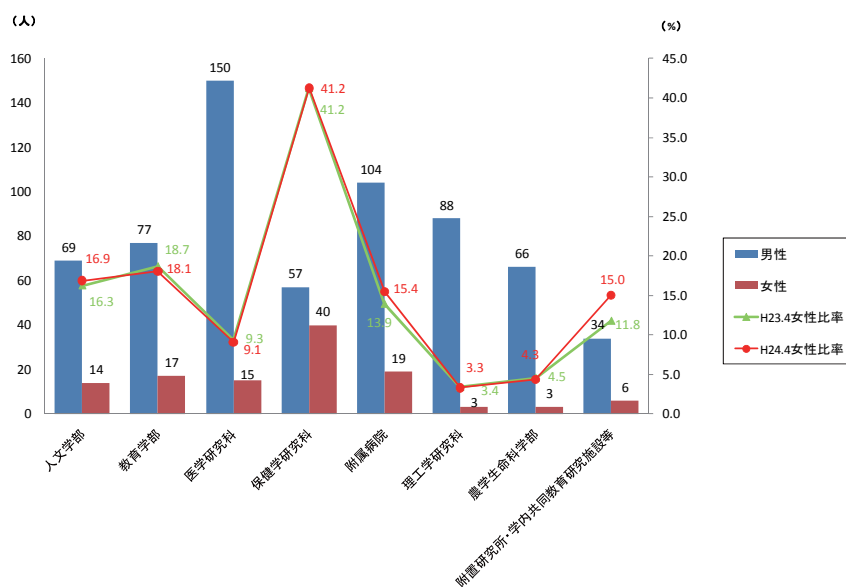
本学の男女比率は、毎年度4月1日現在の状況を把握している。平成24年4月1日現在の状況は、本学教職員の総数は1,746名、そのうち女性は827名で全体の44.8%を占めている。大学教員の総数は762名で、そのうち女性は117名（15.4%）、附属学校園教員の総数は

101名で女性は53名（52.2%）である。

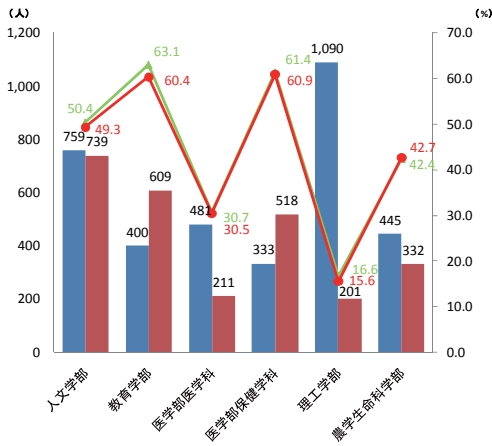
一方、特別職員・事務職員・技術職員の総数は366名で、そのうち女性は108名（29.5%）、コ・メディカル職員（医師を除く医療従事者）の総数は618名で、そのうち女性549名（88.8%）である。

この結果は、2011年4月1日の結果（以下、昨年4月の結果）と比較し、大学教員や事務系職員では女性が少ないのに対し、附属学校園教員とコ・メディカル職員では女性が半数を超えている傾向には変わらないが、大学教員は女性の比率が0.3%増加した。一方、特別職員・事務職員・技術職員の女性比率は、昨年4月の結果より1.6%減少しているが、大学全体でみると女性比率は昨年とあまり変化はなかった。

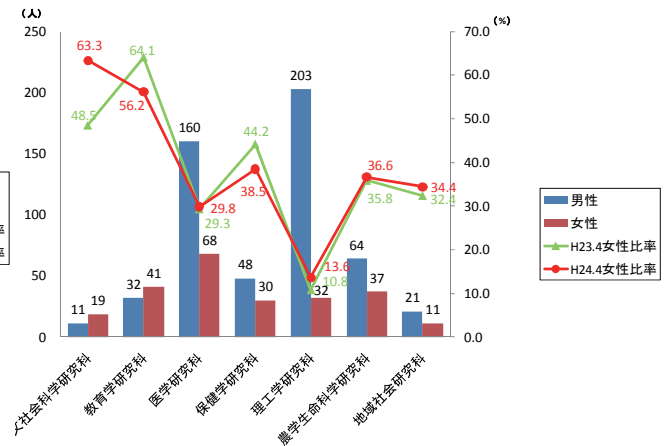
図Ⅱ－4－1の学部専任担当別の教員数と女性比率では、大学教員に占める女性比率は昨年に比べて高くなった学部等は、附属病院（+1.5%）、人文学部（+0.6%）である。また、女性比率は、保健学研究科では41.2%（40名）と高く、理工学研究科では3.3%（3名）と低く、この結果は昨年と同様である。教員全体でみると、既に記載したように女性比率は15.4%で、昨年4月の結果より0.3%増加した。



図Ⅱ－4－1 学部専任担当別 教員数・女性比率
(平成24年4月1日現在)



図Ⅱ－４－２ 学部 学生数・女性比率
(平成24年4月1日現在)



図Ⅱ－４－３ 大学院 学生数・女性比率
(平成24年4月1日現在)

図Ⅱ－４－２の学部学生数と女性比率では、学部学生の総数は6,118名のうち女性は2,610名(42.7%)である。学部ごとにみると、女性比率の高い学部は保健学研究科518名(60.9%)、教育学部609名(60.4%)、人文学部739名(49.3%)である。一方、理工学研究科、医学研究科、農学生命科学部では女性割合が半数以下で、特に理工学研究科では201名(15.6%)と、他の学部比べて低い割合である。この結果は、昨年4月の結果とあまり変わらないが、教育学部では女性比率が3.3%、理工学部で0.8%減少した。

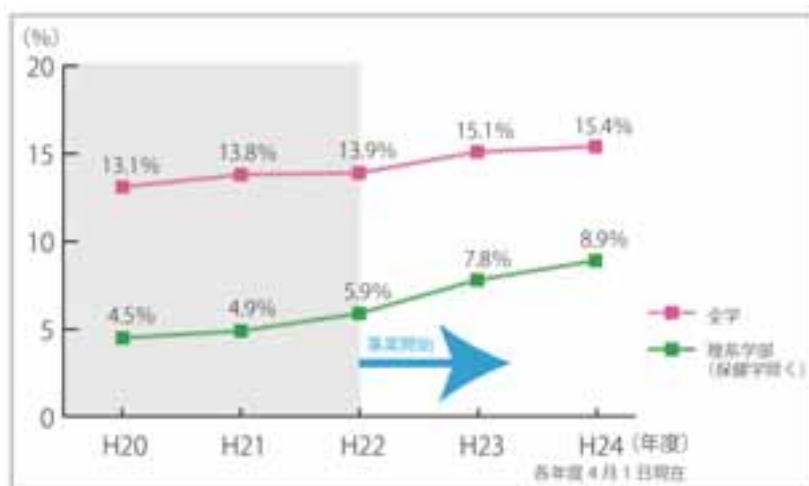
図Ⅱ－４－３の大学院学生数と女性比率では、大学院生の総数は777名、そのうち女性は238名(30.6%)で、学部学生に比べて女性比率は低い。研究科ごとにみると、女性比率の高いところは人文社会科学部研究科19名(63.3%)、教育学研究科41名(56.2%)であり、他の5つの研究科では女性比率が4割を下回っている。中でも理工学研究科では32名(13.6%)と他の研究科に比べて非常に低い割合ではあるが、昨年4月の結果より2.8%増加している。全体の女性比率は、昨年4月の結果より1.3%増加している。

教職員全体でみると女性比率は、昨年4月の結果より0.8%減少した。しかし、教員全体の女性比率(附属学校を除く)では、15.4%と依然として低いものの、昨年4月の結果と比べると0.3%増加した。

この結果には教員募集要項に記載した男女共同参画の推進をはじめとする男女共同参画の様々な取り組みの効果があらわれつつあるとも推察できるが、その評価を決定づけるには今後の推移を注視する必要がある。また「弘前大学男女共同参画推進基本計画」(平成21年8月3日策定)に掲げている「女性教員比率を2015年までに20%に向上する」という目標達成のためには、各部署が女性教員採用に向けて、より積極的に取り組む必要がある。

②本学教員と大学院生における女性比率の推移

本学教員における女性比率は、図Ⅱ－４－４のように平成20年度以来向上しつづけ、平成23年には15.4%に達している。平成20年から21年にかけてほぼ1ポイント増加、平成21年から22年には微増し、平成22年から23年にかけて再び1ポイントの伸びをみせている。



図Ⅱ－４－４ 本学教員における女性比率の推移

保健学研究科を除く理系学部教員の女性比率の向上はより顕著で、平成20年度は4.5%だったが毎年0.5～2.0%向上し、平成24年度には8.9%に達し、平成20年度に比べほぼ倍増した。

続いて図Ⅱ－４－５の常勤の新規採用者における女性比率の推移をみると、全学では、平成20年度は11.3%だったが、平成21年度には21.1%、平成22年度には19.6%、平成23年度には25.3%とおおむね向上し、平成23年度には平成20年度に比べ2倍以上に増加した。また、保健学研究科を除く理系学部の女性教員比率は、全学のそれと比べるとかなり低いが、平成20年度は2.0%だったが、平成21年度には2.9%、平成22年度には3.1%、平成23年度には8.4%と一貫して増加傾向を示しており、特に平成22年度から23年度にかけては顕著に向上している。これには、医学研究科や附属病院の女性比率向上が反映している。



図Ⅱ－４－５ 新規採用者における女性比率の推移

ひるがえって、図Ⅱ－４－６の大学院生における女性比率をみると、全学では平成22年度に28.7%だったが、平成23年度には29.3%、平成24年度には30.6%と増加傾向がみとめられる。保健学研究科を除く理系学部では、平成22年度に21.0%だったが、平成23年度には22.2%、平成24年度には24.3%と毎年増加している。大学院生と教員の女性比率に注目すると、女性教員比率は漸増しているが、学生における女性比率は、女性教員比率の2倍近くで推移しており、両者の不均衡があることが指摘できる。



図Ⅱ－４－６ 大学院生における女性比率の推移

(3) 意識調査・実態調査

平成21年度より、男女共同参画推進室を実施主体として各種アンケート調査・聞き取り調査を実施した。それぞれの調査は教職員や大学院学生の教育・研究・生活状況の実態を把握し、現状の問題点とその改善策を考えるうえでの基礎的かつ重要な資料を得ることを目的としている。

調査結果は各年度の『弘前大学男女共同参画推進室活動記録』『つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才活動記録』にまとめており、また一部の調査結果については報告書、ウェブサイトでも公開している。詳細な調査方法・結果についてはそれらをご参照いただきたい。

各調査の概要と報告書

①研究継続と活性化のための男女共同参画推進に関する調査

【概要】

大学院の学生が、活発な研究活動を展開し、研究を継続するのに必要な支援ニーズを知るために、本学の大学院修士課程および博士課程在学者594名を対象に、平成21年12月から平成22年1月に調査を実施し、350名（有効回答数349名、男性237名、女性111名、無回答1名）から回答が得られ、回収率は58.9%だった。平成22年度に採択された「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」事業の取り組みには、この調査結果が反映されている。

【調査結果】

「平成21年度大学院学生を対象とした質問紙調査の結果について」

弘前大学男女共同参画推進室，2011，『平成22年度 弘前大学「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」活動記録』

「平成21年度大学院アンケート調査と『つがるネッサンス！』」

http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/data/data/questionnaire_results_H21.pdf

②弘前大学における女性研究者の比率向上に向けた取り組みに関する部局長アンケート

【概要】

女性研究者の比率向上に向けた取り組みを各部局が行っているかどうかを把握するために、学内19部局長等に対し、平成22年8月6日～8月27日にアンケート調査を実施し、18部局から回答が得られた。

【調査結果】

「弘前大学における女性研究者の比率向上に向けた取り組みに関する部局長アンケート」弘前大学男女共同参画推進室，2011，『平成22年度 弘前大学「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」活動記録』

「平成22年度『部局長アンケート』と『つがるネッサンス！』」

http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/data/data/questionnaire_results_H22.pdf

③弘前大学における男女共同参画の取り組みに関する各部局等アンケートについて

【概要】

ワーク・ライフ・バランス（仕事や修学と、家事・地域の諸活動等への参加の両立）をすすめるために各部局等における仕事の効率化や会議の開催時刻等の適正化に向けた取り組み状況を平成24年2月14日～3月2日に18部局に対し調査を実施し、16部局から回答が得られた。

【調査結果】

「弘前大学における男女共同参画の取り組みに関する各部局等アンケートについて」

弘前大学男女共同参画推進室，2012，『平成23年度 弘前大学「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」活動記録』

④男女共同参画に関する意識・実態調査

【概要】

本学における男女共同参画推進について、職員がどのように感じているかの現状を把握し、今後の男女共同参画推進に向けた取り組みに活かしていくために、本学職員（常勤・

非常勤職員)を対象に質問紙調査を平成22年12月14日～平成23年1月11日に実施した。
その結果、対象職員2,422人中1,037人から回答が得られ、回収率は42.8%であった。

【調査結果】

弘前大学男女共同参画推進室, 2012, 『「弘前大学男女共同参画推進に関する意識・実態調査」報告書』

http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/data/data/report_201203.pdf

⑤弘前大学ハラスメント相談体制に関する調査

【概要】

男女共同参画推進室では、本学男性教員のセクシャルハラスメント行為への処分が平成22年3月に公表されたことを受け、「ハラスメント防止等に関する規程」の見直しを行った。その結果、規程そのものを見直しではなく、ハラスメント相談の流れが見えにくいことがわかり、ハラスメント相談の流れを提案することになった。

【ハラスメント相談の流れの整理と提案の過程】

1) 現在のハラスメント相談の流れの問題点

- ・被害者からハラスメント相談員への相談方法(手段)について明記されていない。
- ・「ハラスメント防止等に関する規程」の中で扱われている事項がセクシャルハラスメントに限局しているようにも見受けられる。
- ・相談の年間件数が把握されない。
- ・部局止まりになるケースが多々ある。
- ・部局から防止等対策委員会→調査委員会設置→学長→処分にかかる調査委員会→学長→被害者・加害者へ流れるルートが複雑であるため、ルートを整理する必要がある。

2) 今後のハラスメント相談の流れ(案)

- ・規程の改正について
 - (1) 流れを見えやすく整理する。

大学院生へ保育に関するアンケート調査を行った。その結果、回収率は26.7%で、回答者の71.4%が保育施設を設置した場合、何らかの形で利用したいと回答した。また、市内の保育施設は入園が難しく、育児と仕事の両立のため保育施設の設置はとても喜ばしいこと、との意見が出された。

このアンケート調査を基に委員会で検討を重ね、平成20年4月1日に本町地区にひろだい保育園を開設した。利用対象者は、本学職員・学生が養育する0歳児（満8週間）から小学校就学前までの乳幼児、夜間保育は1歳児以上の乳幼児である。定員は40名、基本保育は7時30分～18時30分、延長保育は6時30分～7時30分と18時30分～20時30分、夜間保育は18時30分～7時30分である。

基本保育を利用した延べ人数は、平成21年度6,721名、平成22年度7,908名、平成23年度8,829名、平成24年度7,550名（12月現在）である。一時保育を利用した延べ人数は、平成21年度385名、平成22年度568名、平成23年度391名、平成24年度453名（12月現在）である。延長保育を利用した延べ人数は、平成21年度451名、平成22年度591名、平成23年度706名、平成24年度950名（12月現在）である。夜間保育を利用した延べ人数は、平成21年度0名、平成22年度2名、平成23年度1名、平成24年度29名（12月現在）である。ひろだい保育園の利用者は徐々に増えており、特に夜間保育は必要とされてきている。

⑦ワーク・ライフ・バランスインタビュー

計画構想では、ルネッサンス期に理想とされた「万能の人」になぞらえ、ワーク・ライフ・バランスの達成と地域特性の再評価を可能にするモデルを津軽から発信することを目指すとしている。

女性研究者としてのロールモデルの確立はもとより、実際に仕事と、家庭・子育て・介護の両立を実現している人たちはどのような制度等を活用し、ワーク・ライフ・バランスの実現に至っているのか、その内容について情報提供の一つとして、発信していくため、2012年7月～12月にかけてインタビューを実施し、ウェブサイトで公開した。

インタビュー内容の発信は、今後の女性研究者の支援、次世代の育成に資するものである。

ワーク・ライフ・バランスインタビュー一覧

	氏名	職名	ジャンル
1	出 佳奈子	弘前大学教育学部 美術教育講座 教員	子育て
	URL	http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/interview2/2012/12/interview2-01.html	
2	工藤 うみ	弘前大学大学院保健学研究科 教員	子育て
	URL	http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/interview2/2012/12/interview2-02.html	
3	匿名	事務職員	子育て
	URL	http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/interview2/2012/12/interview2-03.html	
4	熊野 真規子	弘前大学人文学部 コミュニケーション講座 教員	介護
	URL	http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/interview2/2012/12/interview2-04.html	
5	富澤 登志子	弘前大学大学院保健学研究科 教員	子育て
	URL	http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/interview2/2012/12/interview2-05.html	
6	匿名	事務職員	子育て
	URL	http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/interview2/2012/12/interview2-06.html	
7	皆川 智子	弘前大学医学部附属病院 医師	子育て
	URL	http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/interview2/2012/12/interview2-07.html	

⑧病児保育の要望検討

平成24年9月13日に弘前大学本町キャンパスで開催された女性研究者フォーラム第10回交流会において、医学研究科・附属病院からの参加者を中心に病児保育に関する要望が出された。このことを受け、今後の病児保育の必要性や整備のための諸条件についての把握を行うために、平成25年2月に全学の教職員を対象に「弘前大学『病児保育』に関するアンケート」を実施した。本調査の結果は、今後の検討に活用される予定である。

(4) 広報・情報発信

①ニューズレター『さんかくつうしん』発行

平成22年1月より、弘前大学男女共同参画推進室のニューズレターとして、『さんかくつうしん』の刊行を開始した。当初は男女共同参画推進室の設置とその活動方針を広く学内に周知することを目的とし、平成22年5月の「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の採択以後は、従前の目的に加えて事業の趣旨と活動についての広報の役割を担うこととなった。以後年に2回のペースで定期的な刊行を行っている。

②ロゴマーク・ポスター募集（審査、決定、表彰式開催）

平成21年12月から平成22年2月にかけて、弘前大学男女共同参画推進室ロゴマーク、ポスターを募集した。計39点の応募があり、審査の結果最優秀賞1名、審査員特別賞1名、優秀賞3名を決定した。

平成22年3月に授賞式を行い、佳作以上の受賞者に賞状、商品（図書券）を授与した。なお応募作品については弘前大学男女共同参画推進室ウェブサイトにて公開している。

<http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/contents/logo.html>

また、平成22年12月には、「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」ロゴマーク、ポスターの募集も実施した。8名から応募があり、最優秀賞1名、特別賞1名を決定した。平成23年1月に授賞式を行い、これらについても「つがるネッサンス！」事業の広報活動において広く活用されており、作品については「つがるネッサンス！」ウェブサイトにて公開している。

<http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/about/poster-logo.html>

③弘前大学男女共同参画宣言リーフレット作成

平成22年7月に、弘前大学男女共同参画宣言のさらなる周知と男女共同参画推進室の活動の概要をわかりやすく伝えることを目的として、3つ折りのリーフレットを作成した。表紙にはロゴマーク・ポスター募集で採用されたものを使用した。3つ折り内部には弘前大学男女共同参画宣言（抜粋）と男女共同参画推進室長のあいさつ文を掲載した。

④ウェブサイト作成・管理

a) 弘前大学男女共同参画推進室ウェブサイト開設

平成22年4月に弘前大学男女共同参画推進室ウェブサイトを開設した。「News & Topics」は随時更新し常に新しい情報を提供するようにし、データ集として男女比率、アンケート調査結果を掲載、各年度で更新している。

また、ニューズレター『さんかくつうしん』の電子化、講演会案内のまとめ等を掲載している。その後、平成23年3月に「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」のウェブサイトを開設し、男女共同参画推進室ウェブサイトとリンクさせた。

さらに室員専用ページを配置して、他機関から届く様々な情報を閲覧できるようにした。



b) つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才ウェブサイト開設

平成 23 年 3 月には「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」ウェブサイトを新たに開設した。ポスターとロゴの最優秀賞作品からタンポポのイメージを受け継ぎ、全体的に温かみと親しみを感じるデザインに仕上げた。

また機能的な面については、アイコンの多用や、知りたい情報へのリンク等、より利便性を向上させる工夫をした。

内容面では「つがるネッサンス！」事業の紹介とともに、研究支援情報、情報ナビ・子育て介護支援情報、各種イベントの紹介を行っている。男女共同参画推進室ウェブサイトからリンクされる内容に加え、「女性研究者インタビュー」、「ワーク・ライフ・バランスインタビュー」や特任スタッフ紹介記事なども掲載している。



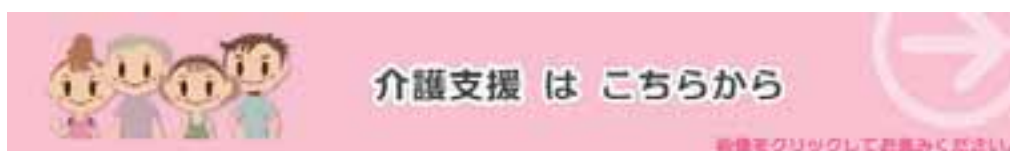
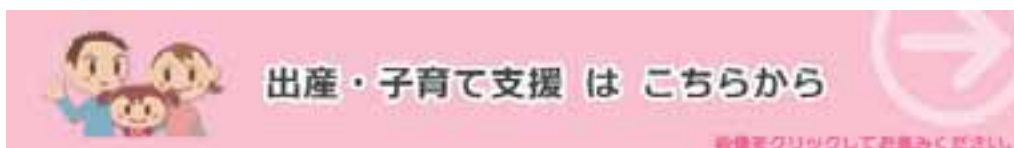
⑤ワーク・ライフ・バランス実現に向けた取り組み

本事業の目的はミッションステートメントを達成し、女性研究者の研究活動支援体制を構築することにある。女性研究者が研究活動を継続していくためには、仕事と家庭・地域生活のバランスが保てることが重要となる。

仕事と家庭・地域生活の調和を保つには、休業、休暇等の制度の活用が必要となる。本学職員の育児休業の認知度は高かったが、介護休業の認知度は育児休業の半数をわずかに超える程度であった。このように育児休業と介護休業のみでも、認知度についてかなりの差異があった。このことから勘案して、出産・育児や介護に関する制度以外にも十分に把握されていないことが想定される。そのため、育児・介護に係る制度のほかに、ライフイベント時に使える制度等や地域の子育て、介護に関するさまざまな情報提供を行った。

a) 休暇等制度一覧及び内容についてウェブサイト公開（学内版）

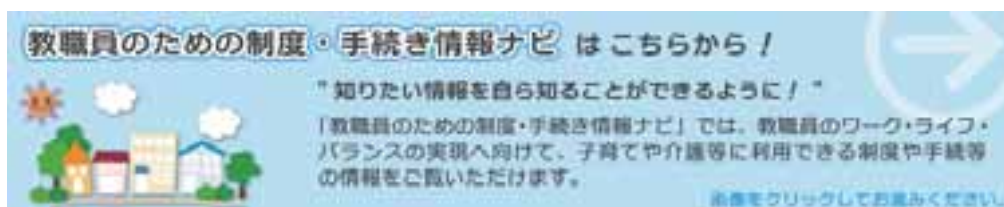
出産・子育て及び介護に分類し、男女別に使える休暇、制度を一覧表にし、常勤職員の他に非常勤職員も活用できるようにした。また一覧表のほか、休暇、制度等の個々の内容についてはカテゴリー別に分類し、アクセスしやすいものとした。



b) 教職員のための制度・手続き等情報ナビの構築と相談窓口

子育て・介護情報を公表し、女性研究者が個人の中長期的なライフプランに応じたワークプランを構築できるよう環境を整えた。具体的には、平成23年11月に、育児・介護に係る休業・休暇等の制度、あるいは育児・介護に係る情報を職員がいつでも入手できる「教職員のための制度・手続き等情報ナビ」（呼称「情報ナビ」）をウェブサイトに掲載した。情報ナビは5つのカテゴリーに分類され、欲しい情報にアクセスしやすくなっている。

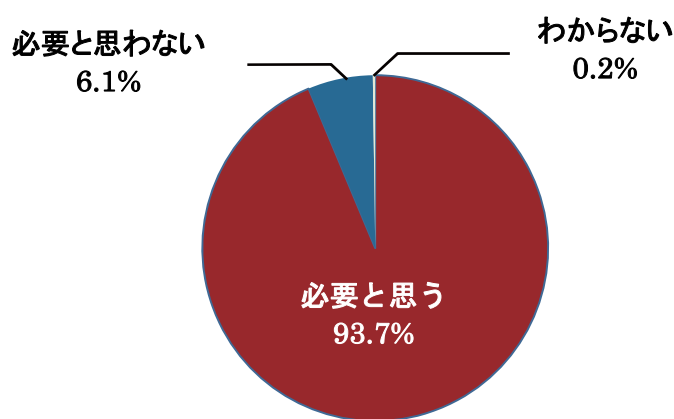
情報ナビは、育児や介護に関する情報のほかに生活に必要なと思われる情報も掲載されており、相談窓口としての役割も果たしている。



c) 「情報ナビに関する意識調査」から見たもの

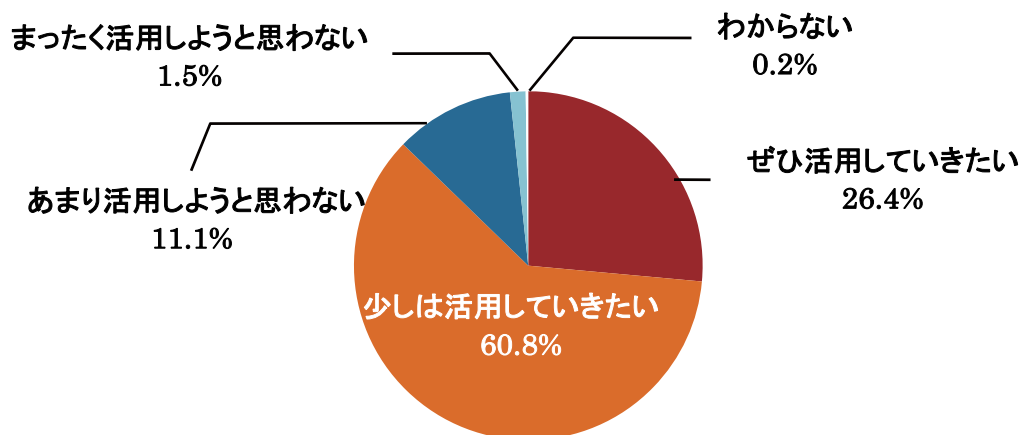
仕事と家庭の調和を図り、多様な生き方、多様な働き方が選択できるような職場環境、研究環境を目指すため、必要な情報が必要なときに得られるよう情報ナビを構築したが、情報ナビが教職員にとってどのような意味を持ち、また、今後、情報ナビがどのようなのであればよいのか、構築後のアセスメントと、使いやすい情報ナビとするために意識調査を実施した。その結果を、ポイントとなる項目で評価する。

学内の制度や手続きについて、事前に把握しておく必要性について「必要と思う」と回答した人が93.7%であった。



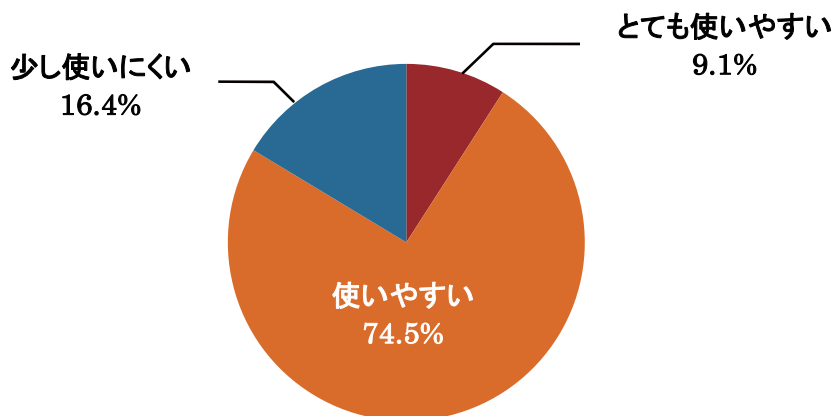
図Ⅱ-4-9 制度や手続き等に関する事前情報把握の必要性

その情報を得るための手段として情報ナビを「ぜひ活用していきたい」「少しは活用していきたい」と回答し活用に肯定的な人は87.2%であった。



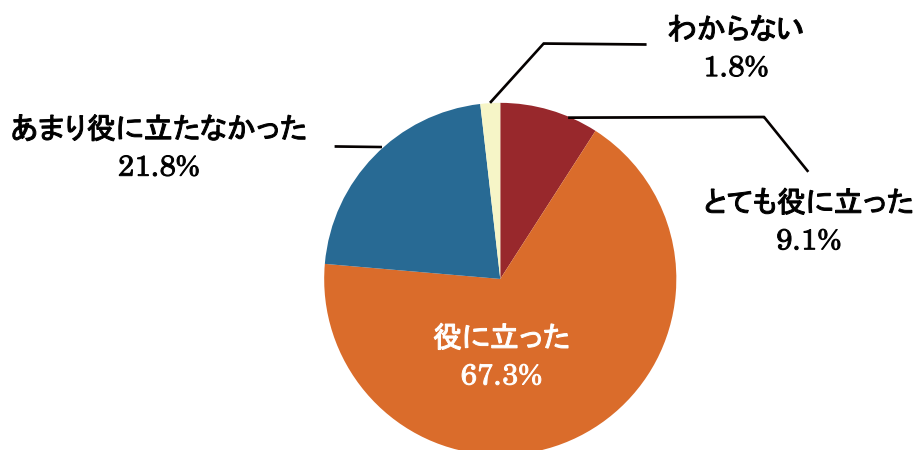
図Ⅱ-4-10 情報ナビの活用についての意向

また、実際、情報ナビにアクセスした人の意見として「とても使いやすい」「使いやすい」と答えた人は83.6%であった。



図Ⅱ-4-11 情報ナビの使いやすさ

使ってみて役に立ったかでは、「とても役に立った」「役に立った」が76.4%であった。



図Ⅱ-4-12 アクセスしたことがある人からみた有用性

以上、アンケートのポイントとなる項目から考察して、ワーク・ライフ・バランス実現のため情報ナビの構築はとても意義のあるものであり、さらに今後も継続していく必要があることが確認された。しかし、アンケートに回答した人の80%近くが情報ナビの存在を知らなかったと答えている。

多くの職員が必要な情報を、必要なときに得ることにより、ライフとワークのバランスを取り多様性のある職場環境を選択できるようになるには、情報ナビの認知度を高める必要がある。そのためには、周知の徹底にほかならない。

周知については、学内メールや情報共有サーバーシステム（後述）を活用した周知に加えて、男女共同参画推進室が定期的に発行している「さんかくつうしん」に毎回掲載するほか、チラシの配布など周知の方法について検討していくことが課題として確認された。

今後、掲載してほしい情報については、生活に密着した年金や健康保険に関するものが最も多く自由記述でも生活に密着した内容のものが多かった。

情報ナビについては、本事業の終了後も、情報を提供するシステムとして継続していくことになっているが、年金、給与等生活に密着した情報をより多く提供しかつ具体性のあるものにする必要がある。

http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/care/data/report_info-navi.pdf

d) 育児・介護支援冊子の作成

仕事と家庭・地域生活の両立を後押しするために、青森県や弘前市、本学で利用できる支援制度情報を集約した冊子を作成した。他県から移住してきた際、行政の子育て・介護支援制度を調べることや、大学周辺の保育園や小学校を地図上で確認することに手間取ることから、必要な情報を分かりやすくまとめることとした。

具体的な内容は、弘前市の育児支援一覧や介護保険の仕組みと介護サービス、子育て・介護に関する学内制度一覧、大学周辺の子育て・介護関連施設を示した地図、本学研究者のインタビュー等である。持ち歩いても邪魔にならないよう、冊子は薄くし、チャート図や地図を見やすく配置した。特に役に立つと思われる地図は冊子の他にリーフレットにし、より利用しやすくした。取り外しができるようにした。

⑥情報共有サーバシステム

【目的と背景】

近年、弘前大学では教育研究活動が活発化することで、発信される情報量が増大している。しかしながら、それらの情報が別々に発信されているため情報が散在し、必要な情報にアクセスできない、異なる部署に属する研究者間の情報および人的交流が難しい等の問

題が生じている。さらに対外的には、学外向けイベントが数多く実施されているにもかかわらず、効率的な広報活動が行われていない。

このような現状の改善は、研究者の研究環境改善に結びつくと考え、情報を一元化するために情報共有サーバシステムを構築し、導入した。

【システム概要】

本システムは、学内者が周知したい情報を配信でき、本システムの登録者へは入手したい情報がメールで送られてくる機能を有している。各種助成金情報、育児・介護情報、イベント情報等学内外の種々の情報を一元管理し、個々人の需要に合わせて配信することで、研究者が情報を検索する時間を削減でき、また毎日届く膨大なメールから重要なメールを探し出す時間が削減できる。

学外向けの情報も配信でき、システムにアクセスすればイベント情報等が表示されるようになっている。携帯メールにも配信可能なので、パソコンを所有していない人にも情報を配信できる。

【利用実績】

平成24年12月現在で登録者数は257名で、各種助成金情報、講演会情報、イベント情報、ジャーナル刊行情報等の情報を配信している。本システムを紹介したリーフレットを作成し、研究者・職員全員へ配付して周知を行った結果、徐々に認知度が上がってきている。本システムの登録者からは、このシステムに登録したおかげで、いつも見落とす助成金情報に気付くことができたとの声が寄せられている。

(5) 意識啓発・意識改革

①評議会講演会「大学における男女共同参画推進の効果」

平成24年6月12日、女性研究者研究活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の一環として北海道大学副理事、人材育成本部女性研究者支援室室長・大学院農学研究院教授の有賀早苗氏を講師にお招きし、ミ



有賀 早苗氏（北海道大学）

ニレクチャーを開催した。有賀氏は弘前大学教育研究評議会評議員および関係者約60人を対象に「大学における男女共同参画推進の効果～すべての人が学びやすく働きやすい大学をめざして～」というタイトルで講演を行い、データを用いながら日本の大学では女性研究者が少ないことを課題として挙げ、北海道大学における女性研究者の活躍促進のための様々な取り組みと成果を具体的に示した。また、知的創造の中核であり、多様化・グローバル化が重要である大学こそ、男女共同参画推進が求められると強調した。ミニレクチャーの終わりに紹介された「Girls and Boys, Be Ambitious!」という北海道大学ならではのメッセージには、皆深くうなずいた。

②講演会、セミナー

a) 弘前大学「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」キックオフ講演会

「男女共同参画推進室設立1周年記念講演「学びやすく働きやすい大学へ」

開催日時：平成22年10月8日（金）14：00～16：00

会場：弘前大学コラボ弘大8階 八甲田ホール

演題：京都大学の挑戦－研究者の現状と大学における男女共同参画－

講師：稲葉カヨ氏 京都大学大学院生命科学研究科教授

弘前大学の科学技術振興調整費採択キックオフ企画・男女共同参画推進室設立1周年記念として「学びやすく働きやすい大学へ」をテーマに講演会が開催された。京都大学女性研究者支援センター長 稲葉カヨ氏をお招きして、「京都大学の挑戦－研究者の現状と大学における男女共同参画－」と題する講演を行った。講演会では、教職員、学生、他大学関係者、地方自治体関係者ら約100名が参加した。講演に先立ち、独立行政法人科学技術振



稲葉カヨ氏（京都大学）



山村康子氏（(独)科学技術振興機構）

興機構科学技術振興調整費プログラム主管 山村康子氏より科学技術振興調整費の意義と役割について説明があった。次に、本学の杉山祐子男女共同参画推進室長より、講演会の趣旨説明と、本学の科学振興調整費「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の活動計画が示された。

講演会では、まず研究者育成の視点から、我が国の研究機関における男女共同参画の現状が報告され、次に京都大学での、女性研究者支援センター設立以前の女性研究者の取り組みの歴史が示された。その後、支援センターが取り組んできた研究者支援の具体的な方法が示され、女性研究者の育成を阻む要因についての分析があった。最後に女性研究者の人材育成は「支援」ではなく「育てる」事であり、女性研究者は「活かされている」「ささえられている」のではなく自ら育つ覚悟をもって、男性と協同して発展を目指すべきである、と締めくくられた。

引き続きディスカッションが行われ、事業展開の際の具体的な方法への質問や、海外留学経験者からの、文化背景の違いによる日本における男女共同参画のあり方への疑問などが出され、活発な意見交換がなされた。最後に遠藤正彦学長から、京都大学と本学の歴史の違いを考慮すべきである、との意見が出され、盛会のうちに幕を閉じた。講演会終了後は、講師を囲んだ情報交換会が開かれ、和やかな雰囲気のもとで、親睦を深めることができた。

b) 弘前大学「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」第3回講演会開催

「日米の教育研究制度の比較と女性研究者の役割 ～医学生物学を中心に～」

日 時：平成23年6月17日（金） 13：30～15：00

会 場：弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大8階 八甲田ホール

講 師：檜橋敏夫氏 アメリカ ノースウェスタン大学医学部分子薬理学／生物化学科教授

この講演会は、「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」事業のひとつとして開催され、当日は、教職員や学生を中心に、70名あまりが参加した。講演会に先立ち、杉山祐子弘前大学男女共同参画推進室長が挨拶し、「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」事業の意義と、今回の講演会の趣旨について説明した。続いて、ノースウェスタン大学の檜橋敏夫教授が「日米の教育研究制度の比較と女性研究者の役割～医学生物学を中心に～」と題して講演を行った。まず、約50年間にわたるアメリカでの教育研究活動経験をもとに、

大学の制度や研究者の育成について、様々な角度から日本とアメリカの違いを説明した。アメリカでは大学院への入学は非常に狭き門である一方で、その後一定の研究生活は保障されること、長く厳しいプロセスを経て博士号を取得するまでは研究者として認められないことなどが紹介され、それらを通して、日本の大学教育が抱える課題を知ることができた。また、女性研究者比率の伸びや分野別の状況がデータで示され、アメリカの研究分野における男女共同参画の現状理解に役立った。講演の最後に



榎橋敏夫氏
(ノースウェスタン大学)

「ROAD TO A SUCCESSFUL SCIENTIST」と称して、研究者として成功するための11のポイントが紹介され「Rise to the challenge」など、次々と示される具体的な指針に、会場を埋めた参加者は熱心に耳を傾けた。

講演終了後にもうけた榎橋教授を囲んでのフリートークの時間では、留学を目指す学生から「留学するときの注意点は？」との質問が出たり、教員から、今どきの学生の学習意欲についての疑問が投げかけられたり、米国の教員評価の方法について質問がされたりと、予定時間ぎりぎりまで活発に意見交換が行われた。榎橋教授は最後に、「研究者として広い視野を持ち、いろいろな分野で積極的に学ぶことが非常に大切である」というメッセージをおくり、参加者は次への新たな一歩を踏み出すきっかけを得ることができた。

c) 「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」第4回セミナー開催

「『光』の研究・教育に魅せられて～未知へ挑み創成する楽しさと人材育成～」

日 時：平成23年12月7日（水） 13：30～15：00

会 場：弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大8階 八甲田ホール

講 師：小館香椎子氏（独）科学技術振興機構男女共同参画主監、日本女子大学名誉教授
第4回セミナー「光の研究・教育に魅せられて～未知へ挑み創成する楽しさと人材育成～」を開催した。講師には、独立行政法人科学技術振興機構男女共同参画主監、日本女子大学名誉教授で工学博士の小館香椎子先生をお迎えした。

小館氏はまず、「光」をベースに実用的な分野でさまざまに応用されているご自身の研究内容について、「すばる望遠鏡用分光デバイス」や「超高速顔認証システム」などの実

例を挙げながら、わかりやすく説明された。次に、教育者として学生たちのモチベーションを上げて成果につなげる工夫が紹介され、「好奇心を誘うテーマを設定する」「こまめに成果を発信する」「就職したOG も含めて信頼に基づく縦と横のネットワークを構築する」といった数々のヒントに、参加者は深くうなずいていた。最後に、小館氏が長年にわたり力を注いできた学会や大学における男女共同参画推進について、その必要性、課題、解決策が示された。「女性研究者支援を通して男女共同参画が進むことで、多様な人材が個性を発揮し活躍できる豊かな日本社会が実現する」という言葉からは、小館氏の信念や願いが力強く伝わった。関わってきたあらゆる人とのつながりを大切にしながら、3人の子育てと研究・教育を両立させてきた小館氏の具体的で示唆に富む話に、会場を埋めた約70名の学生・教職員は熱心に聞き入り、研究・教育について考えるととても有意義な機会を持つことができた。

実施後のアンケートには、「プライベートを大切にしながら研究者として活躍されている先生の話聞き、感銘を受けました」「励まされました。もっともっとお話をうかがいたいと思いました」など、多くの声が寄せられた。

d) 「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」第5回 弘前大学男女共同参画推進室セミナー開催

「科学の楽しさ伝えたい」

日時：平成24年6月12日（火） 14:30 ～ 15:30

会場：弘前大学 教育学部 203講義室

講師：有賀早苗氏 北海道大学 大学院農学研究科教授・副理事・女性研究者支援室長

「科学の楽しさ伝えたい」と題し、弘前大学の理科教師を目指す学生ら約40人を対象に北海道大学有賀早苗氏によるセミナーを行った。北海道大学理系応援キャラバン隊活動の様子が写真などでわかりやすく伝えられると同時に、取り組みを持続することの重要性や今後に向けての課題が語られ、参加者は熱心に耳を傾けていた。セミナー実施後のアンケートには、「理科の実験を小中高生にわかりやすく教え、楽しんで理科を好きになってもら



小館香椎子氏
((独) 科学技術振興機構)

う工夫がたくさん隠されていてとても勉強になりました」「何ごとも楽しみながら行うことで、周りの人の興味をひくことができるのだと思った」など、多くの声が寄せられた。

5. 他機関および地域との連携

(1) 背景と目的

すでにある地域資源を掘り起こし、相互につなぐことによって持続的なしくみづくりをめざす本事業では、地域連携が重要な柱のひとつである。前述の基盤環境整備における行政や民間の諸事業との連携もその一貫であり、それらの情報を集積してまとめて発信することによって、両立支援の環境は大きく改善される。また、地域のNPOとの連携を深め、協働しながら取り組みを展開することは、地域の力をより活性化することにもつながる。

さらに、本事業を契機として連携を深めたのは、北東北国立3大学の男女共同参画推進室である。秋田大学が平成21年度に本事業に採択され、翌年平成22年度に岩手大学と本学の提案課題が採択されたことによって、北東北国立3大学がそろってこの事業に着手することになった。3大学の状況は少しずつ異なるものの、いずれも地方に立地することの困難を利点にかえて、地域間連携を通して、女性研究者支援と男女共同参画を推進しようとしている点が共通しており、相互連携を深めることによってより大きな効果が期待できる。

(2) 文部科学省科学技術人材育成補助事業 女性研究者研究活動支援事業（旧女性研究者支援モデル育成）合同シンポジウム

本シンポジウムは、女性研究者研究活動支援事業を実施する研究機関が一堂に会し、事業成果の相互交流をおこなう機会である。弘前大学も平成21年度にオブザーバーとして参加し先行する他機関から多くを学んできたが、平成22年度の本事業採択以後は、次に概要を示すように、分科会やシンポジウムへの参加を通じて行う他機関との交流や現在の課題認識の共有によって、円滑な取り組みの展開をはかることができた。

①女性研究者支援システム改革プログラム事業合同シンポジウム「未来を築く女性研究者の飛翔に向けて」

開催日：平成22年10月5日～6日

会場：京都大学

本学参加者：杉山祐子（男女共同参画推進室長）、高瀬雅弘（男女共同参画推進室副室長）、鶴井香織（特任助教）、赤嶺真由美（特任助手）、山本幸子（コーディネーター）

【シンポジウム概要】

このシンポジウムは、「女性研究者支援モデル育成」「女性研究者要請システム改革加速」事業（いずれも当時）採択53機関および次年度以降採択をめざす機関が参加して、京都大学で開催された。

まず、参加機関が3つのグループに分かれ、それぞれのポスターを前に質疑応答等をおこなうポスターディスカッションが行われて、相互の取り組みについての理解を深めたあと、オープニングセッションとして、9機関（東京農工大学、東京大学、京都大学、名古屋大学、奈良女子大学、長崎大学、東北大学、北海道大学、御茶の水女子大学）の特色ある取り組みが紹介された。

さらに参加機関が6グループに分かれたROUND POSTERSでは、それぞれがWrap-Upセッションにむけた共通課題を討議した。これをふまえてWrap-Upセッションにおいて、各グループ代表が討議結果を発表し、パネルディスカッションによる討論が行われた。若手研究者育成、業績評価に関する課題、今後の方向性としての「見える化」の重要性など、中心的な課題が浮き彫りとなった。

②女性研究者研究活動支援事業 合同公開シンポジウム「女性研究者支援に向けた持続可能な取組の実現～「モデル的取組」から「研究とライフイベントの両立」へ～」

開催日：平成23年11月1日（火）～2日（水）

会場：筑波大学東京キャンパス文京校舎

本学参加者：杉山祐子（男女共同参画推進室長）、鶴井香織（特任助教）、赤嶺真由美（特任助手）

【シンポジウム概要】

このシンポジウムは、女性研究者研究活動支援事業を実施する 52 研究機関が参加して、筑波大学の主催で開催された。

1 日目のグループディスカッションは各地区に分かれて行われたが、弘前大学は東北・北海道地区グループにおいて情報交換と共通の課題についての討議に参加した。午後は主催校である筑波大学長による開会挨拶に続いて、文部科学省科学技術・学術政策局長合田氏、内閣府男女共同参画局長岡島氏による来賓挨拶があり、さらに文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課長板倉氏から施策の説明があった。これを踏まえて、午前中のグループディスカッションにおける各グループ代表がディスカッションの成果を発表し、科学技術振興機構科学技術システム改革加速プログラム主管の山村氏によるコメントが加えられた。

2 日目の午前中は、5 つの大学からそれぞれ、効果的な取り組み事例が紹介された。まず九州大学が女性枠設定による研究者支援のあり方を紹介し、ポイント制管理を行うことによって優秀な工学系女性研究者の応募と採用が急増したことを示した。東京農工大学は中規模大学でも可能な研究者養成採用計画としてポジティブアクション 1 + 1 の取り組みを紹介した。東北大学はハードリングからジャンプアップへと支援事業を展開する中で、支援対象者を男性研究者にも拡大した点やサイエンスエンジェルが大学院学生の育成にも成果をあげたことを報告した。北海道大学は事業の実施成果を踏まえながら長期的取り組みとしての目標値「20% by 2020」を設定したこと、名古屋大学は、学童保育における特徴的な取り組みについて紹介した。これらをふまえ、フロアを含めて活発なやりとりが行われた。

午後は、サイドイベントとしてテーマ別の事例発表会が行われた。

③女性研究者研究活動支援事業 合同シンポジウム「今後の女性研究者研究活動支援について」

開催日：平成 24 年 11 月 20 日（火）

会場：JST 東京本部 3F（午前：ポスターディスカッション、分科会）および B1F 大会議室（分科会発表会、パネルディスカッション）

本学参加者：杉山祐子（男女共同参画推進室副室長・つがるネッサンス事業担当）、鶴井香織（特任助教）

【シンポジウム概要】

午前中は採択諸機関によるポスターディスカッションに続き、各グループに分かれて分科会が行われた。今年度は主に各研究機関の規模と立地によってグループ分けが



パネルディスカッションの様子

なされた。分科会で扱われたテーマは、1) 女性研究者数（女性限定公募の必要性、女性研究者を増加させるために必要な部局執行部・女性研究者等の意識改革、離職抑制等）、2) 女性研究者の研究・教育業績、3) 女性リーダーの育成、4) 女性研究者支援の課題とこれまで得られた解決策、5) 今後の新たな方策、である。弘前大学の取り組みについては、とくにパートナーフェローに関する質問やコメントが多く寄せられた。事業が終了した機関も多くがポスター発表を通じて取り組み内容を報告しており、男女共同参画の取り組みを継続する努力が続けられている点が印象的だった。

午後のセッションは、開会挨拶のあと、佐藤弘毅氏（科学技術・学術政策局 基盤政策課 人材政策企画官）から女性研究者研究活動支援事業の趣旨等についての説明があり、続いて、午前中の分科会でのディスカッションの結果を、各グループ代表が発表した。さらに、科学技術振興機構 科学施術システム改革事業プログラム主管山村氏がモデレータをつとめて「成果の検証と課題解決のための模索」と題したパネルディスカッションが行われ、パネラーの郷通子氏（大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構理事）、小舘香椎子氏（独立行政法人科学技術振興機構 経営企画部 男女共同参画主監）、後藤俊夫氏（中部大学 副学長）、渡辺美代子氏（(株) 東芝 イノベーション推進本部 参事）、板倉修一郎氏（文部科学省 科学技術・学術政策局 基盤政策課長）を中心に、女性研究者を減少させない方策について、環境整備等に関する課題を中心に議論が行なわれた。

（3）北東北国立3大学連携推進会議・男女共同参画推進合同シンポジウム

弘前大学、秋田大学、岩手大学の北東北国立3大学男女共同参画推進室は、3大学がともに本事業を開始したことを契機に、平成22年度から相互に連携して男女共同参画合同シンポジウムを開催し、共同宣言を採択・公表してきた。平成23年12月には、北東北国立

3 大学連携推進会議の管理事項として男女共同参画が位置づけられ、男女共同参画は、推進室間の連携から大学間の連携により推進される事項となり、さらに重要度を増してきた。平成 24 年 12 月 21 日には、大学間連携による第一回の合同シンポジウムが開催され、弘前宣言が採択された。

以下、これまでの軌跡を記す。

①平成 22 年度北東北地域の大学連携による男女共同参画推進シンポジウム

—「男女共同参画から多様な人材が生きる大学へ」—於岩手大学

開催日：平成23年3月3日(木)

会 場：岩手大学総合教育研究棟 北桐ホール

本学参加者：藁科勝之男女共同参画担当理事（パネリスト）、杉山祐子室長（取り組み紹介）、日景弥生副室長、赤嶺真由美特任助手、山本幸子コーディネーター

【シンポジウム概要】（岩手大学ウェブサイトから転載。一部表現変更）

このシンポジウムは、平成22年度 科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業に採択されている「共生の時代を拓く、いわて女性研究者支援」の取組の一環として実施された。

藤井克己学長の挨拶後、板倉周一郎・科学技術学術政策局基盤政策課長から「女性研究者の現状と岩手大学への期待」と題した特別講演が行われた。板倉基盤政策課長からは、女性研究者をめぐる現状や「女性研究者支援モデル育成」での取組事例が紹介されるとともに、今後、男女共同参画推進に当たり、全学的な意識改革を進めるため、執行部のリーダーシップが重要であるなどのアドバイスがあった。続いて、先行事例として都河明子・東京大学男女共同参画室アドバイザー（前特任教授）から「大学における男女共同参画からダイバーシティの取組」と題し、東京大学で取り組んでいる「キャリア確立10年」支援プログラムの具体的な事例が発表された。

その後、「女性研究者支援モデル育成」事業の北東北地域採択大学の報告が行われた。秋田大学教育文化学部の和泉浩准教授から「大学間連携と女性研究者支援 in 秋田」、弘前大学男女共同参画推進室の杉山祐子室長から「つがるネッサンス!地域でつなぐ女性人

才」、岩手大学男女共同参画推進室の八代仁副室長から「共生の自体を拓く、いわて女性研究者支援」の順でそれぞれ紹介が行われた。

菅原悦子副学長(男女共同参画・附属学校担当)がコーディネーターを務めたパネルディスカッションでは、パネラーから、ポジティブアクションの実施に関する意見や、各大学を中核とする地域連携による男女共同参画・ダイバーシティ推進の今後の取組の見通しについて発表されると共に、男女共同参画の推進について会場と意見交換を行った。最後に、北東北の大学が積極的に交流や連携を図ることで男女共同参画推進に取り組む「岩手宣言」を承認し、閉会した。

②平成23年度北東北地域の大学連携による男女共同参画推進シンポジウム

「ライフステージに応じた多様な支援の実現に向けて」 於秋田大学

開催日：平成24年2月13日(月)

会場：秋田大学ベンチャービジネスラボラトリー

本学参加者：大河原隆男女共同参画担当理事、竹内新研究推進課長、杉山祐子室長、日景弥生副室長、鶴井香織特任助教、赤嶺真由美特任助手

【シンポジウム概要】 (秋田大学ウェブサイトから転載。表現を一部変更)

この講演会は、平成23年度文部科学省科学技術人材育成費補助金女性研究者研究活動支援事業(女性研究者支援モデル育成)秋田大学「大学間連携と女性研究者支援 in 秋田」の事業として開催された。

吉村学長の挨拶に引き続き、文部科学省 科学技術学術政策局 基盤政策課長 板倉周一郎氏より基調講演「女性研究者の育成・支援について」が行われた。講演の中では日本の女性研究者の現状を踏まえ、施策や支援事業が紹介された。また、板倉氏自身が研究者でもあることから、様々な視点での提言や女性研究者に対するエールがおくられた。

続いて女性研究者研究活動支援事業の採択大学として、岩手大学、弘前大学、秋田大学から取組みについての報告が行われた。同じような課題や機関や地域特有の課題などがあることが分かり、情報共有し北東北地区として連携しながら男女共同参画推進に取り組むことにも意義があると感じられた。

パネルディスカッションは、「多様な支援の実現 に向けて」というテーマのもと育児や介護に関する取組みの報告が3大学それぞれからなされた。それをもとにディスカッショ

ンを行い、制度を利用するため の意識改革と身近なところからの制度の整備が必要ではないかということを確認した。

最後に、北東北における男女共同参画推進に向けての秋田宣言が読み上げられ、満場一致で承認された。

③平成24年度北東北国立3大学連携推進会議・男女共同参画推進合同シンポジウム

「北東北地域大学間連携による男女共同参画の推進に向けて」 於弘前大学

同時開催：「国内外で活躍する弘前大学の女性研究者」パネル展

開催日：平成24年12月21日（金）13：30～16：00

会場：弘前大学創立50周年記念会館2階 岩木ホール

本学参加者：佐藤敬学長、大河原隆理事、江羅茂理事、藤弘前大学病院長ほか弘前大学事務局本部職員、弘前大学教職員、連携機関教職員

【シンポジウム概要】

このシンポジウムは、過去2カ年にわたって開催された北東北国立3大学男女共同参画推進室の連携による合同シンポジウムの実績を発展させ、平成24年度から北東北国立3大学連携推進会議による男女共同参画合同シンポジウム「北東北地域大学間連携による男女共同参画の推進に向けて」として開催された。これは平成22年度の女性研究者研究活動支援事業（旧科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」）に採択された弘前大学「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の取組みの一環でもある。

はじめに弘前大学の佐藤敬学長が「男女共同参画は、秋田・岩手・弘前3大学連携の一番ホットなテーマである」と開会の挨拶を述べた。続いて、独立行政法人科学技術振興機構科学技術システム改革事業プログラム主管の山村康子氏が「大学における男女共同参画と女性研究者支援について」と題して基調講演を行い、女性研究者の現状や課題、諸大学の取り組みが紹介された。これを



山村康子氏
((独) 科学技術振興機構)

受けた質疑応答ではさっそくフロアとの活発なやりとりがなされた。

シンポジウム後半は、パネルディスカッション「北東北地域の男女共同参画の推進に向けて 秋田大学、岩手大学、弘前大学のさらなる連携を拓く～共通する取り組みと課題からみえるもの～」が行われた。ここでは渡部育子氏（秋田大学学長補佐、男女共同参画推進室長）、菅原悦子氏（岩手大学副学長、男女共同参画推進室長）、日景弥生氏（弘前大学教育研究評議会評議員、男女共同参画推進室長）がパネリストを、杉山祐子氏（弘前大学男女共同参画推進室副室長）がファシリテーターを務めた。まず岩手、秋田、弘前3大学の取り組みが紹介された後、事前打ち合わせで主題化された「両立支援」「県内連携」「次世代育成」という3つの共通課題について、熱心な情報交換・意見交換が行われた。

最後に、弘前大学社会連携・男女共同参画担当の大河原隆理事により「弘前宣言～北東北3大学連携による男女共同参画推進に向けて～」が採択され、3大学間で今後さらに連携を深めることを確認して、全日程を終了した。



パネルディスカッション

（４）学園都市ひろさきコンソーシアム6大学

平成19年10月に設立された「学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム」（以下、「コンソーシアム」と記載）には、弘前市に立地する6つの高等教育機関（弘前大学、弘前学院大学、東北女子大学、東北女子短期大学、放送大学青森学習センター、弘前医療福祉大学）が参加しており、弘前大学学長が会長をつとめている。「つがるネッサンス！地域

でつなぐ女性人才」本事業の採択は、平成22年10月のコンソーシアム企画運営委員会で報告され、参加6大学の連携を深めながら進めていくことが確認された。

弘前市および八戸市の教育関係者を対象として理科系学問のおもしろさを伝え裾野を拡大するための講演会が開催されたほか、地域の人材育成と地域活性化に果たす大学の役割をテーマとしたコンソーシアム参加機関合同シンポジウムで、大学間連携による女性人才の育成の可能性などが議論された。

①講演・シンポジウム

a) 弘前大学生涯学習教育研究センター主催生涯学習連続講演『明日の教育を考える』

- ・第1回：平成23年10月4日(火) 18:30～20:00

「白神山地の自然を教育に生かすみちをさぐろう」

講師：佐々木 長市 氏(白神自然環境研究所 研究所長)

- ・第2回：平成23年10月11日(火)18:30～20:00

「地学を学ぶおもしろさ—化石や地震などから自然のダイナミズムに迫る—」

講師：鎌田 耕太郎 氏(教育学部 教授)

(第1回、第2回いずれも、主会場：弘前大学創立60周年記念会館「コラボ弘大」、副会場：弘前大学八戸サテライトにて開催)

b) 学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム合同シンポジウム

- ・平成24年12月1日(土) 13:30～16:30

『学園都市ひろさき』の可能性と大学の役割

基調講演：「プロジェクト型インターンシップによる地域活性化とリーダー人材育成～あべの・天王寺まちづくり構想プロジェクト取組事例の紹介」

講師：深瀬 澄 氏(大阪経済法科大学地域総合研究所所長補佐)

パネルディスカッション「地域活性化と大学の役割」

パネリスト：平井太郎氏(弘前大学大学院地域社会研究科准教授)、西東克介氏(弘前学院大学社会福祉学部准教授)、今村麻理子氏(東北女子大学家政学部講師)、真野由紀子氏(東北女子短期大学教授)、藁科勝之氏(放送大学青森学習センター所長)、斎藤三千政氏(弘前医療福祉大学准教授)

コーディネーター：森樹男氏（コンソーシアム企画運営委員長・弘前大学人文学部教授）

（弘前大学医学部コミュニケーションセンターにおいて開催）

②女性研究者フォーラム女性研究者交流会

・平成24年9月20日（木）14:00～16:00

「女性研究者が考えるワーク・ライフ・バランス」

弘前大学 総合教育棟 共用会議室でおこなわれた女性研究者フォーラム女性研究者交流会には、コンソーシアム参加機関のうち4機関（弘前大学6名、弘前学院大学3名、東北女子大学8名、弘前医療福祉大学短期大学部1名）から幅広い年代の女性研究者が集まり、相互に情報交換と交流を深めた。参加者全員が、このような交流会の継続的・定期的な開催を望むような機会となり、今後の展開を期して閉会した。

（5）産業総合研究所ダイバーシティ・サポートオフィスネットワーク（DSO）

本学は、男女共同参画推進に関わる情報交換と交流を広げることをめざして、産業総合研究所ダイバーシティ・サポートオフィスネットワーク（DSO）への参加を申請し、平成23年12月に加入を認められた。平成24年2月22日発行の『DSO News Letter No. 5』で本学の取り組みを紹介するなど、このコンソーシアムを通じた情報交換を行っている。



（6）青森県・弘前市との連携

ミッションステートメントの一つに「弘前市や青森県及び他大学とのネットワークの接合によって、実践的生活支援（育児・介護・家事）と地域の人才登用の仕組みを作る」とある。

まず、青森県との連携から見てみると、青森県青少年・男女共同参画が所管している女性人材バンクというシステムがあった。このシステムとのネットワーク結合により研究者登録が推進され、県内各大学が、代替人材確保支援の仕組みができるものと期待し、県の

女性人材バンクの内容を調査し、青少年・男女共同参画課の考え方も確認したが、講演講師派遣を目的とした女性人材バンクであった。そこで本事業ではあらためて情報共有サーバシステムを立ち上げて代替人材確保支援の仕組みを整備することとなった。

男女共同参画に係る情報や子育て支援情報に関しては、県庁こどもみらい課から、必要に応じて子育てに関する情報を提供してもらおうほか、情報ナビを通して県の情報とのリンクを行った。

弘前市については、弘前市役所子育て支援課と市民参画センターとの連携を中心に事業を展開した。

弘前市役所子育て支援課からは、学童保育やトワイライトステイ事業（平成 23 年度新規事業）の取り組み紹介、現地調査への協力など、積極的な支援をいただいた。とりわけトワイライトステイ事業については、現地調査を行うことで情報ナビを通して具体的な情報内容を提供することができた。

また関係諸機関とのリンクにより、情報ナビから市の子育て支援、介護支援その他の情報を得ることができ、1つの情報を開くことで、県、市の情報までも得ることができる体制が作られた。

男女共同参画センターでは、子育て支援に関する各種イベントのパンフレットや学習に関するパンフレットなどの提供のほか、本学で開催される講演会への積極的な参加もいただいた。

県や市との連携は、日頃からの情報交換、協力体制が最も重要である。

「つがルネッサンス！地域でつなぐ女性人才」で取り組んでいる女性研究者フォーラムの具体的な取り組みとして、子育て・介護情報を集約・公表、女性研究者の情報の共有を掲げているが、県、市との連携はこのような目標の達成のためにもきわめて重要であると言える。県や市との有機的な連携を発展させていくことによって、本学にとっても、地域にとっても効果的な基盤環境整備が可能になる。



III 資 料



Ⅲ 資料

1. 宣言・基本計画

(1) 弘前大学男女共同参画推進宣言

弘前大学男女共同参画推進宣言

平成21年8月3日

「男女共同参画社会基本法」は、男女共同参画社会の実現を21世紀の日本社会を決定する最重要課題と位置づけ、社会のあらゆる分野において、男女共同参画社会の形成の促進に関する施策の推進を図っていくことを謳っています。同法は、次の5つの基本理念を提示しています。

1. 男女の人権の尊重
2. 社会における制度又は慣行についての配慮
3. 政策等の立案及び決定への共同参画
4. 家庭生活における活動と他の活動の両立
5. 国際的協調

こうした理念のもと、男女共同参画社会の実現に向けて努力することは、すべての国民に課せられた義務であり、そのなかでも大学が担うべき役割はきわめて大きいものであります。しかしながら、日本の大学の現状については依然として、①セクシュアル・ハラスメントやアカデミック・ハラスメントといった人権の軽視、②女性教員の比率の低さ、③大学運営上重要なポストに就く女性の少なさ、④仕事と家庭・地域生活との両立の困難さ、⑤このような状況の背後にある制度・慣行・意識、といった問題が指摘されています。

本学もまた、こうした問題を自覚し、その解決に向けてのいくつかの取り組みを行ってきました。しかしながら、その成果はいまだ不十分であり、数多くの課題が残されていま

す。2009年4月時点で、学生・大学院学生のうち、女性の占める割合は40%を超えているにもかかわらず、女性教員の割合は約14%にとどまっています。専任職員については、女性比率は約30%であるものの、管理職の女性はきわめて少ないという状況があります。このことは、役員、部局長等に女性がいないことと併せ、大学の重要な意思決定の場で男女共同参画が実現していないことを意味しています。

北東北地方の中規模総合大学である本学は、創設以来、地域社会との連携のもと、その社会的責務を果たしてきました。そうした経験と蓄積を背景に、地方大学が抱える制約を、地域に潜在する様々な資源の掘り起こしと活用によって乗り越えること、大学のみならず地域における男女共同参画の推進へと還元していくことを、この取り組みにおいても指向します。

1999年6月に「男女共同参画社会基本法」が公布・施行されてから10年という節目の年に、私たちはもう一度同法の理念に立ち返り、新たな一步を踏み出すために、全学において男女共同参画を積極的に推進することを宣言します。

1. 弘前大学は、教育・研究・就労・修学における機会均等を推進します。

男女共同参画を図るうえで、性別によって不当な差別を受けることなく、個人の能力が最大限尊重されるために、機会の均等を第一の理念として掲げます。男女共同参画の推進においては、年齢や職階、常勤・非常勤の別、教員・職員・学生といった属性に関わりなく、弘前大学に関わるすべての人々が、等しく幸福を追求できることを根本理念とします。

2. 弘前大学は、男女共同参画を妨げる要因を精査し、これを排除します。

従来指摘されてきた、大学における男女共同参画を妨げる要因である、セクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメントなどの諸問題を調査によって可視化し、対策を実効化します。同時に、学内全体への男女共同参画に対する問題意識の共有化を図り、教職員間における情報ネットワークの構築を行います。

3. 弘前大学は、大学運営に関わる男女格差を是正し、男女共同参画を推進します。

大学運営の中枢に関わるポストに女性が就くことがほとんどなかったこれまでのあり方

を反省し、重要な意思決定の場面における男女共同参画を目指します。女性教員比率の向上という、量的な部分の改善はもとより、真の意味で大学運営への参画を促すための、質的な改善を目指します。

4. 弘前大学は、仕事と家庭・地域生活の両立を可能にするワークライフバランスモデルを構築します。

本学に関わるすべての人々が、教育・研究・就労・修学と、①家事・出産・育児・介護、②地域の諸活動への参加とを両立できるよう、環境整備と支援策を策定し、積極的に進めます。既存の保育施設等についてはなお一層の充実を図り、利用しやすい環境を整えます。

5. 弘前大学は、国際交流を通して男女共同参画を推進し、その取り組みを発信します。

世界各国にある大学間交流協定校のネットワークを通じ、海外の男女共同参画に関する情報収集を行い、具体的な施策に活用します。同時に、教職員や留学生の派遣・受け入れなどの交流事業を実施するとともに、これらの本学の取り組みを広く発信します。

6. 弘前大学は、男女共同参画の推進によって地域活性化に貢献します。

自治体などの機関と連携し、地方都市に位置する大学の強みを活かしながら、情報発信と交流の機会を設け、地域全体に対する意識の啓発とワークライフバランスモデルの提供を行うことで、地域の活性化に貢献します。

弘前大学は、これらの目標を実現するために、男女共同参画推進室を設置し、各部局との連携を図りながら、長期的な視野に立った男女共同参画事業を全学において推進します。

(2) 弘前大学男女共同参画推進基本計画

弘前大学男女共同参画推進基本計画

平成 21 年 8 月 3 日

理念

(1) 基本的な立場

男女共同参画社会基本法（第一章総則第二条）の定義するところによれば、男女共同参画社会の形成とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会を形成すること」を意味する。そのような社会の実現のために、本学は、学内における男女共同参画を進めることによって、質の高い教育と研究を提供し、地域社会の活性化に資することを目指す。

(2) 背景

現状をみると、雇用率、管理職率などに顕著な性別格差のあることが明らかである。本学においても、男女比は著しく異なり、男女共同参画のための基本的バランスを欠いていると言わざるをえない。この傾向は、とくに理系学部の教員について顕著である。また、男性が多数を占める職場において少数者となる女性が、少数者ゆえのさまざまな困難に直面することも少なくない。

大学におけるこのような状況には、性別分業意識が強く働いてきた社会的な背景がある。公と私、仕事と家庭という分業体制のなかで、家庭生活における女性の負担が大きく、仕事と家庭・地域生活の両立（ワークライフバランス）を図ることが難しい状況を反映しているともいえる。女性がキャリアを継続させたり、向上させたりするためには幾多の壁があり、パートナーの転勤や、出産、育児、介護などのために、キャリアを途中で断念せざるを得ないこともある。一方、男性が家庭・地域生活において女性と対等な役割を果たすための環境整備も立ち遅れている。このような状況はまた、次世代を担う若い研究者や学生の意欲を衰退させ、大学全体としての教育研究活動や運営における活力を低下させる悪循環をもたらす。

現状における諸問題を可視化し、このような悪循環を断ち切ることなしには、男女共同参画社会の実現はあり得ない。

(3) 高等教育機関、研究機関としての大学の役割とコンプライアンス (法令遵守の責任)

上記のような視点に立って、本学は、全学的規模で、男女共同参画を進めるための施策を展開する。男女共同参画を進めることによって、教育・職場環境を整えることは、高等教育機関、研究機関としての責務であり、国立大学法人としてのコンプライアンスを実践するうえでも重要である。北東北地域で有数の歴史をもつ中規模総合大学である本学は、このような社会的責任を果たすためのモデル構築とその実践によって、地域全体における男女共同参画の推進に貢献することを目指すものである。

基本方針「地域資源を生かした男女共同参画をめざして」

大学の構成員（教員、職員、学生）それぞれが、人としての尊厳を尊重され、性別や出自による差別的扱いを受けることなく、その能力を十分に発揮できる機会を確保しつつ、教育・研究、職場環境を整える。

このとき、空間的、機能的にコンパクトな構造をもつ地方都市に立地する条件を活かした「地方型モデル」の構築をめざし、全国に広く発信する。具体的な方策についてみると、これまで不利な条件にあることが多かった女性を中心に支援することがひとつの柱にはなるが、それが「女性の問題」なのではなく、男性を含む「相互関係」の問題なのであり、その意味ですべての教職員、学生にあてはまる問題であることを確認する必要がある。

具体的な行動計画

(1) 現状の把握

- ①問題の可視化
- ②地域資源の発掘とコーディネート

(2) 研究／職場環境の整備

- ①仕事と家庭・地域生活の両立（ワーク・ライフ・バランス）を無理なく実現するための諸制度および施設の改善、充実
- ②利用可能な制度などに関する情報収集・充実とその利用
- ③ハラスメント対策の充実と実効性の確保。また、制度の有用性の定期的検証
- ④大学運営における男女共同参画の推進（女性職員の管理職への積極的登用、女性教員

比率を 2015 年までに 20%に向上、導入可能な条件にある委員会で、順次、クォータ制の採用)

- ⑤タイムマネジメントの検討と再編成（公的会議の 17:00 終了等を含む会議時間の制限や業務の整理と効率化）
- ⑥研究支援（女性研究者支援プロジェクトの立ち上げ）

（3）教育環境の整備

- ①教員や職員の事例をロールモデルとして提示
- ②女子学生の就学支援、キャリアカウンセリング体制の整備
- ③ハラスメント対策およびカウンセリング体制の整備
- ④ガイダンス、講演会、ワークショップ等の開催

（4）男女共同参画への意識啓発

- ①講演会、ワークショップ等の開催
- ②教職員の研修の実施
- ③パンフレット作成、配布
- ④ウェブサイトの開設

推進体制

学長の強力なリーダーシップのもとで、担当理事および男女共同参画推進室が中心となり、調査、検討、企画等を行い、各部局およびハラスメント防止等対策委員会、保健管理センター、学内保育園等との連携をとりつつ、施策を実施する。

2. 女性研究者フォーラム

(1) お茶会

女性研究者フォーラムは…

1. 女性研究者にとって
お得な情報が得られます
2. 女子学生へキャリアモデルを示します
3. ミニレクチャー・講演会を開催します

学部を超えた 女子学生と女性教員の 交流の場

〔主催〕
平成22年度 科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」
つがるネッセانس！地域でつなぐ女性人才

第1回 女性研究者フォーラム

学部を超えて **女性教員と**
お茶会しましょ!!

〔ミニレクチャー〕
講師：国際交流センター
サワダ・ハンナ・ジョイ 准教授

I. 日本で感じたジェンダー
II. ニュージーランドの男女共同参画政策

〔日時〕
10月29日（金） 14：30～15：30

〔場所〕
大学会館2階 スコーラム

〔会費〕
無料（コーヒー付）

〔連絡先〕
男女共同参画推進室
TEL：39-3888
Email：equality@cc.hirosaki-u.ac.jp
URL：http://www.hirosaki-u.ac.jp/equality/

女性研究者フォーラムとは？？

(2) 特別企画

女性研究者活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）「つがるネッセانس！地域でつなぐ女性人才」

第5回女性研究者フォーラム特別企画

スキンケア&身だしなみ メイクアップ講座

実演を交えたスキンケアとオトナの身だしなみを伝授！！
メイクアップモデルは、当日会場にて決まります。
自薦、他薦どちらもOK！

講師：資生堂
ビューティコンサルタント
小田桐 亜沙子さん

日時
8月9日（火）
1回目 11:00~12:00
2回目 13:00~14:00

会場 50周年記念会館1階
会議室1

参加特典

弘前大学を卒業した社会人の先輩たちからの
メッセージ満載 **弘大「キャリア@通信」**
と、先輩たちの **就職先一覧** を差し上げ
ます！！

主催 男女共同参画推進室
TEL：39-3888
E-mail equality@cc.hirosaki-u.ac.jp

共催 教育・学生委員会
FD
キャリアセンター

協力 学生就職支援センター

ROCK なアニキ 荻藤哲也さん TALK EVENT

一度の人生 120% 楽しもう!

～仕事もプライベートも大満足!のデキル大人になる～

たった一度きりの人生。
勉強も就職もケツコンも、その先の子育ても、
できることならめいっばい自分らしく楽しんで生きていきたい・・・！
さあ、人生のドアを自らの手で開いてみよう。
すぐやあないけど、そんな風に深くもないアナタの未来に、
荻藤哲也さんがナイスなアドバイス。
ロックなアニキ、荻藤さんの話を聞き逃すな！

ROCK'N TALK

**2012
10/24(水)
14:20～15:50**
(荻藤さんへの質問コーナー、フリータイムあり)

弘前大学生会協 文京食堂 1F

荻藤哲也さんプロフィール
1970 弘前大学文学部文学科卒業
タイガーマスク基金会代表理事、出版社、通信、
IT企業など多岐に活躍を経て、2006年に文
学部助教授に就任。2010年「ひびく」編集プロ
ダジェット」メンバー、厚生労働省「イメメン
プロジェクト」推進チーム委員、新聞記者
女子同僚関係推進委員会委員、子育て応援と
ろきよう会実行委員、にっほん子育て応援
協議会。

主催：弘前大学男女共同参画推進室 女性研究者活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）「つがるネッセانس！地域でつなぐ女性人才」
後援：弘前大学学生自治会男女学生委員会、学務部つがるネッセانس推進事務局、弘前大学学務部学生就業支援センター

女性学研究所活動推進室(女性研究者支援モデル専攻「コアスキルアップ」) 協賛(女性学入門)

「アサーティブコミュニケーション」とは相手の言い分も大切にしつつ、自分の考えをきちんと伝えることです。

第2回目 6/13(水) 14:20~15:50

第3回目 7/4(水) 14:20~15:50

全回参加が望ましいですが、単回参加も受け付けます。

第1回目 5/23(水) 14:20~15:50

弘前大学附属図書館 3F ラーニング・スクエア・スペース ※図書館利用証をご持参ください。

アサーティブコミュニケーション入門 (全3回)

講師 いわふね のぶこ 岩船 展子氏

参加費 無料
定員 先着30名
お問合せ 男女共同参画推進室 Tel: 0172-39-3888
お申込み E-Mail: equality@cc.chirosaki-u.ac.jp

氏名・所属(学生の場合は、学部及び学年)・連絡先を記入の上、メールでお申込みください。

主催: 弘前大学男女共同参画推進室 協力: 学生支援センター

女性学研究所活動推進室(女性研究者支援モデル専攻「コアスキルアップ」) 協賛(女性学入門)

「アサーティブコミュニケーション」とは相手の言い分も大切にしつつ、自分の考えをきちんと伝えることです。

第3回目予定 7/4(水) 14:20~15:50

気になる第2回目 アサーティブコミュニケーション入門 (全3回)

～自分の考え、ホントに相手に伝わっているかな? ゲーム感覚で楽しく実践!～

本人や先生、同僚など、まわりの人とのコミュニケーションをうまくとりあうことはとても大切なことです。このセミナーでは、相手の話をじっくり聞きつつ自分の思いや考えを適切に表現する「アサーティブコミュニケーション」をグループワークやロールプレイなどを通じて楽しく学ぶことができます。是非参加もぜひ!

講師 いわふね のぶこ 岩船 展子氏

参加費 無料
定員 50名
お問合せ 男女共同参画推進室 Tel: 0172-39-3888
お申込み E-Mail: equality@cc.chirosaki-u.ac.jp
お申込み締切日 6月12日(火)

第2回目 6/13(水) 14:20~15:50

弘前大学創立50周年記念会館2F 岩木ホール

氏名・所属(学生の場合は、学部及び学年)・連絡先を記入の上、メールでお申込みください。

主催: 弘前大学男女共同参画推進室 協力: 学生支援センター

女性学研究所活動推進室(女性研究者支援モデル専攻「コアスキルアップ」) 協賛(女性学入門)

「アサーティブコミュニケーション」とは相手の言い分も大切にしつつ、自分の考えをきちんと伝えることです。

第3回目 7/4(水) 14:20~15:50

いよいよ最終の第3回目 アサーティブコミュニケーション入門

本人や先生、同僚など、まわりの人とのコミュニケーションをうまくとりあうことはとても大切なことです。このセミナーでは、相手の話をじっくり聞きつつ自分の思いや考えを適切に表現する「アサーティブコミュニケーション」をグループワークやロールプレイなどを通じて楽しく学ぶことができます。是非参加もぜひ!

講師 いわふね のぶこ 岩船 展子氏

参加費 無料
定員 50名
お問合せ 男女共同参画推進室 Tel: 0172-39-3888
お申込み E-Mail: equality@cc.chirosaki-u.ac.jp
お申込み締切日 7月3日(火)

ワークショップの様子

アサーティブコミュニケーションの考え方をスキル形式で学習

ワークシートを埋めるベンが定まる。

第2回目では、1分間自己紹介文の作成を通して、自己表現のコツを学びました。

アサーティブコミュニケーション実践中、岩船先生から直接アドバイスがありました。

主催: 弘前大学男女共同参画推進室 協力: 学生支援センター

3. 女性研究者の研究力向上

(1) 研究力を強めるセミナー

「つがるネットワーク」掲載で女性力UP

研究力を強めるセミナー

言語は「ハート」で
こころを伝えよう

英語で発表
おれどか感動

共同研究の
きっかけを
作りだそう!

交流を深めたいけど、
羞恥も息いつかない

ポスター発表の基本からバンケットでの交流まで

国際学会なんてこわくない! 初編

お申込み **0172-39-3888**
男女共同参画推進室
equality@cc.hirosaki-u.ac.jp

2012 **2/23 Thu.**
13:00 ~ 15:00

弘前大学附属図書館 3F
ラーニング・スクエア・スペース
※図書館利用証をご持参ください。

対象 女性教員
ポストドク(男女)
大学院生(男女)
応相談で学部生(男女)

参加無料
定員15名 先着順

講師
エーラス・イングリッシュスクール
ミッシェル・アーネンセン氏

講師の先生に教えて頂きたい内容や質問を大募集! また、自分のプレゼンをチェックして欲しいという方もご連絡ください。当日イベントで指導を受けられる方もあります。
2/17(金)までに男女共同参画推進室へメールでご連絡ください。
※メールの件名を「ミッシェル先生への質問」とお書きください。

講師の先生は、アメリカ人の父と韓国出身の母を持つニューヨーク育ち。日本語も日本語での質問もOK。

弘前大学男女共同参画推進室

研究者サブリ第5回ワークショップ

第2回 国際学会なんてこわくない!
— 初・中級編 —

口頭発表と質疑応答を制する!

Successful Presentation

7月12日(木)
13:30 ~ 15:30

弘前大学附属図書館 3F
ラーニング・スクエア・スペース
※図書館利用証をご持参ください。

15名(先着順)
参加無料

国際学会対策に關心のある
教員・ポストドク・院生・
応相談で学部生

講師
エーラス・イングリッシュスクール
ミッシェル・アーネンセン氏

さらさら(英語)、つがる(韓国)の文化の習得が得意な
名を呼ぶコミュニケーション。日本語も堪能です。
日本語での質問もOK。

講師の先生に教えて頂きたい内容や質問を大募集!
また、自分のプレゼンをチェックして欲しいという方もご連絡ください。当日イベントで指導を受けられる方もあります。
7/6(金)までに男女共同参画推進室へメールでご連絡ください。
※メールの件名を「ミッシェル先生への質問」とお書きください。

お申込み **0172-39-3888**
equality@cc.hirosaki-u.ac.jp
男女共同参画推進室

3. 女性研究者の研究力向上

4. 理系研究者の裾野拡大

(1) イベントカレンダー

平成24年度 弘前大学 科学体験 イベントカレンダー No.1

2012年5月作成

このカレンダーの使い方

対象 イベントの内容
お問い合わせ
カレンダーについて

弘前大学チーム講座
教育向上プロジェクト(ラボパス)
弘前大学サイエンスパーク
科学者発見プロジェクト

このカレンダーは、イベントの開催予定が変更される場合があります。

平成24年度 弘前大学 科学体験 イベントカレンダー No.2

2012年5月作成

サイエンスへの招待
宇宙探検の最前線
江湾時代に言語と和服の目
女子体験学習
2012 アグリ・カレッジ

動物園本室公開
リンゴ見本見学会
弘前大学公開講座
自然自然新発見

最新のイベント情報はこちら <http://www.hirosaki-u.ac.jp/event.html>

「つがるネットワーク」掲載で女性力UP

(2) イベント

女性研究者研究活動支援事業(女性研究者支援モデル育成)



白神自然観察園内を散策し、植物を採取します。

採取した植物の標本を作ります。
作り方はインストラクターが
分かりやすく教えます。

作った標本は
持って帰ることができます。

白神の 植物標本作成講座

6/18(土) 10時～15時
弘前大学白神自然観察園(青森県西目屋村川原平)

- 参加定員 20名
- 参加費 100円(保険加入料)
- 事前予約制
- 雨天決行
- 昼食持参
- 弘前大学から無料送迎バスあり
(集合:9時 解散:17時)

【申し込み先】
弘前大学男女共同参画推進室
〒036-8560
青森県弘前市文京町1
TEL:0172-39-3888
FAX:0172-39-3889
Email:equality@cc.hirosaki-u.ac.jp
URL:http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/

【主催】弘前大学教育学部 ラボプロジェクト・弘前大学白神自然環境研究所・つがるネッサーズ！ 地域でつなぐ女性人材

平成23年度 弘前大学生涯学習教育研究センター事業

科学に興味を湧く講座

つがるの昆虫博士養成講座

入門編

弘前市子どもの森での昆虫採集や、昆虫に関する学習を行います。
君も昆虫博士になるための第一歩をふみだそう！

期日 平成23年9月3日(土) 9:00~12:00
※雨天決行(雨天時には別メニューを用意しています。)

講師 白神自然環境研究所 准教授 中村剛之
男女共同参画推進室 特任助教 鶴井香織
男女共同参画推進室 特任助手 赤嶺真由美

場所 弘前市子どもの森ビジターセンター(現地集合・現地解散)
(弘前市大字坂元字山尻)

対象者 小学生(3年生以上)15名 及び 希望する保護者

受講料 無 料

服装 ぼうし・運動靴・長袖・長ズボン

持ち物 飲みもの・虫取りあみ(お持ちであれば)

<申し込み・問い合わせ>
氏名(参加者及び保護者)・住所・電話番号(緊急時に連絡がとれるもの)・年齢・性別
血液型・保護者参加の有無をご記入の上ハガキ・FAX・e-mail、または電話でお申し込み下さい。申し込み締め切りは**8月31日(火)**です。(定員に達し先着受付を締め切らせていただきます。)

※お寄せ頂いた個人情報管理には万全を期しております。本事業の目的以外に使用することはありません。

青森県弘前市文京町3番地
弘前大学60周年記念館 コラボ弘大4階 弘前大学生涯学習教育研究センター
TEL/FAX:0172-39-3146
e-mail:sgcenter@cc.hirosaki-u.ac.jp
URL: <http://culture.cch.hirosaki-u.ac.jp/sgcenter/>

主催 弘前大学生涯学習教育研究センター
後援 弘前大学白神自然環境研究所
弘前大学男女共同参画推進室
女性研究者研究活動支援事業(女性研究者支援モデル育成)
つがるネッサーズ！ 地域でつなぐ女性人材

作成者: 植田 茂夫 氏


女性研究者研究活動支援事業(女性研究者支援モデル育成)

つがるの昆虫博士養成講座

こんちゆう せがい
のぞいてみよう! 昆虫たちの世界

昆虫展

日時: 10月22日(土) 10:00~17:00
会場: 農学生命科学部 1階 151講義室

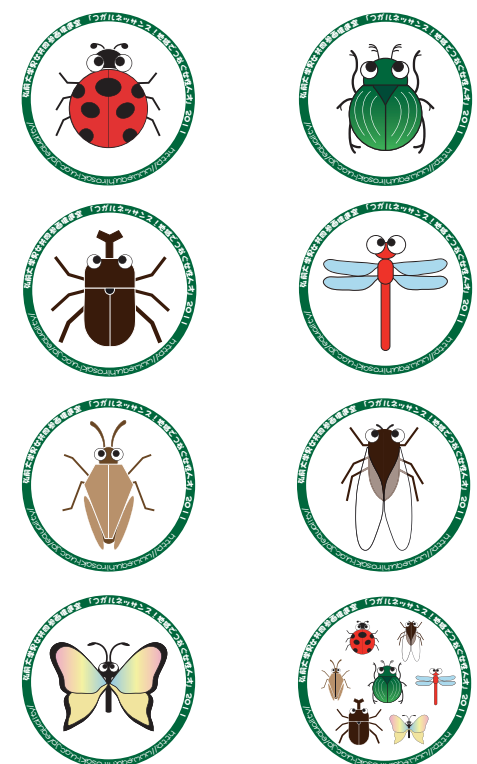


あし ちようやく かがく
~虫の跳躍を科学する~
みんぞ! あつまれ~!!
バッタのジャンプ大会
やいまあよ!

じかん ここ
時間: 午後2時~4時

- 自分のバッタ持込みオッケーだよ!
- どのバッタがよくジャンプするかな?
- バッタはスタッフが用意しているよ!

弘前大学男女共同参画推進室



森の探検隊

2012
3/10
日 祝祭日

コース 早稲田・田代地区
早稲田・田代地区の自然環境をフィールドに、「環境啓発」「自然体験」「健康づくり」などを目的とした楽しい一日を過ごしてみませんか。

参加費 参加費：親子1組500円（材料費・保険料）
※小学生以下は保護者同伴で参加してください。

服装 早稲田・田代地区の自然環境をフィールドに、「環境啓発」「自然体験」「健康づくり」などを目的とした楽しい一日を過ごしてみませんか。

早春の大崎町早瀬野・島田地区をフィールドに、「環境啓発」「自然体験」「健康づくり」などを目的とした楽しい一日を過ごしてみませんか。残雪の里山には、森の小動物の足跡や小鳥の囀り、気の早い霧の雲（ふきのとう）も顔を出し始めています。冬のなごりと早春の息吹を感じながら、みんなで楽しくのんびり歩いてみませんか？

お申し込み方法 申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。
お申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。

お申し込み方法 申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。
お申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。

お申し込み方法 申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。
お申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。

お申し込み方法 申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。
お申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。

お申し込み方法 申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。
お申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。

お申し込み方法 申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。
お申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。

お申し込み方法 申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。
お申し込みは、お申し込みフォームからご参加ください。

白神山地で学ぶ 親子で植物観察&草木染め体験講座

2012年9月8日(土)
10:00 ~ 16:00
(雨天決行)

場所
弘前大学白神自然観察園
弘前大学文京キャンパスから送迎バスを運行します。
(正門前から9時出発、事前予約が必要です。)

対象：親子（小学生以上）10組（各組4名以内）
参加費：1人500円（材料費・保険料）
服装：観察園内を散策できる服
（長袖・長ズボン、靴は山道を歩けるものが望ましい。
天候によっては長靴がよい。）
持ち物：お弁当・飲み物・雨具
申込締切：9月6日（木）

お申し込み 弘前大学男女共同参画推進室
E-Mail: equality@cc.hirosaki-u.ac.jp
Tel: 0172-39-3888 Fax: 0172-39-3889

参加者全員の氏名と年齢、電話番号（当日も連絡がつく番号）、送迎バス希望の有無をお知らせください。

内容に関するお問い合わせ
Tel/Fax: 0172-39-3706（山洋）
※不在が多いので、留守電にご連絡先をお知らせください。

様々な植物で染めたハンカチ

弘前大学白神自然環境研究所附属白神自然観察園・男女共同参画推進室「つがりネッタンズ」地域でつなぐ女性人材活用推進

4. 理系研究者の裾野拡大

理系かも？とおもったら...

～理系の進路いろいろ～

サイエンスコミュニケーター 内田 麻理香 氏

プロフィール
1974年千葉県生まれ。東京大学工学部応用化学科卒、
同大学工学部応用化学専攻修士課程修了。サイエンスコミュニケーターとして、理系研究者の裾野拡大を目的とする「理系女子ネットワーク」で学生生活を科学する「主婦と科学」を連載。弘前大学工学部広域基盤特任教員を経て、現在はサイエンスコミュニケーターとして、各地の科学普及活動に多岐にわたって活躍中。「イエンサー」(NHK教育)、「理系一歩がけたい」(NHK)、日本女子大学、朝日出版、書籍に「つがりネッタンズ」(理系女子ネットワーク)「つがりネッタンズ」(理系女子ネットワーク)「つがりネッタンズ」(理系女子ネットワーク)。

サイエンスコミュニケーターとして、TV等で活躍する内田麻理香氏が、理系の進路の多様性について語ります。
理系の活躍の場は喜ばしい！
あなたも実は理系かも？

日時
オープンキャンパス
8月8日(水)
午前の部
11:00 ~ 12:00
午後の部
13:00 ~ 14:00

会場
創立50周年記念会館 2F
岩本ホール

会場図:
数理学部 (工学部、理学部、農学部)
工学部 (工学部、工学部)
理学部 (理学部、理学部)
農学部 (農学部、農学部)
人文学部 (人文学部、人文学部)
社会情報学部 (社会情報学部、社会情報学部)
専攻科 (専攻科、専攻科)

パネル展示 (同時開催)
「弘前大学で活躍する女性研究者たち」
場所: 創立50周年会館ロビー
時間: 9:00 ~ 15:00

5. 基盤環境整備

(1) 講演会

文部科学省科学技術振興機構「女性研究者支援モデル育成」「つがるネッサンス」地域でつなぐ女性人才

弘前大学「つがるネッサンス」地域でつなぐ女性人才 キックオフ講演会
男女共同参画推進室設立1周年記念講演

学びやすく働きやすい大学へ

講演 京都大学の挑戦

～研究者の現状と大学における男女共同参画～

稲葉 カヨ氏 京都大学大学院生命科学学研究所教授

日時：平成22年10月8日(金)14:00～16:00
場所：弘前大学コラボ弘大8階 八甲田ホール

プログラム

1. 開会挨拶：遠藤 正彦 弘前大学長
2. 来賓挨拶：山村 廣子氏 独立行政法人科学技術振興機構「科学技術振興調整費プログラム玉管(科学技術振興調整費プログラムオフィサー)/博士 科学技術振興調整費について
3. 主催者挨拶：杉山 祐子 弘前大学男女共同参画推進室長/人文学部教授
講演会の趣旨説明と本学の科学技術振興調整費「つがるネッサンス」地域でつなぐ女性人才 採択について
4. 講演：稲葉 カヨ氏 京都大学大学院生命科学学研究所教授
京都大学の挑戦～研究者の現状と大学における男女共同参画～
5. ディスカッション
6. 閉会挨拶：齋藤 勝之 弘前大学副学長/男女共同参画推進室長

※講演料は別名、交通費を予定しております。是非ご参加ください。(会場：コラボ弘大8階 生涯学習教育研究センター多目的室)

講師経歴：稲葉 カヨ氏

昭和53年 3月 京都大学理学部理学系生物系動物学専攻卒業(京都大学理学部)
平成11年 4月 京都大学大学院生命科学学研究所教授
平成13年 5月 京都大学理学部理学系生物系動物学専攻第一講座准教授
平成18年10月 京都大学生涯学習センター長
平成20年11月 京都大学副学長(男女共同参画推進室 副室長)

入場無料：事前のお申し込み等は不要です。一般の方もぜひご参加ください。

一時託児
あります
無料

一時託児を希望される場合は、9月24日(金)までに「託児希望」と明記の上、jk3888@cc.hirosaki-u.ac.jpにお申し込みください。
※託児事項、お子様の人数、氏名、性別、年齢及び月齢、留意点、電話番号

主催 国立大学法人弘前大学男女共同参画推進室
住所：青森県弘前市文京町1番地
電話：0172-39-3888
FAX：0172-39-3889
E-mail：jk3888@cc.hirosaki-u.ac.jp
URL：http://www.hirosaki-u.ac.jp/equality/

※ご来場の際は、公共の交通機関をご利用下さい。

弘前大学生涯学習教育研究センター・学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム後援

文部科学省科学技術振興機構「女性研究者支援モデル育成」「つがるネッサンス」地域でつなぐ女性人才

弘前大学男女共同参画推進室 第3回講演会

日米の教育研究制度の比較と女性研究者の役割

～医学生物学を中心に～

講師 檜橋 敏夫 教授

アメリカ ノースウェスタン大学医学部分子薬理学 生物化学科 医学博士 (Northwestern University John Evans Professor of Pharmacology)
昭和23年東京大学理学部理学系薬学専攻卒業、東大教員を経て、教職研究活動の場をアメリカに移して約50年。専攻で始めた投薬作用機構研究はライフサイエンスとなっている。また、つく星のナリノミとナリノミ加害作用の発見は、その後のナリノミ研究の礎として一世を築いた。ライフサイエンス加害作用の第一人者であり、多くの賞を受賞している。現在もなお第一線で活躍中であり、日本からの研究者も数多く、の優秀な研究者を育てている。
著書：約20冊、訳書：約500冊。

日時 平成23年6月17日(金) 午後1:30～3:00
場所 弘前大学コラボ弘大8階 八甲田ホール

性別にかかわらず、意欲のある学生が力ををつけ、キャリアを積み、研究者として活躍するには？日本の大学が抱える課題と求められる解決策は？日米の教育研究制度の違いや、豊富なご自身の経験など、世界の第一線で活躍を続けられる檜橋先生のお話からは、未来に向けた多くのヒントを得られることでしょう。研究者を目指している人、留学を考えている人、視野を広げたい人・・・気軽に話をうかがえるようにディスカッションの時間も設けます。直接お話できるまたたいチャンスです。お気軽にご参加ください。

参加無料 どなたでもお気軽にご参加ください。

一時託児あり 無料

ご希望の方は、6月9日までに「託児希望」と明記の上、メールでお申し込みください。
E-mail：equality@cc.hirosaki-u.ac.jp
記名事項：お子様の人数、氏名、性別、年齢及び月齢、留意点、電話番号

主催 国立大学法人弘前大学男女共同参画推進室
住所：〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
電話：0172-39-3888 FAX：0172-39-3889
E-mail：equality@cc.hirosaki-u.ac.jp
URL：http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/

後援 弘前大学生涯学習教育研究センター
学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム

(2) セミナー

文部科学省科学技術振興機構「女性研究者支援モデル育成」「つがるネッサンス」地域でつなぐ女性人才

弘前大学男女共同参画推進室 第4回セミナー

光の研究・教育に魅せられて

～未知へ挑み創成する梁と人材育成～

物理学者として多くの業績を残され、また、たくさんの研究者を育ててこられた小館香椎子先生をお迎えし、研究と結婚・出産・子育てを両立させてきたご自身のエピソードも交えながら、「研究のおもしろさ」「教育の醍醐味」をお話しいただきます。

先生に気軽に質問したり、發言や意見交換ができるトークタイムもあります。文系・理系、男女を問わず、学生、教職員の皆さん、一度じっくり「研究」「教育」について考え、語り合ってみませんか？

講師 小館 香椎子 氏
(独)科学技術振興機構男女共同参画推進室
日本女子大学名誉教授、工学博士

日時：平成23年12月7日(水)
午後1時30分～3時
場所：弘前大学コラボ弘大8階 八甲田ホール

講師プロフィール
日本女子大学名誉教授理学部物理学科(独)物理専攻(卒業、東京大学工学部電子工学科助手)独「日本女子大学理学部物理学科教授、日本女子大学理学部教授」
専門分野：超伝導材料エレクトロニクス、第20期「21世紀日本学術会議委員、同「科学者委員会男女共同参画委員委員長、専攻指導員委員会委員(独)教育、高等教育振興機構「部門主任」(以て)国際学術会議「フェロー」、SIP1「(独)理工学アカデミー」、文化政策委員会「学術委員会」多数を歴任。
内閣府「学術会議」(男女共同参画推進)委員、文部科学大臣官舎「科学技術振興、研究大会」委員多数。

主催 国立大学法人弘前大学男女共同参画推進室
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
TEL 0172-39-3888 FAX 0172-39-3889
E-mail equality@cc.hirosaki-u.ac.jp
URL http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/

後援 弘前大学生涯学習教育研究センター
学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム

参加無料
どなたでもお気軽にご参加ください

無料託児
ご希望の方は、11月22日(火)までお申し込みください

文部科学省科学技術振興機構「女性研究者支援モデル育成」「つがるネッサンス」地域でつなぐ女性人才

「理科の先生」をめざしているあなたへ

北海道大学 理系履修キャリアセンターの啓蒙
「専攻を志すに、さまざまな専攻分野の奨励を申し込んでいる北海道大学の理系履修キャリアセンター」
「専攻は、有難無しの専攻分野に決まっています。じっくり選べるフリータークの機会もあります。この機会に、是非ご参加ください！」

科学の楽しさ伝えたい

第5回男女共同参画推進室セミナー

日時：平成24年6月12日(火)
14:30～15:30
この後、履修1630までフリーターク

会場：教育学部203講義室

特別参加：前多 隼 氏
農学生命科学部生物資源学 助教
元理系履修キャリアバンメンバー

講師 有賀 早苗 氏
北海道大学 大学院農学研究院教授、副学長
女性研究者支援室長 医学博士
薬理生化学(奨励)・中・高、上野大学助、東京大学助教授(理学部)、京都府立大学助教授、フェリス学院女子大学理学部助教授、専攻主任、理系履修推進室長、理系履修推進室長として2003年より現職(大学後援者研究奨励院、専門4分子生物学・生化学・細胞生化学、および細胞増殖制御因子をターゲットとした、癌化・死の調節機構を原核細胞を中心に解析、哺乳類とヒトとの細胞増殖制御機構の共通性の解明を分子・細胞レベルで進めている。女性研究者支援促進室(近年)の主要講師の一つだ。先生に動員する市民を相手に上手に研究を推進に貢献したいと願っている。

主催：弘前大学男女共同参画推進室
後援：弘前大学生涯学習教育研究センター
学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム

(2) 北東北国立3大学連携推進協議会・男女共同参画推進合同シンポジウム

文部科学省科学技術人材育成費補助金 女性研究者研究活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）
弘前大学「つがルネッサンス！地域でつなく女性人才」

平成24年度北東北国立3大学連携推進会議連携協議会 男女共同参画合同シンポジウム

北東北地域大学間連携による 男女共同参画の推進に向けて

平成24年12月21日(金)
13:30 ~ 16:00

弘前大学創立50周年記念会館 2F
「岩木ホール」

- 13:30 開会挨拶 弘前大学長 佐藤 敬
- 13:40 基調講演
「大学における男女共同参画と女性研究者支援について」
講師：山村 康子氏 (JST 科学技術システム改革事業 プログラム主管)
- 14:10 休憩 (10分)
- 14:20 パネルディスカッション
北東北地域の男女共同参画の推進にむけて
秋田大学、岩手大学、弘前大学のさらなる連携を拓く
～共通する取り組みと課題からみえるもの～
- 15:55 「弘前宣言」採択
- 16:00 閉会

同時開催
パネル展
国内外で活躍する弘前大学の女性研究者たち

無料託児室
事前申込みが必要です
締切: 12月12日(水)
お申し込みは
常任秘書長事務室へ

対象
弘前大学教職員
連携機関教職員
北東北のみならず



主催：国立大学法人 弘前大学
共催：秋田大学 岩手大学
学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム
後援：青森県 弘前市

お問い合わせ/無料託児室申し込み
弘前大学男女共同参画推進室 TEL: 0172-39-3888 E-Mail: equality@cc.hirosaki-u.ac.jp URL: http://equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/

7. さんかくつうしん

弘前大学男女共同参画推進室 さんかくつうしん Vol.1 ～ news letter ～

目次

- 室長ごあいさつ
▶▶▶ 1 ページ
- 弘前大学の男女比率の現状
▶▶▶ 2 ページ
- お知らせ
～講演会のご案内～
～ポスター・ロゴマーク募集～
▶▶▶ 3 ページ
- 男女共同参画推進室のご案内
▶▶▶ 4 ページ

室長ごあいさつ

さまざまな立場の人が、学びやすく働きやすい弘前大学へ
2009年10月1日、弘前大学に男女共同参画推進室が発足しました。大学全体で、男女共同参画を進めるためです。
男女共同参画は、性別にかかわらず、個人がその個性や能力を充分に発揮できる社会をめざす取組みで、国際的にも重要な課題になっています。1999年に男女共同参画社会基本法が制定されていり、国内でもさまざまな取り組みが進められてきました。
弘前大学でも、学生相談制度の整備、育児休業や介護休暇制度、学内保育園の設置など、いくつかの取組みをおこなってきました。ただ、それらの情報は散在していて、使いにくい状況だったといえます。また、そのような制度があることを知っていても、期限への連絡や環境の不自由さから、実際には利用できないという側面もありました。
こうした不具合を乗り越え、多様な立場にある人びとが、学びやすく働きやすい環境を整えるには、どんな取組みが必要なのか、それを考えるのが、男女共同参画推進室の役割です。多様な学びと働きかたの質を保障することは、教育研究機関としての大学の質と活力を高めます。
いま、弘前大学男女共同参画推進室では、学生や教職員を支援する学内の制度や取組みの情報を集めています。さらに青森県や弘前市が実施してきた男女共同参画の施策についての情報を収集し、これらを一本化することで、必要な情報にアクセスしやすい仕組みを作ることをめざしています。
男女共同参画推進室には、職員が常駐し、ホームページの開設や連絡業務に力を注いでいます。今後は、講演会なども計画していますので、どうぞお楽しみください。
みなさんのご協力をご支援をお待ちしています。

弘前大学男女共同参画推進室
室長 杉山 祐子



弘前大学の男女比率の現状

●教員現状

図1 学部専任教員別教員数と女性比率 (2014年10月1日現在)

本学教職員の総数は1710名、そのうち女性性は751名で43.9%です。大学教員は683名で女性性は94名(13.8%)、附属学校園教員は104名で女性性は58名(55.8%)です。一方、特別職員・事務職員・技術職員は356名で女性性は97名(27.2%)、コ・メディカルは567名で女性性は502名(88.5%)です。大学教員や事務系職員では女性が少ないですが、附属学校園教員とコ・メディカルでは女性が半数を超え、特にコ・メディカルでは約9割が女性です。本学の教職員の男女比率は、子どもの養育・教育や看護を担うのは女性であるという固定的な性別役割分担・分業を反映しています。

図1に学部専任教員別の教員数と女性比率を示します。女性の大学教員は学部等により異なり、保健学研究科では女性性が41名(41.8%)と多いですが、理工学研究科では2名(2.3%)、農学生命科学研究科では3名(4.3%)、医学研究科では8名(5.6%)と非常に少ないです。この結果は全国平均(平成20年度学校基本調査 文部科学省)の傾向つまり医学・歯学以外の保健分野では女性教員が多く、工学・理学・農学分野では少ない(特に工学分野では7.3%)と類似していますが、本学の結果はそれをさらに上回っています。

●学生現状

図2 学部学生数と女性比率 (平成21年10月1日現在)

図3 大学院学生数と女性比率 (平成21年10月1日現在)

図2に学部学生数と女性比率を示します。学部学生の総数は6013名、そのうち女性性は2679名で44.6%です。学部ごとにとると、女性比率の高い学部は教育学部687名(66.6%)、医学部保健学科学科514名(60.9%)、文学部763名(52.5%)であるが、理工学部、医学部医学科、農学生命科学研究科では女性比率が半数以下で、特に理工学部221名(17.1%)では他の学部比べて低い割合です。

図3に大学院学生数と女性比率を示します。大学院生の総数は701名、そのうち女性性は215名で30.7%であり、学部学生に比べて女性比率は低いです。研究科毎にみると、女性比率の高いところは教育学研究科45名(61.6%)、保健学研究科44名(52.4%)ですが、他の5つの研究科では女性比率が半数以下で、中でも理工学研究科では17名(8.5%)と他の学部比べて非常に低い割合です。

学部学生や大学院生の女性比率は全国平均の傾向とはほぼ同じですが、本学では学部学生の女性比率がそれより3.5ポイント高いことは特徴といえます。

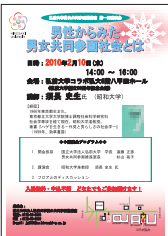
以上のごとく、本学ではコ・メディカルを除く教職員の女性比率が13.8%と低く、学部学生や大学院生の女性比率がそれ44.6%、30.7%と比べて極めて低いことは、特に女子学生への今後の教育や将来に向けての職業選択に少なからず影響を与えると推測されます。一方、コ・メディカルの女性比率の高さも同様で、特に女子学生への影響が懸念されます。さらに、「弘前大学男女共同参画推進基本計画」(平成21年8月3日策定)には「女性教員比率を2015年までに20%に向上すること」として、目標達成のための積極的な取組みは緊急の課題です。

お知らせ

～講演会のご案内～
～弘前大学男女共同参画推進室 第1回講演会～
「男性から見た男女共同参画社会とは」
2010年2月10日(水) 14:00～16:00 弘前大学コラガ8F 八甲田ホール

～ポスター・ロゴマーク募集～

弘前大学では「男女共同参画社会基本法」の精神にのっとり本年10月1日に弘前大学男女共同参画推進室が発足しました。これを契機として弘前大学に学び働くすべての人々が性別によって不当な差別を受けることなく個人の能力を最大限発揮できるような環境づくりに全力を挙げ取り組むこととなります。弘前大学男女共同参画推進室では発足にあたりその理念を皆さんに広く知っていただき、より多くの方々に利用していただくため、広報用のポスターとロゴマークのデザインを募集します。採用されたポスターは広報用のポスター、チラシとして、ロゴマークはウェブサイト、各種刊行物およびイベントなどで幅広く使用する予定です。多数のご応募お待ちしております。



ようこそ! 男女共同参画推進室へ



部屋のご紹介

地図

2009年10月1日、弘前大学男女共同参画推進室が設置されました。場所は、総合教育棟1F学生ホールの一画となっており、他大学での男女共同参画への取組みの資料などもございます。お気軽にお越し下さい。大きなスペースではありませんが、部屋の一角にお子さんを一時的に遊ばせることのできるスペースも整備中です。つきましては、キッズコーナーに置く絵本のご寄付をお願いしたいと思いますので、男女共同参画推進室までご連絡下さい。

構内地図 (文京町地区詳細)

総合教育棟 1F 学生ホール
男女共同参画推進室

800字程度)をワード文書で添付してください。
・件名は、「ポスター応募」あるいは「ロゴマーク応募」とし、所属学部、学科、学年、電話番号も電子メールの署名欄などに記載してください。
・両部門とも1A3作品まで応募することができます。

■応募期間
2009年12月7日(月)～2010年2月26日(金)必着

■審査方法および割賞
弘前大学男女共同参画推進室ポスター/ロゴマークコンテスト審査委員会にて厳正に審査します。
(最優秀賞) 各1名 図書カード5万円
(優秀賞) 若干名 図書カード5千円
(佳作賞) 若干名 図書カード1千円

■審査結果
結果発表 2010年3月23日(火)
両部門とも総合教育棟1F弘前大学男女共同参画推進室前掲示板、医学研究科総合研究棟学術前掲示板、保健学研究科学生及び大学院前掲示板に結果を掲示します。受賞者には電子メールでご連絡します。

■応募作品の取り扱いについて
応募作品は返却しません。
応募作品は未発表のオリジナルであり、また、第三者の著作権や商標権等を侵害しないものに限り、採用された作品の著作権は本推進室に帰属します。採用された作品は本推進室の責任のもとに若干の変更などをすることがあります。
応募者の個人情報は厳重に管理し、ロゴマークの選考作業以外には使用しません。

■応募窓口 (電子メール送信先)、お問い合わせ先
〒036-8560 弘前市文京町1
弘前大学男女共同参画推進室
TEL: 0172-39-3888 FAX: 0172-39-3889
E-mail: jm3888@cc.hirosaki-u.ac.jp (担当:藤田)

弘前大学男女共同参画推進室
〒036-8560 青森県弘前市文京町1
電話 0172(39)3888 FAX 0172(37)3889
Email: jm3888@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学男女共同参画推進室

さんかくつうしん

Vol.3 特別号 特別号 2010.10

～news letter～

女性研究者支援モデル育成事業 「つがルネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の標榜と実施に書せて



国立大学法人弘前大学
学長 遠藤正彦

私は、学長職にありながら、本学医学研究科の兼任教授としてある講座に所属し、講義を受け持ち、研究もしている。この実験講座には2人の女性技能補助員、いわゆる実験助手が活躍している。兩人とも育児中であり、様々な子供の問題に日々対応していることを知る。

この2人はいずれも4年制大学の理系学部を卒業したが、うち1人はさらに修士課程を修了しており、研究職に就きたいという強い願望があったと聞く。地方都市・弘前で研究職を求めるのは容易ではない。それでも、兩人とも、研究することの緊張と楽しさを感じてがんばっているように見受けられる。それは常勤の男性研究者と何ら変わることはない。

この兩人のように、研究を続けたいという強い願望があっても、それは本人の強い意志と健康だけで成り立たず、配偶者や職場の理解等が不可欠である。また、何よりも研究と育児の両方を支える仕組みが必要である。この兩人の例から、私は自分の最たる身近な問題として、この弘前市での女性研究者の問題は容易ならぬものがあると感じている。学長として何が出来るのだろうか。

このような問題意識から、平成21年10月に、弘前大学男女共同参画推進室を設置し、平成22年度の科学技術振興調整費の女性研究者支援モデル育成事業にも応募した。新たに弘前大学男女共同参画推進基金も設置した。幸いにもこの提案が採択され、少ずつ施策が動き出している。これを機にさらに全学的な取り組みを進めていくことによって、弘前大学を人才の育つ広場にしたい。

弘前大学の男女共同参画の推進 -ひろばは「ダイバーシティ」をいっそう進めます-



国立大学法人弘前大学
総務担当
男女共同参画担当理事
薬科勝之

2009年、弘前大学は男女共同参画推進基本計画と男女共同参画宣言を策定、公表した。

日本はかつて、「すべて国民は法の下に平等一人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。」(憲法14条)と定め、「個人の尊厳と両性の本質的平等」(憲法24条)を謳った。それから60数年を経て、近年ようやく、その具体的に有効な実施段階になったといっよだらう。

表現は異なるが、近年の「ダイバーシティ(多様性)」の受容という新しいコトバとその考え方は、その精神と符合し、その内容を的確に言い表し、行動に結びつけているように思える。人はコトバで世界を知り、そのコトバが心を開く。わが弘大も、このダイバーシティを念頭に置いての基本計画と参画宣言のもと、「つがルネッサンス！地域でつなぐ女性人才」の事業を展開し始めた。

あらゆる意味で、中央と地方の格差が集約している北辺の地方国立大学だが、この地方だからこそできることがあるだろう。弘大のルネッサンスである。智慧を出し合い、力を合わせて進めたい。

なにがどうなる? 「つがルネッサンス！」

つがルネッサンス-津軽ルネッサンス
いま、私たちがもっているものも恋にして、人才(才知ある人々)を育てる神髄可能なしくみを作ろう、というのが、この提案の元になる考えです。めざすのは、弘前という地方都市の条件を生かしたワークライフバランスです。「万輪の人」を理想としたルネッサンス国にならえたい。

使える「資源」をネットワーク
弘前にあるもの何でしょうか? 街はコンパクトだし、子育て・介護やその他生活上の行政や民間の支援もいろいろあります。学内でも色々な制度があるのを知っていますか? これらの「資源」を相互につなげば、もう少し有効に使えそうです。このようなネットワークは「女性研究者」にだけでなく、弘前大学で学び働く多くの人にとっても役立つしくみづくりの基盤になります。

なにがどうなる? ネットワーク作りによる情報の流通促進

知れず使えぬ引取りの制度
学内のいろいろな制度、行政や民間の支援など、何かあるのか、誰が対象にしているのかは意外に知られていません。これらの情報を集め、制度にアクセスしやすい工夫をします。相談窓口も開く予定です。

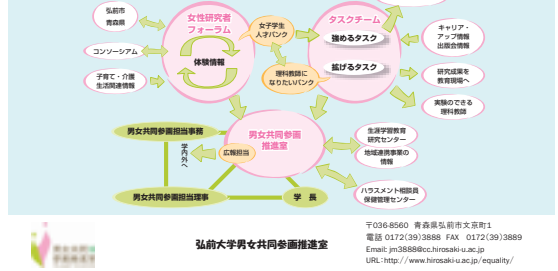
こんなキャリアも、ロールモデル提示と研究スキルアップ支援
女性研究者フォーラムでは、世代や拠点を越えた女性研究者の交流を通して、研究生活やキャリア形成についての情報流通を促します。先輩研究者の姿はこんなキャリアもありというモデルにもなるでしょう。

裾野を広げるタスクチーム
男女問わず関わるタスクチームの活動には、学外向けの地域連携事業等とのネットワークで、研究力を高め、次世代の裾野を広げるねらいがあります。

使ってどう? の情報交換
使ってみた体験情報は、推進室に書誌し甲等で紹介しします。

地域との距離も近い 地方都市だからこそ、できることがいろいろあるはず
学外とのネットワークもつなげばさらに緊密に作れる可能性があります。地方都市だからこそその良さを活かせば、できることはもっと広がるはず。

弘前大学を人才の育つ「ひろば」へ



さんかくつうしん

～News Letter～ vol.5



「Science」の面白さを伝えるために、弘前大学で開催されている理系のイベントをつなげ発信します。

まず第1回は、世界自然遺産「白神山地」の裾野からイベントをご紹介します。

白神の植物標本作成講座

6月18日、さわやかな風が吹く世界自然遺産「白神山地」の裾野に位置する弘前大学白神自然観察（教育施設）にて、植物標本作成講座を開催しました。この講座は「つがるリネッサンス」地域でつなぐ女性人財の事業のひとつである理系離れ対策の一環として、ラボ/プロジェクト（教育向上プロジェクト）と連携し、白神自然環境研究所、教育学部と合同で開催したものです。講師は白神自然環境研究所の山本洋貴先生でした。

また、教育向上の目的からイベント補助者を募集し、理科教師を目指す理工学部・農学生命科学部の学生4人が理科実習における指導技術を学びました。



Page 1

白神の植物標本作成講座.....1
セミナー開催のお知らせ.....1
「研究でのおもしろい」(仮題).....1
講師：日本女子大学名誉教授 小畑 香根子.....1
「つがるリネッサンス」地域でつなぐ女性人財の事業.....1
第1回白神自然環境観察.....3
第2回白神自然環境観察.....3
第3回白神自然環境観察.....4
第4回白神自然環境観察.....4
第5回白神自然環境観察.....4

セミナー開催のお知らせ

「研究でのおもしろい」(仮題)

講師：日本女子大学名誉教授 小畑 香根子
科学技術振興機構女性共同推進プログラムアドバイザー(農林食品工学)

2011年12月(水) 13:30～15:00
弘前大学コラテホール 8甲田ホール

今回のセミナーでは、物理学者として情報フォトリニクス分野で活躍された、また多くの研究者を育ててこられた小畑香根子先生をお迎えします。

研究と結婚・出産・子育てを両立させてきた先生ご自身のエピソードも交えながら、「研究のおもしろい」「教育の醍醐味」とお話しいただきます。

懇話会に質問や発言ができるトークタイムもあがります。

文系、理系、男女を問わず、学生、教職員の皆さん、一度じっくり「研究」「教育」について考え、語り合ってみませんか？

◆ななでもお気軽に参加ください◆
◆懇話会◆
◆無料観覧券(要予約)◆

女性研究者フォーラム

スピンオフ企画「メイアップ講座」を開催しました！

講師：学生支援センターコンシェルジュ 小田桐 華沙子さん
日時：2011年8月9日(火)
1回目 11:00～12:00
2回目 13:00～14:00
参加人数：1回目・2回目合計96名

オープンキャンパスに訪れた女子高校生だけでなく、弘前大学の女子学生や女子教員の参加も多数ありました。講師の小田桐さんから、好意の持てるメイアップとそれを伝える服装な話をスピンオフについて、実践を交えた説明がありました。就職活動にも使える、社会人のたしなみとしての「上品かつ目的のあるメイク」の実践のために、人文学部4年生の女子学生2名がメイアップモデルとして協力していただきました。



Page 1

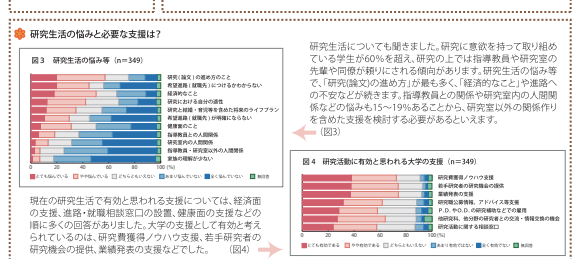
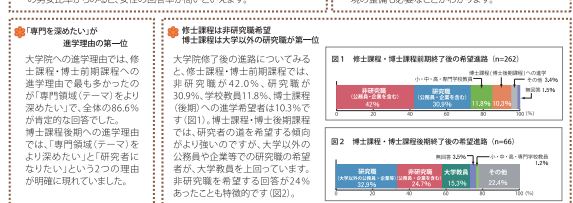
平成21年度大学院生アンケート調査と「つがるリネッサンス」

「つがるリネッサンス」に活かされた大学院生のニーズ調査
平成22年度から展開中の科学技術振興機構女性研究者支援モデル育成事業「つがるリネッサンス」地域でつなぐ女性人財の事業は、平成21年度に大学院生を対象としたアンケート調査の結果が発表されています。

実施した調査について

大学院生が、性別や年齢等にかかわらず、研究活動を活発に行うための支援ニーズを知るために平成21年度に実施したのは、「研究継続と生活化のための男女共同推進講座に関する調査」です。配布したアンケートは504部で、350部の回答がありました(回収率69%)。

回答の内訳は、修士課程が74%、博士前期課程が11.5%、博士後期課程が12%でした。専門分野別では、回答者の85.7%が「理系」大学院生でした。性別別では、男性からの回答が67.9%、女性が31.8%で、大学院生全体の男女比からみれば、女性の回答率が高いと言えます。



「つがるリネッサンス」に反映されたことは？

弘前大学では、すでに学内保育園をもち、「弘前大学特別研究員制度」や独自の奨学金制度なども進めています。それに加えて「つがるリネッサンス」では、研究スチアアップができる環境、学部や世代を超えたネットワークを構築しました。アンケートで希望があった、女性用トイレや更衣室などの環境整備についても、担当課制による進捗を把握しています。今後「つがるリネッサンス」ホームページに、学内外の支援制度や助成金情報等がまとめて得られるページも開く予定です。どうぞご利用ください。

さんかくつうしん

「つがるリネッサンス」の女性研究者たち vol.2

めざすは「プラナリアの何でも屋」

「生命にかかわる研究」を志す

このコーナーでは、弘前大学で活躍する女性研究者をご紹介します。

農学生命科学部 生物学 教授 石田 幸子 Sachiko ISHIDA

「学生退職を退きました。これまでに23歳の結婚して、26歳までに娘を二人出産しました。赤ちゃんと一緒にベビーホームという保育園に預けて、すぐ仕事に復帰しました。子どもを大学に出すときに預けて、帰りは遅くなるので、お姑さんにお世話を頼みました。お姑さんがいてくれたら仕事も楽な気がしたんです。

実は10年前に離婚したのですが、お姑さんは、息子とはなく、私たちと暮らすと、それらすべて一緒に暮らす。10年前に専断してから就職してお世話をしているのも、今10歳で完結です。お姑さんは生きていて、私たちは仲良く、ケガはほとんどしたことがありません。

娘たちは、それぞれ良い相手を見つけて若いうちに結婚しました。その後私は、ますます自分の仕事に打ち込めるようになり、今はワークライフの生活を楽しくしています。

研究は、どこまで行っても終わりがありません

とは、え、プラナリアの再生能力については比較的研究されています。それ以外のことはあまり研究されていません。

石田先生は一冊に書いた「プラナリアの生物学」(共出版1987年)と、プラナリアの全図を網羅した総合的参考書で、言わば「プラナリアの何でも屋」を志したのです。

日本には二人一組の淡水性プラナリアがあり、北海道には7種、秋田県では4種生息しています。また、北海道で発見した新しいプラナリア種もいます。漸くは再生プラナリアも生息しています。そうして、再生生物学のメカニズムについても、それぞれ種間によっていろいろと違ってくるので、まだまだ研究したいことがたくさんあるのです。

研究者にテクニカルサポートを

女性研究者が子育てと仕事を両立させていくために、実現してほしいと思うことはたくさんあります。

まずは、育児休暇などを取りやすくなるために、休暇期間中、代わりに講義や学生実験をつらづくことができるようにしてほしい。たとえ私を例にとり、集中講義でもよいので、私の代わりに発生生物学を担当して下さる方がいればありがたいです。女性研究者が気軽に長期休暇をとれるようなシステムがあれば役立つと思います。

それから、子育て期間は、早い時期に帰って来ようというよりは、戻らばいいと思います。会議が夕方の5時40分から始まるというのでは、育児中は入りませんよ。

さらに、事務的なサポート研究のテクニカルサポートをしてくれる人がいなければいけません。講義で、多人数の学生に提出状況を伺うエクセルしたり、事務的な作業を代行したり、研究でやるべきことを、実験器具を借りたり、何から何まで一人でやらなければならないので大変です。テクニカルサポートをして下さる人は、自分以外のお金で雇用されていて、すいませんで申し訳ありません。

意欲があるなら躊躇なく結婚・子育てを

結婚や子育ては発生生物学的に立って、生き物は子孫を残すようにできているので、女性研究者も結婚して子育てをしても構いません。子育てが楽しいと思えば、そうしたい意思があるのなら、躊躇なく子育てを(結婚して、なるべく早く子供を産んで、なるべく体力があるうちに子育てをしたらいいんじゃないでしょうか。理系に限らず、やりたいことを早く見つけて、研究を続けたい。好きな道なら頑張りますから。(このインタビューは平成23年7月2日に行いました。その後、お姑さんは初めて101歳の誕生日を迎えられました)

さんかくつうしん

もっと知りたい！ 職員のための使える制度

勤務時間をずらしたい！

一育児又は介護に伴う早退出勤勤務制度

弘前大学の基本的な勤務時間は、8時30分から5時15分まで(1時15分から1時30分まで)となります。しかし、お子さんを幼稚園に通わせてから出勤したいので勤務時間を9時から1時30分にしたい、または、ご家庭の介護に当たるため、水曜日に勤務時間を8時から16時半にしたいという場合もあるのではないでしょうか。

この制度は、職員が育児又は介護を行うために、勤務時間の長さやそのままとし、始業時刻を早(午)後(前)に繰り戻すことができます。また、選出する場合は勤務開始前(午後10時以前)に制度を申請します。未承認児童をお持ちの場合、「放課後児童クラブ」にお子さんをお預けしに行く職員が利用できます。その他、業務に支障がないことと条件とされており、事前申請が必要です。詳しくは併せてご覧ください。

規程の見方「弘前大学HP」→「教職員の方へ」→「弘前大学規程集」→「6.人事関係」→「後編」に「規程第6章」を入力してください。

学会開催時の「英語前置会」始めました！

詳細は、近日ウェブサイトでご覧いただけます。
* 知になる方はチェック★
<http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-nu/>

教職員のための「英語前置会」(仮称)

～子育て・介護・その他身近な事に関する制度・手続情報～
男女共同推進推進室では、教職員のワークライフバランス実現に向けて、子育てや介護等に利用できる制度や手続等の情報をウェブサイトへ掲載する準備をしています。

学校のほか、県や市、地域の情報がほしいです。11月発表予定です。どうぞご期待ください。

「論文投稿助成事業」及び「英文校閲助成事業」廃止のお知らせ

平成22年度に実施していた「論文投稿助成事業」および「英文校閲助成事業」につきまして、科学技術振興機構の廃止に伴い申請いたします。併年度の実施期間が短縮されたため申請もできません。本年度の申請を心待ちにしていた方々もお知らせのことと思います。廃止の届期が過ぎ、ご迷惑をおかけした方には申し訳ございませんでした。

平成23年度の「つがるリネッサンス」地域でつなぐ女性人財は、文部科学省の推進により科学技術人材育成費として継続して実施します。年後とも、よろしくお願ひ致します。

第2回理工学部女子会

数学好きが集まる数理科学科

数学は現代の技術文明の基礎

6月6日に理工学研究科で「女子学生研究会」が開催されました。各学科から選出された女子学生から学科の魅力を聞き、その魅力を最大限に生かして、人材育成や広報活動を行い、「理系女子」を増やすことを目的としていました。今回は数理科学科に所属する女子学生に集まってもらいました。

数理科学科は、その名の通り「数学」を学ぶ学科です。集まった女子学生は皆、数学が好きで、大学4年間好きな数学の勉強をしたいから、との理由で数理科学科を志望してました。数理科学科では、色々な数学の分野を学べ、高学とは違った数学の世界を知ることが出来ます。パソコンを使用し、プログラミングされた数式を数式入力し、「理系女子」を増やすことと、一般的な「数学」のイメージとは違う授業もついています。

理系には英語が苦手な人が多いのですが、予想に反して、多くの女子学生は英語が得意でした。英語の長文を読むのが好き、比較数学が得意と答えてくれた。英語が得意でも英語で苦しかった、とのことでした。英文に対して抵抗がないという点は、英語の苦手な私にとっては驚きです。理系女子は、理系人になっても英語に苦手意識はあっても、数学だけでなく英語の能力もぜひ生かして欲しいです。

印象良かったのは、自分を育ててくれた地域に貢献したいのが職員になりた、という一言でした。「国家公務員の国民全体の奉仕者である」とその職務は国民から委託された公務であるというフレーズを私に話して、「国家公務員としての責任を考えると、公務員になり、うにしたい」と思う学生が多いことに感謝しています。(理工学研究科 藤原里美)

知になる！ 理工学部女子会はここから！
<http://www.st.hirosaki-u.ac.jp/mirai/ist.html>

さんかくつうしん

~News Letter~ vol.6

Work-Life-Balance <http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/tsuga-ru/care/>
教職員のための制度・手続き情報ナビ
ウェブサイトで公開されました!

教職員のワークライフバランスを実現するために
 「育児休業中、給料はどうなるの?」「結婚した時の提出書類は何かあるの?」「介護休暇の手続きはどうするの?」「家族の介護をしながら、仕事を続けることはできる?」など学内の制度や手続き、地域の情報について知りたひ情報は、情報ナビを活用ください。

<p>妊娠・出産・育児に関する情報</p> <ul style="list-style-type: none"> 妊娠出産に関すること 産前産後休業に関すること 育児に関すること 非常勤職員の情報(産前産後休業) 	<p>介護・介護保険・共済に関する情報</p> <ul style="list-style-type: none"> 介護の休暇・休業に関すること 介護保険に関すること 共済制度に関すること
<p>結婚に関する情報</p> <ul style="list-style-type: none"> 結婚した時の手続きに関すること 	<p>わたしの知りたいQ&A</p> <ul style="list-style-type: none"> 子育てに関すること 健康に関すること
<p>関連機関や団体等一覧表</p> <ul style="list-style-type: none"> 弘前市役所 青森県男女共同参画推進課 青森県労働政策課 	<p>情報ナビへのご意見やご要望など、教職員の皆さんのお声をお聞かせください。</p> <p>連絡先: 弘前大学男女共同参画推進室 equality@cc.hirosaki-u.ac.jp</p>

Seminar Report
「光」の研究・教育に魅せられて
 昨年12月7日(水)、コラボ弘大8階(八甲ホール)にて第4回セミナーを開催しました。独立行政法人科学技術振興機構男女共同参画推進室、日本女子大学名譽教授、工学博士の小宮香穂子氏を講師陣にお招きし、ご講演いただきました。

ご自身の「光」に関する研究についてのお話や、教育者として学生たちのモチベーションを上げて成果につなげる工夫の紹介、さらに、長年にわたって力を注いでられた学会や大学における男女共同参画推進の必要性・課題・解決策など、人とのつながりや大学にもたらした3人の子育てと研究・教育を両立させてきた「先生」の具体的な事例に富むお話、会場を埋めつくす70名の学生・教職員は熱心に聞き入っていました。

(ぜひ「つがれネッサンス!」Webサイトをご覧ください)

KA-GA-KU Report
 “Science”の面白さを伝えるために、弘前大学で開催されている理系のイベントをつなげて発信しています。

2011年度は教育学部ラボ(スプロジェクト・白神自然環境研究所・生進学習教育研究センター)の連携イベントを3行ない、弘前大学総合文化センターも出張しました。

「理系博士養成講座・入門編」では、小学生が昆虫採集やカブトムシの標本作成に挑戦しました。「G7つ弘前大学連続講座」第3回も高橋先生による青森の今とこれからという、特設講座2名が高校生一歩の先を先向きに自分の研究を紹介しました。

また、地元高校からの依頼を受けて昆虫DNAを比較する実験を行うなど、野外活動から実験室まで、幅広い内容でKA-GA-KUの楽しさをとお届けしています。

さんかくつうしん

「つがれネッサンス!」の女性研究者たち vol.3

主婦から研究者への転身

ある日、恩師から電話が
 このコーナーでは、弘前大学で活躍する女性研究者をご紹介します。

母の応援 夫の支え
 助手として本格的に勤めるときには、夫をはじめ、周りみんなが反対しました。唯一「女から仕事を取っちゃだめ。応援するが仕事はした方がいい」と言ってくれたのが、私の母でした。母は自衛隊で1時間の勤務に慣れ、小学生が2人の子供ももちが専業主婦の立場にいて、私が受けていた教育費が自分の労働でまわってくれたのです。夫は自営業の父がライオンで2世代に父から自営業を継いでいるという毎日でした。7年前に父が亡くなった後は母も来れなくなりましたが、前には本当にお世話になりました。

私は、6年前に不況の影響を受けて夫が勤めていた会社が倒産してからは、夫の方の専業主婦としていました。私に何かのきっかけが欲しかったり、出費も多いのですが、彼がやるので安心して仕事ができます。週末には、夫とお酒を飲みながら、たくさん話します。それが私のストレス解消法になって、今は、そういう意味でも、とても支えられていると思います。

これまでの人生が研究に活かせる
 私の研究は「保健」分野なので、データを見て人の行動をどう変えていこうというところが中心の内容です。

青森県南町をフィールドとして行っている研究では、中学生に対して採血を含めた健康診断をした後、保健師や栄養士が母親と子どもを相手し「健康相談」をして、その結果を分析しています。そこでは、私のこれまでの母親としての経験が大いに活かされています。自分の子どもの健康と一貫して、わからないことや疑問点、少しずつ研究という形で自分なりに問題解決したいという気持ちです。

エール ~若い女性研究者たちへ~
 結婚出産後に研究者の道に進んだ私が言えるのは、勉強は、やる気さえあればいつでもできるということです。子どもを育てる期間も短くはないので、少し勉強したとしても、その時の方ができていると大げさにする人も人生ではないでしょうか。それから、「野心」を持ち続けることでも、「野心」は夢という言葉を置き換えることもできます。ああしたい、こうしたいという強い気持ちや、最後まで頑張れる行動力になるように、何かあったら「野心」を持ち続けられれば、きっと何かある、乗り切りたいという気持ちです。

私のことを「野心家だ」と言ったのは夫です。しはしは「え?私?」が7回も続きましたが、その「野心」があったからこそここまで来ることができたと今は思っています。

研究や社会貢献としての事業を立ち上げ、専任で公開講座などで地域の人たちと一緒に活動しています。

さんかくつうしん

平成22年度「部局長アンケート」と「つがれネッサンス!」

「各部局長の現状は?」「つがれネッサンス!」事業へ
 平成22年度からスタートした科学技術振興機構女性研究者支援モデル育成事業「つがれネッサンス!」地域でつなぐ女性たち!」では、学内外の状況を調査し、得られた結果を事業関係者に反響させています。今回は平成22年度に行って、学部長局長を対象としたアンケート調査の結果の一部をご紹介します。

◆ 実施目的について
 「つがれネッサンス!」の開始にあたり、学内の各部署の現状と取り組みの状況を把握するために平成22年度に実施したのは、「弘前大学における女性研究者の比率向上に向けた取り組みに関する部局長アンケート」です。調査対象は19部署で、18部署(うち理系11部署)から回答がありました。

◆ 数値目標について
 「つがれネッサンス!」が設定している、平成24年度女性研究者在籍率15%、採用比率16%という数値目標について、調査部署の達成状況と達成の見込みは、右のようになっています。既に達成している部署を除けば、目標の達成は高いハードルとして認識されていることがわかります。

◆ 困難な理由は応募する女性の少なさ
 プラス地方大学という条件
 それでは、なぜ数値目標の達成は困難なのだろうか、下のような理由(複数回答)が主たるものとして挙げられました。ここでは、「女性研究者の少なさ」という日本の大学に共通する理由に加えて、「交通不便な弘前の立地条件」「配偶者の立場や専任赴任といった本来両方の理由がみられます。

数値目標の達成が困難な理由(複数回答)	回答部署数
採用ポストの少なさ	6部署
女性研究者・女子学生の少なさ	3部署
公募への応募者の少なさ	2部署
交通不便な弘前の立地条件	2部署
配偶者の立場や専任赴任	2部署

◆ 改善のための施策とは?
 弘前大学では、すでに学内保育施設の設置といった施策が行われていますが、これらに加えて今後有効だと考えられる施策(複数回答)として、および男女共同参画部から寄せられました。新規採用者・応募者の増加に加えて、現在在籍している女性研究者の研究継続のための施策もみられます。

今後有効と考えられる施策(複数回答)	回答部署数
女性特定ポストの設置	3部署
ポテンシャルアップ	2部署
女性研究者の成果発表の支援	2部署
定員数の増加	2部署
産前産後・待機など、待遇の改善	2部署

◆ 1年後の現状は?
 「つがれネッサンス!」のスタートから1年あまりが経過し、全学女性研究者比率は13.1%(平成22年度)→13.1%(23年度)へ、採用率も16.0%(平成22年度)→16.0%(23年度)へ向上しました。この間(平成23年4月~12月)新規採用者18名の女性の応募は、全体の14.0%であったのに対し、専任は7.6%、非常勤は24.2%でした。女性研究者の応募のない公募も存在しています。

◆ 全学的な課題の共有は、大きな力となるでしょう。
 この調査から明らかになった課題について、「つがれネッサンス!」では女性研究者が家族と一緒に専任で仕事をする制度、研究スキルアップができる支援、学習や学位を超えたネットワークづくりといった取り組みを進めていく、さらに弘前大学すべての教職員のための制度・手続き情報ナビもオープンしました。これらにより推進させるために、各部署などの進捗と全学的な課題の共有は、大きな力となるでしょう。皆様のさらなるご支援をお願い申し上げます。

Childcare Report
弘前大学男性教員で初めての育児休業取得!
~仕事と育児の両立支援を男性にも~
 全国的に男性の育児休業取得が進んできたにもかかわらず、教育職員の増加に伴って、昨年7月に2人の子供が生まれ、10月1日から1ヶ月間育児休業を取られました。その時の様子、感じたことなどをレポートします。

1 育児休業を希望する理由は何ですか?
 もっとも「わが子の育児に専念するための休みを取りたい」という気持ちでいたのですが、今回は5歳上の娘のため、というの一番大きな理由でした。私が下の娘の育児をする中で、長女のお世話を任せたいという悩みをかかえてやれていなかったと思います。

2 取つてよかったこと、感じたことは何ですか?
 スーパーなど外出先で、おむつ替えスペースが女性用トイレに設けられておらず、不便でした。それから、育児休業期間中、いきなり「お仕事は頑張ってください」と電話がかかってきたのはびっくりしました。働きながら育児に専念していいのは、平日は毎日子どもを連れて職場にいる、男性が仕事をしていけるのは大変な仕事です。

3 この点、男性の育児休業取得が増えたいという思いはありますか?
 男でも育児を取りたいと思っている男性は少なからずいると思います。そのような方々が育児取得に踏み切れるように、「出産して子育てしながら働けた」という女性性のための支援も同時に、「働きながら育児に専念していい環境」を確保していき、男性が育児に専念していい環境を整えていきたいと思います。

4 今後の展望
 これまで3回にわたりましたが、職場の状況や個人の都合で進捗がまちまちで、今後の進捗が楽しみです。また、今後の進捗が楽しみです。

7.さんかくつうしん

弘前大学男女共同参画推進室 News Letter vol.8

平成24年度北東北国立3大学連携推進会議 男女共同参画シンポジウム

さらなる連携に向けて 「北東北地域大学間連携による男女共同参画の推進」が開催されました

2012 Hisaki University Research Support System

好評です！「研究支援制度」

仕事と家庭の両立支援ガイドブック

Forum 第10回女性研究者フォーラム

第11回女性研究者フォーラム

さんかくつうしん

平成23年度「各局局における男女共同参画の取り組み」に関する調査

本学では、すべての教職員と学生が教育・研究・統制と、家事・育児・地域の活動などへの参加とを両立できる...

仕事と子育てのための取り組みを行っていますか？

各会議や委員会(以下、会議)の開催頻度と回数について

さらなる研究、職場環境の整備に向けて

さんかくつうしん

「つがねリサーチ」の女性研究者たち vol.5

向こうから運命にしがやかに

家族5人で4世帯

「働き続ける」が「研究者」に結びついた

教育学部教育政策学 准教授 安川 あけみ Akemi YASUKAWA

「働き続ける」が「研究者」に結びついた

「働き続ける」が「研究者」に結びついた

「働き続ける」が「研究者」に結びついた

「働き続ける」が「研究者」に結びついた

「働き続ける」が「研究者」に結びついた

さんかくつうしん

ワーク・ライフ・バランス インタビュー

子育てや介護などしながら仕事や研究を続けることは難しいと思っ

第5回理工学部女子会

化学の宝庫 物質創成化学科

未来へつなぐ研究開発

12月5日に理工学研究科で「女子学生連絡会」が開催され

物質創成化学科では有機化学、無機化学、分析化学および

物質創成化学科の企業への就職や化学の研究者になりたいと志

物質創成化学科の企業への就職や化学の研究者になりたいと志

物質創成化学科の企業への就職や化学の研究者になりたいと志

物質創成化学科の企業への就職や化学の研究者になりたいと志

物質創成化学科の企業への就職や化学の研究者になりたいと志

物質創成化学科の企業への就職や化学の研究者になりたいと志

7.さんかくつうしん

おわりに

「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」は、地方の利点を生かした女性研究者支援のしくみを構築するための取り組みを進めてきました。今後もこの取り組みを継続し、すぐれた人才の育成を通じて、大学も地域も相互に活力を高めあうことをめざします。

文部科学省、科学技術振興機構はじめ、関係各位、これまでご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

弘前大学男女共同参画推進室副室長

「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」担当 杉山 祐子

文部科学省科学技術人材育成費補助金
女性研究者研究活動支援事業(女性研究者支援モデル育成)

「つがるネッサンス！地域でつなぐ女性人才」

平成 22 年度～24 年度活動報告書

発行 弘前大学男女共同参画推進室

発行日 2013 年 3 月

連絡先 〒036-8560 青森県弘前市文京町 1 番地

T E L 0172-39-3888

F A X 0172-39-3889

U R L <http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/>

E-Mail equality@cc.hirosaki-u.ac.jp



男女共同^{弘前}
参画推進室^{大学}
Hirosaki University

〒036-8560 青森県弘前市文京町1
電話 0172 (39) 3888 FAX 0172 (39) 3889
Email: equality@cc.hirosaki-u.ac.jp
URL: <http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/>